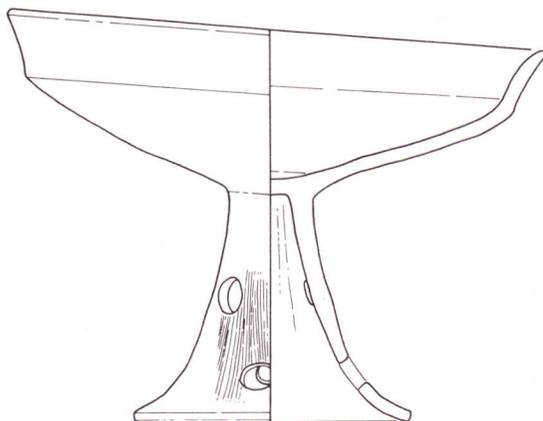


和歌山県 和歌山市

山口遺跡 第5次発掘調査報告書



1990

和歌山市教育委員会

## 出版に際して

山口遺跡は和歌山市の北東部にあり、かつて弥生土器が出土したことから弥生時代の遺跡として考えられてきました。その一郭には和歌山市立山口小学校があることから、校舎の増改築等に伴って昭和57年以来何回かの発掘調査を実施してまいりました。

その間、山口小学校敷地の前身である山口御殿やそれより以前の各時代の遺構が検出されてきましたが、弥生時代の確実な遺構は確認されませんでした。山口小学校プール用地内の発掘調査である本第5次調査に至って弥生時代の遺跡の一端が明確に確認され、今後の本遺跡の取扱いの上においても重要な資料を得ることができました。

第1次から第4次の各発掘調査の結果につきましてもいずれ報告書を刊行する計画ですが、資料の重要性に鑑み、本調査次の報告書を先ず刊行する次第です。

なお、プール設置にあたってはでき得るかぎり遺跡を損わぬよう設計を行い、従って発掘調査は万やむを得ず基礎工事が遺跡に及ぶ範囲について実施しました。よって小規模な発掘調査ではありますが、ここにその結果を広く報告する次第です。本書が郷土に関する歴史知識を豊かにするとともに、日本考古学の進展に役立つことを願ってやみません。

本書出版に際して、発掘調査にあたって多大の御協力をいただいた地元の皆様方にあらためて御礼申し上げるとともに、今後共文化財保護に御理解と御協力を賜わりますようお願い申し上げます。

平成2年3月31日

和歌山市教育委員会

教育長 石垣勝二

# 例 言

1. この報告書は、昭和62(1987)年11月から12月にかけておこなった山口遺跡第5次発掘調査に関する記録である。
2. 発掘調査は、山口小学校のプール建設に伴って和歌山市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査に関わる事務局は次のとおりである(所属等は調査当時)。  
教育長 石垣勝二  
文化振興課長 岡本正茂  
文化振興課文化財班長 松本信明  
文化振興課主査 大野左千夫(調査指導)  
文化振興課主事 小松義博(調査庶務)  
文化振興課非常勤職員 前田敬彦(調査担当)[現・(財)和歌山市文化体育振興事業団学芸員]  
文化振興課非常勤職員 益田雅司(調査担当)[ “ ” ]
4. 遺物整理は下記の調査参加者の協力を得て、調査担当者が分担しておこなった。
5. 本書の執筆および編集は益田雅司の協力を得て前田敬彦が担当した。なお、8ページのP17についての記述は北野隆亮氏〔現・奈良県田原本町教育委員会文化財保護課〕によるものである。
6. 巻末図版の写真のうち遺構写真は、大野・前田が撮影し、遺物写真は前田の撮影によるものである。
7. 現地での調査作業および遺物整理の参加者は次のとおりである。  
北野隆亮・玉井伸明・出縄泰子  
また、調査の実施にあたっては次の方々の協力を得た(順不同・敬称略)。  
谷口良夫・中野義信・近江丈夫・下東利夫・坂口 明・島 正吉・露峰芳楠・竹田みさよ・中野美代子・里村信子・田中次郎・小溪真砂子  
なお、遺跡の地理的環境については和歌山市立博物館学芸課額田雅裕学芸員から多くの指摘を得た。  
また、出土遺物については(財)和歌山県文化財センター土井孝之氏および河内一浩氏からの教示を受けた。記して謝意を表したい。

# 目 次

1. 遺跡の位置と環境	1
2. 既往の調査と調査に至る経緯	2
3. 調査内容	4
(1) トレンチ部	4
(2) 拡張区 1	11
(3) 拡張区 2	14
(4) 出土遺物	16
4. まとめ	35
(1) 周辺の地理的環境と遺跡の範囲	35
(2) S D-10出土弥生土器の位置付け	36
(3) 調査の成果と今後の課題	47
遺物観察表	49
図 版	67

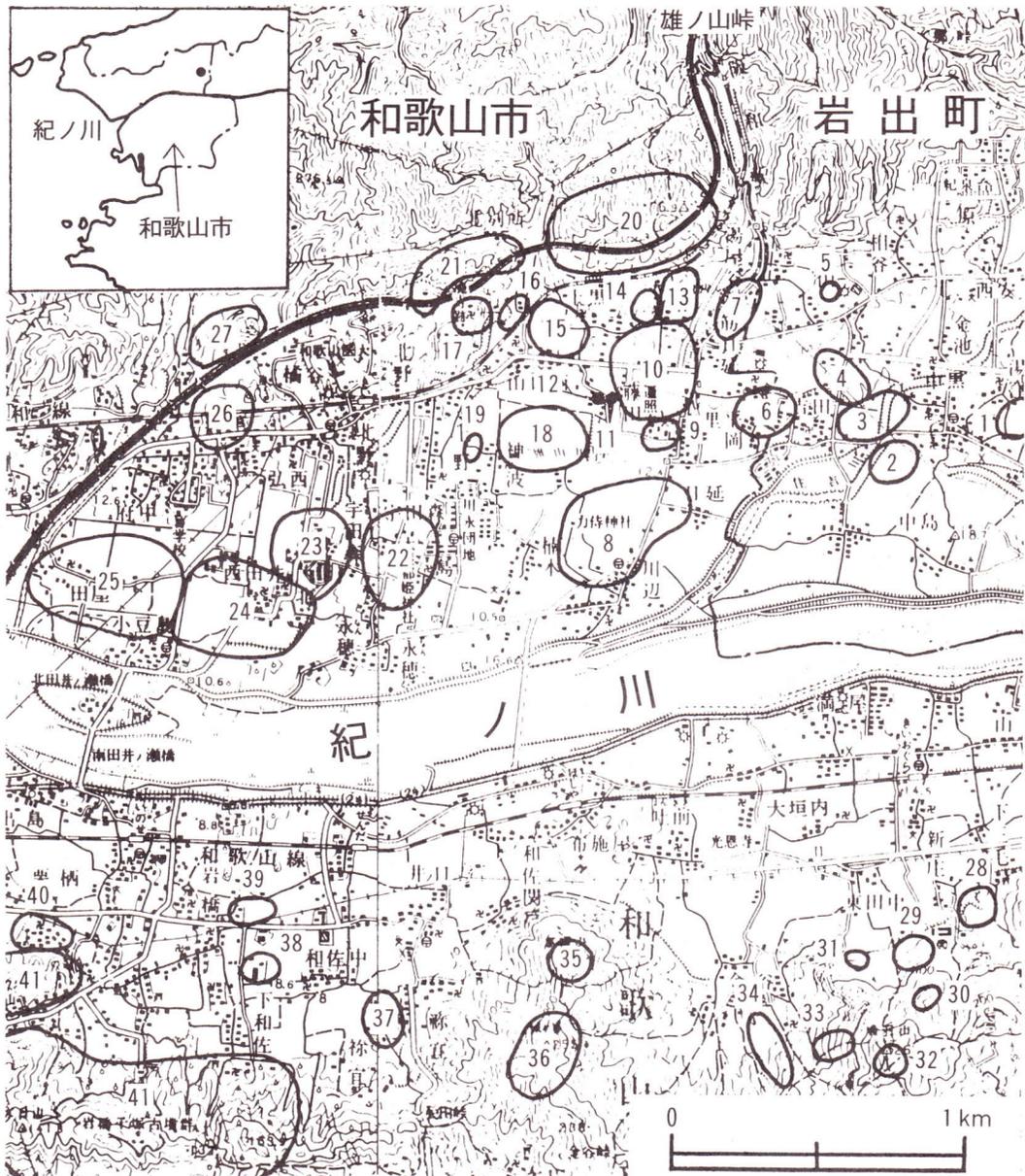
# 挿 図 目 次

第 1 図	周辺の遺跡分布	
第 2 図	藤田古墳竪穴式石室	1
第 3 図	山口廃寺出土軒丸瓦	1
第 4 図	遺跡内の調査地区	3
第 5 図	第 5 次調査の地区割	4
第 6 図	トレンチ部 土層図	5
第 7 図	トレンチ部・拡張区 1 第 1・2 遺構面遺構図	7
第 8 図	トレンチ部 第 3 遺構面遺構図	8
第 9 図	トレンチ部 4 区 P17 実測図	8
第 10 図	トレンチ部 4～7 区 第 4 遺構面遺構図	9
第 11 図	拡張区 1 南壁土層図	11
第 12 図	拡張区 1・トレンチ部 2～3 区 第 4 遺構面遺構図	12
第 13 図	拡張区 2 北壁土層図	14
第 14 図	拡張区 2 第 4 遺構面遺構図	15
第 15 図	トレンチ部・拡張区 遺構埋土出土土器 1	17
第 16 図	トレンチ部・拡張区 遺構埋土出土土器 2	18
第 17 図	SD-10 出土土器 1	20
第 18 図	SD-10 出土土器 2	21
第 19 図	SD-10 出土土器 3	22
第 20 図	トレンチ部・拡張区 2 包含層出土土器 1	24
第 21 図	トレンチ部・拡張区 2 包含層出土土器 2	25
第 22 図	トレンチ部・拡張区 2 包含層出土土器 3	26
第 23 図	トレンチ部・拡張区 2 包含層出土土器 4	27
第 24 図	拡張区 1 包含層出土土器 1	30
第 25 図	拡張区 1 包含層出土土器 2	31
第 26 図	拡張区 1 包含層出土土器 3	32
第 27 図	拡張区 1 包含層出土土器 4	33
第 28 図	拡張区 1 包含層出土土器 5	34
第 29 図	周辺の地理的環境と遺跡の範囲	35
第 30 図	皿形高杯分類の基準	37
第 31 図	皿形高杯の分類	37

第 32 図	船岡山遺跡における皿形高杯・受口状甕の出土状況……………38
第 33 図	田殿・尾中遺跡 溝 2 における皿形高杯の出土状況……………39
第 34 図	主要遺跡出土の皿形高杯の組成と共伴・共存資料……………39
第 35 図	後期を中心とする皿形高杯の組列……………40
第 36 図	皿形高杯の法量変化……………41~42
第 37 図	皿形高杯の法量の地域性……………44
第 38 図	受口状甕の分類……………45
第 39 図	受口状甕の出土状況……………46

## 図 版 目 次

図版第 1 遺 跡	1. 調査区全景(南より)
図版第 2 遺 跡	1. トレンチ部 7 区 東壁土層 2. トレンチ部 3 区 第 4 層上面遺構
図版第 3 遺 跡	1. トレンチ部 3 区 SD-08(南より) 2. トレンチ部 3 区 SD-08
図版第 4 遺 跡	1. 拡張区 1 第 4 層弥生土器出土状況 2. 拡張区 1 西壁土層
図版第 5 遺 跡	1. 拡張区 1 全景(東より) 2. 拡張区 1 SB-01(東より)
図版第 6 遺 跡	1. 拡張区 2 全景(東より) 2. 拡張区 2 SB-02(東より)
図版第 7 遺 跡	1. SD-10(東より) 2. SD-10 西壁土層
図版第 8 遺 跡	1. トレンチ部 4 区 P17 2. P17 柱材遺存状況
図版第 9 遺 跡	1. 拡張区 1 P-29 2. 拡張区 1 P-29 下層 3. 拡張区 1 P-31 4. 拡張区 1 P-30 5. 拡張区 2 P-7 6. トレンチ部 5 区 P-24
図版第 10 出土遺物	弥生土器
図版第 11 出土遺物	弥生土器
図版第 12 出土遺物	弥生土器、土師器、須恵器
図版第 13 出土遺物	須恵器
図版第 14 出土遺物	弥生土器、須恵器
図版第 15 出土遺物	弥生土器
図版第 16 出土遺物	弥生土器、土師器、須恵器、埴輪
図版第 17 出土遺物	弥生土器、土師器
図版第 18 出土遺物	弥生土器



第1図 周辺の遺跡分布

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	山崎遺跡	15	上黒谷遺跡	29	寺山古墳群
2	中黒Ⅱ遺跡	16	上野遺跡	30	宮山古墳群
3	中黒Ⅰ遺跡	17	上野廃寺跡	31	東国山古墳群
4	山一遺跡	18	藤田遺跡	32	七ヶ塚古墳群
5	山遺跡	19	神波遺跡	33	小倉古墳群
6	吉田遺跡	20	山口古墳群	34	明楽古墳群
7	中筋日延遺跡	21	上野古墳群	35	高積山遺跡
8	川辺遺跡	22	宇田森遺跡	36	城ヶ峯城跡
9	里遺跡	23	北田井遺跡	37	禰宜貝塚
10	山口遺跡	24	西田井遺跡	38	和佐中遺跡
11	藤田古墳	25	田屋遺跡	39	河南中学校北方遺跡
12	碓古墳	26	府中遺跡	40	栗栖Ⅰ遺跡
13	山口廃寺跡	27	橋谷遺跡	41	岩橋千塚古墳群
14	谷遺跡	28	奥山田遺跡		

## 1. 遺跡の位置と環境 (第1図)

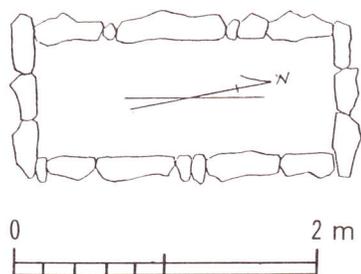
山口遺跡は、和歌山市の東端、那賀郡岩出町との境界近くに位置し、和歌山市里集落及び谷集落周辺に広がる遺跡である。雄ノ山峠に源をもち、和泉山脈を急激に南下して紀ノ川に注ぐ雄ノ山川は、湯屋谷付近で平野部に出て、幅約1.5km程の扇状地を形成する。本遺跡は扇状地上の標高13~35mに立地する。特に、今回の調査地は標高13~14mを測り、扇状地の末端部に相当する。

近接する周辺地域では、宇田森遺跡、藤田遺跡、川辺遺跡、吉田遺跡、中筋日延遺跡、山一遺跡など弥生~奈良時代の集落遺跡(散布地も含む)が扇状地上を中心に分布する(第1図)。それらの遺跡のうちで発掘調査が実施されているのは宇田森遺跡、吉田遺跡、川辺遺跡である。

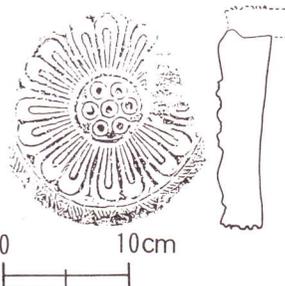
本遺跡の南西約2kmに位置する宇田森遺跡(第1図22)は、昭和41~43年度の調査により、弥生時代中期の竪穴式住居7棟、溝2条、弥生時代後期の溝3条等が検出され、第1次調査のピット12及びA溝出土土器は、県下の弥生土器編年の基準資料となっている。<sup>(註1)</sup>本遺跡の東約1kmに位置する吉田遺跡(第1図6)は、昭和44~45年に調査され、弥生時代中期から鎌倉時代の竪穴式住居87棟、古墳時代から奈良時代の掘立柱建物11棟、弥生時代中期の壺棺、方形周溝墓等が見つかっている。<sup>(註2)</sup>南約1kmに所在する川辺遺跡(第1図8)は、昭和63年度より調査が開始され、現在までに弥生時代の溝、古墳時代末頃の竪穴式住居・掘立柱建物・井戸、平安時代の掘立柱建物・道路状遺構等が検出されている。<sup>(註3)</sup>

また、和泉山脈の南端の丘陵上には、前方後円墳を含む10基前後からなる上野古墳群や山口古墳群が形成される。平野部では竪穴式石室をもち鉄器、土器が出土した藤田古墳(第2図)<sup>(註4)</sup>や畚古墳が見られる。共に円墳とされる。

和歌山市谷の集落には白鳳時代の山口廃寺の塔心礎が残っている。山口付近は南海道と熊野街道の合流点に当たり、交通の要衝の地であった。『延喜式』にいう萩原、名草の駅家もこの周辺に想定されている。



第2図 藤田古墳竪穴式石室(註4より)



第3図 山口廃寺出土軒丸瓦(註5より)

## 2. 既往の調査と調査に至る経緯（第4図）

和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図（和歌山県教育委員会 平成元年発行）によると、山口小学校付近には山口遺跡と里遺跡という2つの遺跡が隣接して所在する。山口小学校は徳川家の別邸である山口御殿の跡地に相当しており、里遺跡として区分されている。しかし、山口小学校内の発掘調査の所見によれば、江戸時代以降の遺構面の下層には弥生時代・古墳時代・奈良時代等の遺構・遺物が存在しており、北接する山口遺跡と同様の性格をもつことが判明している。よって、山口小学校周辺の調査は、山口遺跡の発掘調査として包括することにする。山口遺跡の調査は、昭和57年度以来5次にわたって実施されている。整理作業の都合により今回報告するのは昭和62年度の第5次調査分である。第1次調査～第4次調査の概要については、以下の通りである。

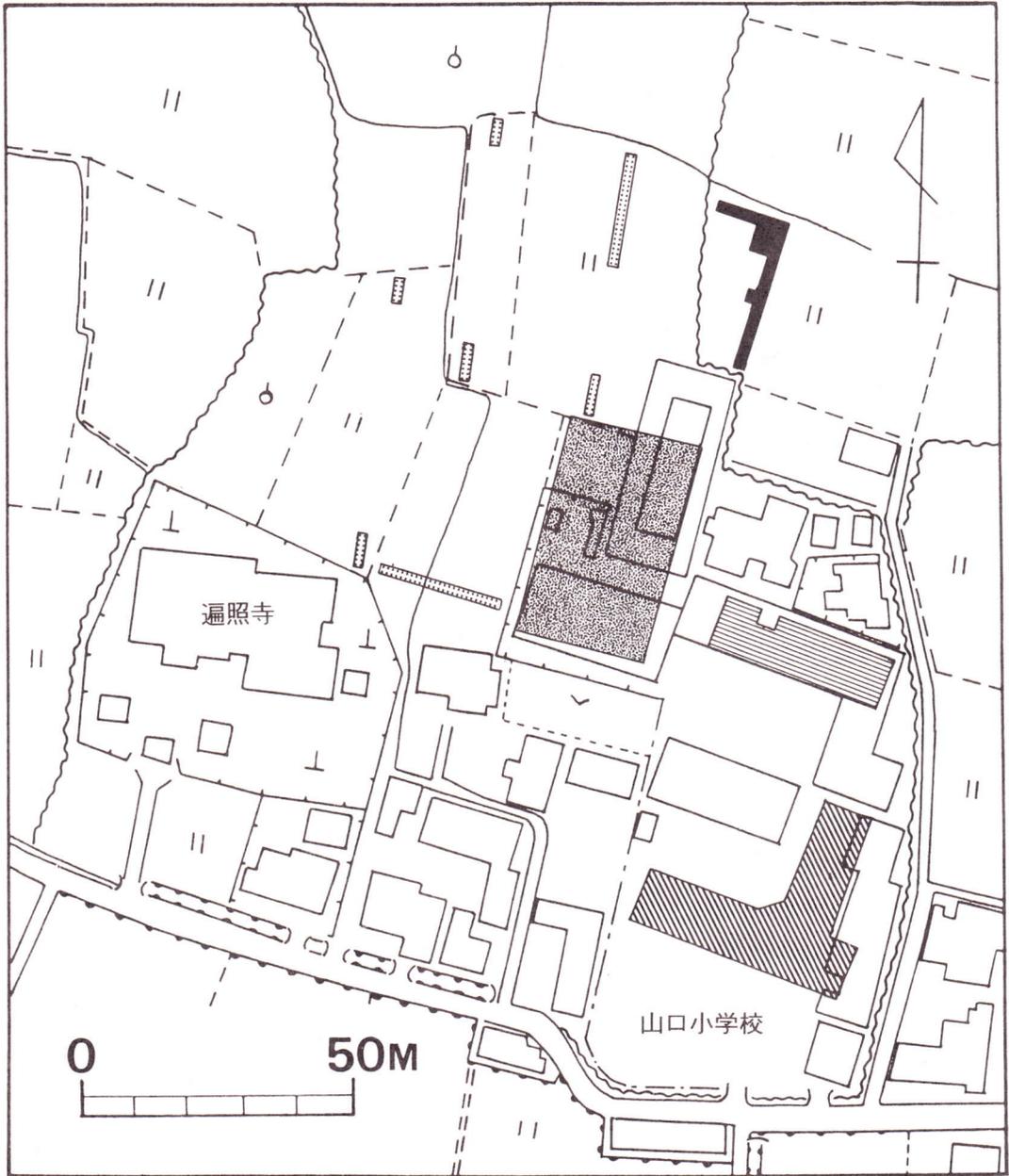
**第1次調査**（昭和57年度）山口小学校のグラウンド整備工事に伴い7ヶ所のトレンチ調査が実施された。各トレンチの遺構面のレベルによると、この周辺では北東から南西方向にゆるやかに傾斜する地形が復元できる。遺構としては土抗、ピット、山口御殿の周濠の一部等を検出している。包含層より、弥生土器、須恵器、瓦片などが出土した。

**第2次調査**（昭和57年度）校舎建築に伴い約700m<sup>2</sup>が調査され、近世と古墳時代の2面の遺構面が確認されている。近世の遺構面では石積井戸、ピット列、古墳時代の遺構面では溝状遺構が検出されている。出土遺物としては、瓦片、陶磁器、土師質土器、石臼片、寛永通宝、唐草文軒平瓦、宋銭、須恵器、弥生土器などがある。

**第3次調査**（昭和59年度）幼稚園園舎の建築に伴い約300m<sup>2</sup>が調査された。遺構面は3面あり、下層より古墳時代の溝2条、奈良～中世の溝2条、中世～近世の溝1条が検出されている。出土遺物は、須恵器、土師器、円筒埴輪、ふいご口、製塩土器、弥生土器、紡錘車、サヌカイト片などである。

**第4次調査**（昭和62年度）体育館建築に伴い約800m<sup>2</sup>が調査され、4面の遺構面が確認された。江戸時代の山口御殿に関係する遺構としては、周濠、瓦敷き溝、礎石、埋桶遺構（便所）などが発見され、当時の御殿の様子を復元する手がかりが得られた。江戸時代遺構面の下層は、砂礫層と砂質土層の互層になっており、その中間に溝が検出された遺構面があるが、明確な時期は不明である。地表から約1mの下層には、古墳時代～奈良時代を中心とする遺構面があり、7条の溝が検出された。最下層の遺構面では弥生時代後期～古墳時代前期の溝3条、土坑1、井戸状遺構1と古墳時代後期の土坑、溝状遺構等が同一面で検出された。

今回、山口小学校の敷地内及び隣接地にプールが建設されることになり、その事前調査として第5次調査を実施することとなった。



第1次調査区



第4次調査区



第2次調査区



第5次調査区



第3次調査区

第4図 遺跡内の調査地区

### 3. 調査内容 (第5図～第28図)

まず、L字形にトレンチを設定し、土層、遺構面を確認したのち、工事の施工方法を検討し、最小限の拡張区を設けて調査を実施した。よって調査区は、トレンチ部、拡張区1、拡張区2の3ヶ所に分かれることとなった(第5図)。調査面積は合計約78m<sup>2</sup>である。以下に各調査区ごとの調査内容と出土遺物について記述する。

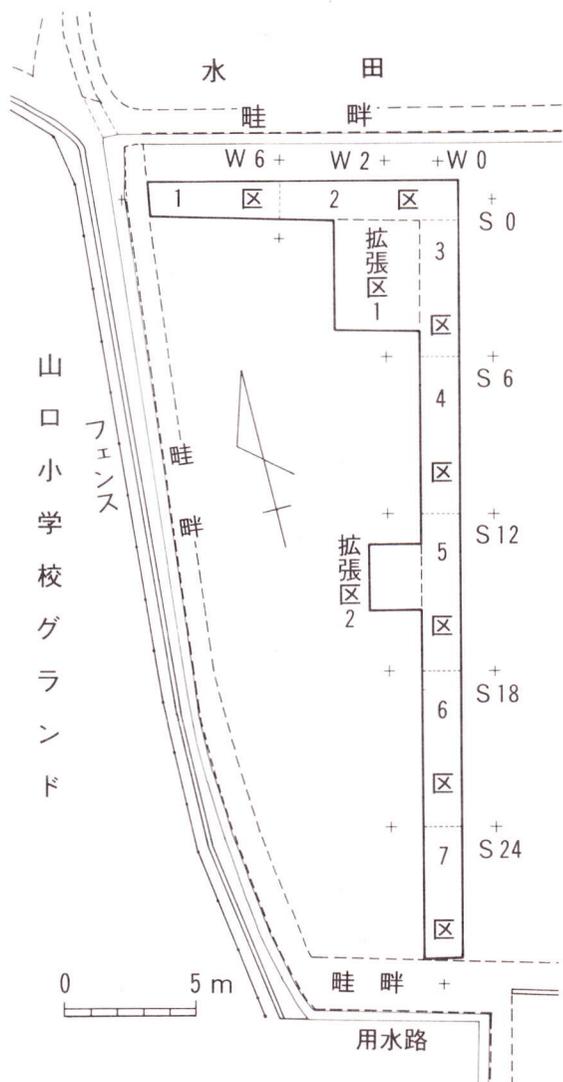
#### (1) トレンチ部(第6図～第10図)

幅1.5mで東西約12m、南北約30mのL字形のトレンチを設定し、トレンチの交差部分の中央に原点を定め、東西及び南北方向に6m間隔で測量ポイントを設置した。また、遺物取り上げのためトレンチ部西端より順に1～7区と呼称することとした(第5図)。

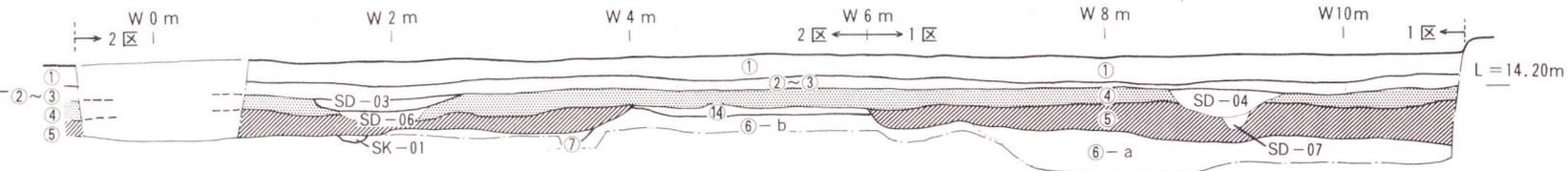
**層序・遺物出土状況** トレンチ部における基本的な層序は以下のとおりである。

- 第1層 耕作土(第6図①層)
- 第2層 床土(第6図②層)
- 第3層 灰黄色粘質土 数回の床上げにより形成され、更に2～6層に分層可能(第6図③層)
- 第4層 地山ブロック混じり灰褐色土(第6図④・④-a層)
- 第5層 茶褐色土(第6図⑤層)
- 第6層 濁灰黄色粘土 4～7区の遺構ベース層となる(第6図⑪)
- 第7層 暗灰色砂礫層 無遺物層で1～4区の遺構ベース層となる(第6図⑥-a・b層、⑩層)
- 第8層 灰黄色粘土 無遺物層である(第6図⑫層)

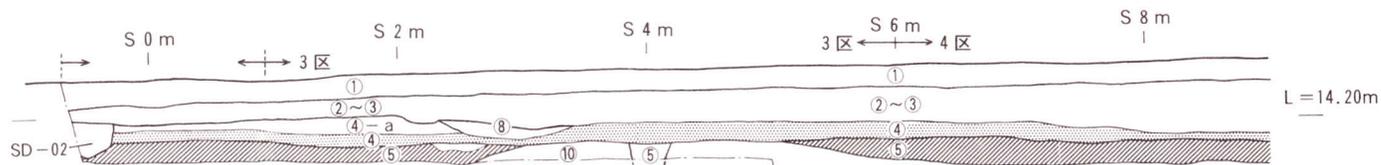
遺物としては、第3層上層より伊万里焼、瓦器、土師質土器、須恵器、弥生土



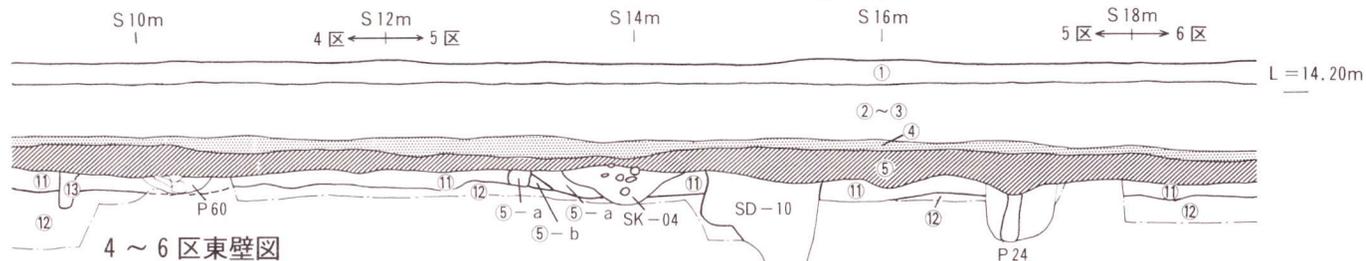
第5図 第5次調査の地区割



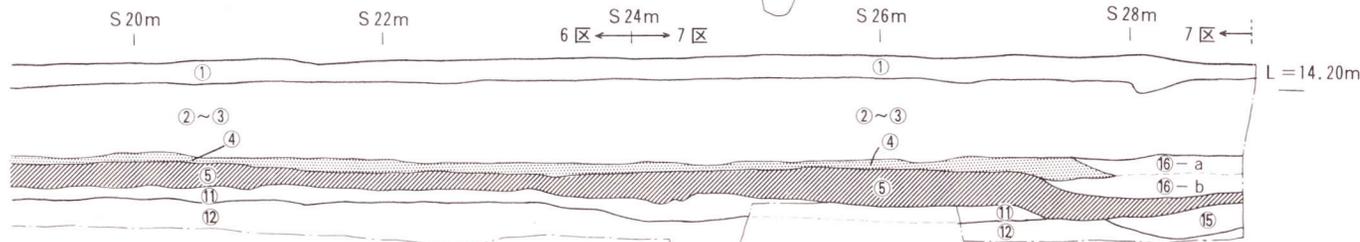
1～2区南壁図



2～4区東壁図



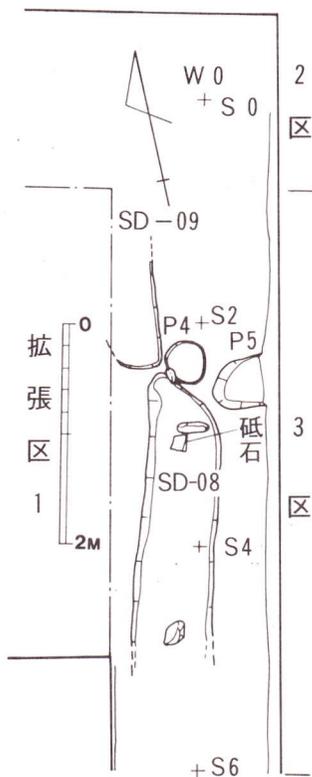
4～6区東壁図



6～7区東壁図

土層名

- ① 耕作土
- ② 床土
- ③ 灰黄色粘質土
- ④ 黄色地山混じり灰褐色土
- ④-a 黄色地山混じり暗灰褐色土
- ⑤ 茶褐色土
- ⑤-a 灰褐色粘質土
- ⑤-b 黄色地山ブロック混じり茶褐色土
- ⑥-a 茶褐色パラス層
- ⑥-b 砂礫混じり茶褐色パラス層
- ⑦ 灰茶褐色粘質土
- ⑧ 黄色地山混じり灰茶色粘質土
- ⑨ 黒褐色粘質土
- ⑩ 暗灰色パラス層
- ⑪ 濁灰黄色土
- ⑫ 灰黄色粘土(地山?)
- ⑬ 灰茶色やや粘質土
- ⑭ 黄色ブロック混じりパラス層
- ⑮ 黒色粘土(土坑?)
- ⑯-a 灰色砂層
- ⑯-b 灰色パラス層(スクリーントーンは主な包含層)



第8図 トレンチ部  
第3遺構面遺構図

第3遺構面（第8図） 2～3区の第5層上面で検出されたSD-08・SD-09、P4・P5がある。

SD-08・SD-09は、南北方向に伸びる浅い溝状遺構で端部は不明瞭であった。遺物としては、SD-08の北端部より和泉砂岩製砥石が1点出土した以外は、弥生土器、須恵器の細片が若干認められたのみであった。

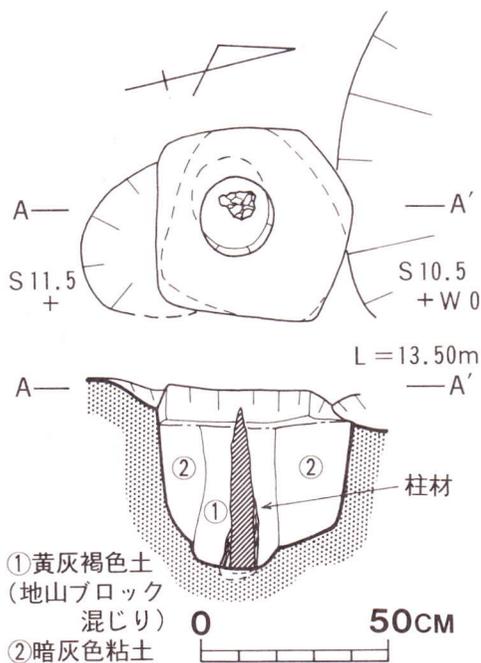
検出面や埋土の状況よりみて、古墳時代後期以降に形成され、比較的短期間のうちに埋没した様子が窺われ、古墳時代後期～奈良時代の遺構と推定しておく。

第4遺構面（第9・10図） トレンチ部において、4～7区を中心に、第5層下面（第6層、第8層上面）で検出されたピット、土坑、溝が挙げられる。

**ピット** 検出されたピットは20数個である。それらは規模的には3つのグループ（径10～20cm、径40～50cm、径60～70cm）に分類でき、平面形では円形に近い掘方のもの（P9・P13・P14・P16・P18など）と方形に近い掘方のもの（P15・P17・P24など）に分類できる。ピットの多くは、第5層包含層に類似する暗茶褐色系の土を埋土とする。P9・P13・P14・P15・P17・P18・P24・P58などは、

規模・形態よりみて、建物を構成する柱穴の可能性が高い。特にP17は、柱材の一部が遺存していた。以下に詳述しておく。

**P17**（第9図） 4区南半で検出されたピットで、掘方は一辺約30～40cmの五角形を呈し、深さは検出面より約42cmを測る。掘方埋土は、黄灰褐色土で地山のブロックを混じえる。この埋土より須恵器杯蓋（第15図3・6）を検出した。柱痕部は、柱の中心よりやや南にずれた位置にあり、直径22cmの円形を呈し、深さ約50cmを測る。柱痕は掘方底面よりも約8cm程深く、底部で検出面より更に西へずれている。この柱痕埋土は、暗灰色粘土である。遺存した柱材は、長さ46cm、直径10cmで上へ近



第9図 トレンチ部4区 P17実測図



づく程腐蝕が進み細くなる。柱の材質は不明である。

**土坑** SK-03、SK-04、SK-05が挙げられる。

SK-03は、4区で検出された楕円形の土坑で、P17を切ってつくられている。深さは15cm前後で浅く凹む形態で、第5層に類似する暗茶褐色土を埋土とする。遺物としては弥生土器、須恵器、土師器の細片の他、製塩土器（第16図49）がみられる。

SK-04は、5区で検出された不定形土坑で、楕円形土坑に長さ80cm程の溝状遺構が取り付く形態を示す。深さは10～15cm、遺物はなかった。

SK-05は、小規模な土坑で性格は不明である。遺物はなかった。

溝については、拡張区2の項で扱うこととする。

以上の遺構に伴う遺物は極めて少なく、わずかにP2・P6・P9・P15・P17等で須恵器（杯、高杯、甕）や土師器が出土するにとどまる。杯蓋では、口径11.7～13.8cmを測り、天井部のヘラケズリは範囲が狭くなっている。田辺編年のTK43～TK209型式、中村編年のII-4～5段階に相当し、6世紀後半～末頃の年代が考えられる。他のピット、土坑とも埋土が共通し、埋土に須恵器の細片が含まれる点よりみて、第4遺構面で検出された遺構の大部分は、6世紀後半～末頃のものと推定される。ただし、P17とSK-03、P7とP22の様に切り合い関係が認められる遺構も存在することにより、遺構の形成は一時期ではなかったとみられる。

遺構	規模(cm)			底面レベル(m)	備考
	長径(長さ)	短径(幅)	深さ		
P 1	48	36	11	14.037	
P 2	18	—	1～2	14.022	
P 3	42	28	9	14.037	
P 4	41	36	4	13.972	
P 5	—	45	9	13.950	
P 6	68	—	5	13.603	土坑状
P 8	—	(24)	7	13.453	
P 9	—	18	24	13.212	長径42cm 短径40cmの円形プランの掘方をもつ
P10	10	7	3	13.380	
P11	16	14	6	13.301	
P12	7	6	6	13.304	
P13	20	18	15	13.147	長径40cm 短径32cmの楕円形プランの掘方をもつ
P14	28	25	22	13.087	長径46cm 短径40cmの楕円形プランの掘方をもつ
P15	30	28	56	12.711	一辺40～50cmの長方形プランの掘方をもつ
P16	(28)	—	38	13.440	
P17	20	—	48	12.991	一辺40～50cmの方形に近い掘方をもつ。柱材が遺存する
P18	22	—	35	13.187	径40cmの円形プランの掘方をもつ
P19	18	16	12	13.407	
P24	(18)	—	26	13.070	径60cmの円形プランの掘方をもつ
P25	23	17	22	13.256	
P26	—	12	10	13.365	
P27	24	—	16	13.233	
P58	12	11	19	13.330	長径32cm 短径28cmの楕円形プランの掘方をもつ
P59	(18)	—	12	13.290	
P60	(60)	—	13	13.420	扁平な据石あり
P61	28	22	10	13.324	
P62	34	—	9	13.435	
P63	24	17	21	13.258	
P64	(24)	—	3	13.414	

表1 トレンチ部検出の遺構一覧表（ピット）(カッコ内の数字は推定)

遺構	規模(cm)			底面レベル(m)	備考
	長さ	幅	深さ		
SD-01	>140	>90	13	14.033~14.118	玉石を詰めている
SD-02	>900	>36	16~27	13.907~14.019	
SD-03	>(560)	70~110	4~5	14.077~14.100	
SD-04	>134	62~80	11	13.974~13.989	
SD-05	>100	28	2	14.074~14.081	
SD-06	>210	60~90	9~13	13.931~13.999	
SD-07	>120	20~42	7	13.819~13.847	
SD-08	>240	70	6~12	13.859~13.942	
SD-09	—	—	4	13.955~13.984	
SK-03	129	—	16	13.388	P17より新しい。製塩土器出土
SK-04	>150	28~88	13	13.426	
SK-05	38	18	7	13.334	

表2 トレンチ部（一部拡張区1）検出の遺構一覧表（溝・土坑）

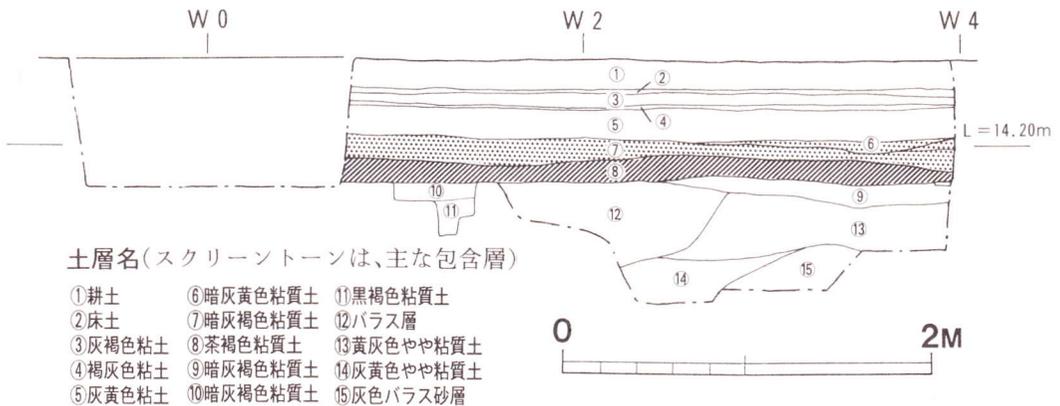
(2) 拡張区1（第11・12図）

トレンチ部2区において多量の弥生土器片が出土したため、その性格を把握するために南北4m、東西3mの範囲にわたって拡張区1を設定して調査を行なった。

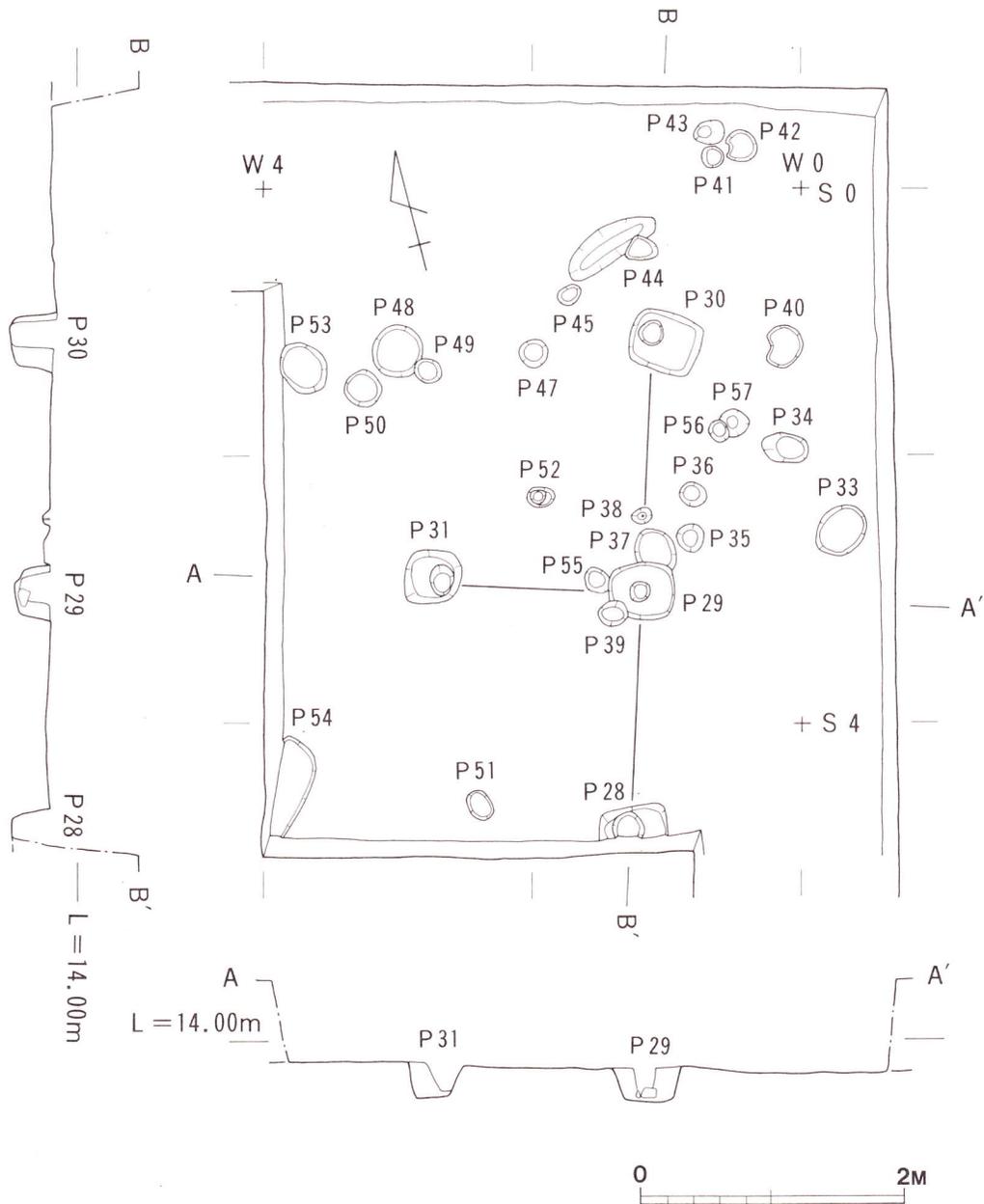
**層序・遺物出土状況（第11図）** 土層は、拡張区1南壁土層図で15層程に分層されるが、基本層序はトレンチ部2・3区と同様である。それらは、第1層（耕作土、第11図①）、第2層（床土、同②）、第3層（灰黄色系粘土、同③・④・⑤）、第4層（地山ブロック混じり灰褐色土、同⑦）、第5層（茶褐色土、同⑧）、第6層（バラス層・灰黄色系粘土、同⑨・⑫~⑮）と分類できる。

遺物は、第4層より多量の弥生土器が出土し、第5層よりも弥生土器、須恵器が出土した。既述の通り、第4・5層はプライマリーな包含層ではなく、古墳時代後期以降の2次の堆積層とみなし得る。第6層より遺物の出土は確認されていない。

**遺構** 第4層上面の第2遺構面でトレンチ部2区より続くとみられるSD-03を検出した（第7図参照）。遺構の時期については、中~近世の中でとらえる必要がある。



第11図 拡張区1 南壁土層図



第12図 拡張区1・トレンチ部2～3区 第4遺構面遺構図

第5層下面の第4遺構面（トレンチ部2・3区の一部を含む）において28個のピットを検出した（第12図）。それらのうちP28～P31は、他のピットとは明らかに異なる形態をもち、配置に規則性が認められたため、不明確ながら掘立柱建物1（SB-01）として以下に取り上げておくことにする。

**掘立柱建物 1 (SB-01)** (第12図) P28～P31は、一辺40～50cmで方形プランの掘方と直径20cm前後の柱芯部をもつ。検出面からの深さは17～36cmを測り、柱芯部底面のレベルは標高13.46～13.63mを測り、規模よりみても他のピットとは区別される。柱芯間の距離は、P29とP30間で2.0m、P28とP29間で1.75m、P29とP31間で1.5mを測る。これら4個のピットは配置よりみても同一構造物の一部をなしていたと見られるが、全体のプランを復元することはできなかった。周辺地の調査を待って再検討する必要がある。

**ピット** 掘立柱建物に関連する4個のピット以外の24個のピットは、平面的規模よりみてもおよそ2つのグループに分類できる。つまり長径15～25cmを測る小規模グループ (P35・P36・P38・P39・P41～P47・P49・P51・P52・P55～P57) と長径28～42cmの大規模グループ (P33・P34・P37・P40・P48・P50・P53) に分けられる。検出面よりの深さはいずれも3～10cmで浅いものが多いが、小規模グループのP43・P51は深さ15～18cmで、P28～P31に次ぐ深さをもつ。

ピットからの遺物の出土は、弥生土器の細片が多かった。

遺構	規模(cm)			底面レベル(m)	備考
	長径	短径	深さ		
P28	(24)		27	13.513	一辺45～50cmの方形プランをもつ
P29	16		17	13.629	長辺45cm,短辺30～35cmの長方形プランの掘方をもつ
P30	(20)		36	13.460	
P31	25	19	24	13.579	一辺35～40cmの方形プランの掘方をもつ
P33	41	33	5	13.681	P29より古い 柱痕部が一部遺存 P29より新しい
P34	35	22	5	13.689	
P35	20		4	13.729	
P36	20	18	9	13.686	
P37	36	29	3	13.752	
P38	15	10	6	13.728	
P39	22	19	4	13.748	
P40	32	(26)	2	13.746	
P41	16		5	13.759	
P42	25	23	3	13.778	
P43	22	19	18	13.644	
P44	24	19	3	13.794	
P45	19	14	4	13.759	
P47	20	19	3	13.752	
P48	39		8	13.736	P49より古い
P49	20	19	7	13.749	P48より新しい
P50	28	26	8	13.737	
P51	24	17	15	13.645	
P52	21	15	8	13.729	
P53	42	32	6	13.659	
P54	—	—	5	13.763	土坑状
P55	(21)	17	3	13.754	P29より古い
P56	16	13	3	13.733	P57より新しい
P57	(22)	20	3	13.725	P56より古い

表3 拡張区1(一部トレンチ部2・3区)検出の遺構一覧表(カッコ内の数字は推定)

### (3) 拡張区 2 (第13・14図)

5区の東壁際で、<sup>(註6)</sup> 据石のあるピット (P7) が検出され、周囲に建物跡が展開していた可能性が認められたこととトレンチ部で検出された弥生時代の溝 (SD-10) の西方への展開を確認するため、西方へ幅2.6m、奥行き2m分拡大して調査を行なった。

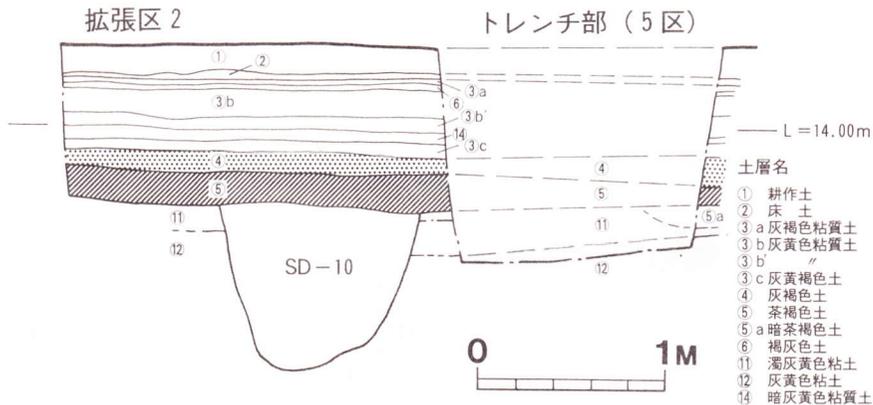
**層序、遺物出土状況 (第13図)** 基本的な層序は、トレンチ部の5区と同一であり、第1層 (耕作土、第13図①)、第2層 (床土、同②)、第3層 (灰黄色系粘土、同③a・③b・③b'・③c・⑥・⑭) 第4層 (地山ブロック混じり灰褐色土、同④)、第5層 (茶褐色土、同⑤)、第6層 (濁灰黄色粘土、同⑪)、第7層 (灰黄色粘土、同⑫) にわかれる。

遺物は、第4・5層より主として出土したが、量的にはさほど多くなかった。第3層より備前焼すり鉢 (第20図85)、土鍋 (第20図83)、瓦器 (第20図86~88) が出土し、第4~5層より須恵器杯 (第20図89~112)、円筒埴輪 (第21図127)、弥生土器が出土した。

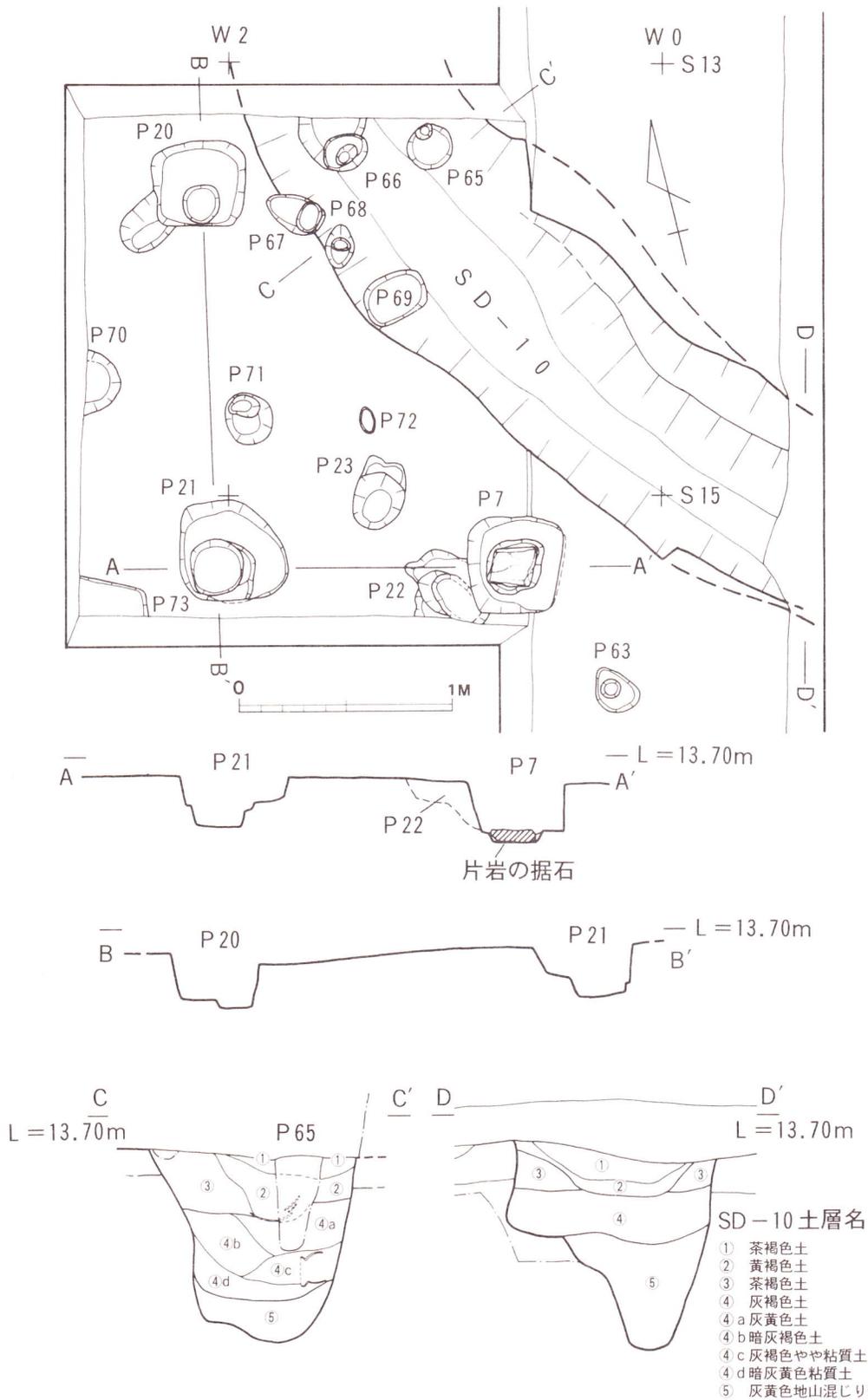
**遺構** 第5層下面の第4遺構面で掘立柱建物の一部と溝を検出した。

**掘立柱建物 2 (SB-02) (第14図)** 拡張区2で検出されたピットは14個ある。そのうち、P7、P20、P21はともに一辺が40~50cm、深さ25~30cmを測り、類似した形態・埋土をもつ。P7には扁平な片岩の据石が置かれている事や3個のピットの配置状況からみて、これらは掘立柱建物の一部とみなされる。柱心間の距離は、P7とP21で約1.4m、P20とP21は約1.7mである。P7内埋土より出土した須恵器杯蓋 (第15図5) よりみて、6世紀後半の古墳時代後期の建物跡とみられる。

**溝 (SD-10) (第14図)** トレンチ部を南東から北西方向に横切った溝は、拡張区でやや北方向へ弧状に屈曲して伸びてゆくのが確認された。幅約1m、深さ約0.9mで、断面形は丸みをもった逆台形を示すが、東端部では溝斜面北側に段をもっている。埋土は大きくわけて上層 (第14図①、②)、中層 (第14図③、④a・④b・④c・④d)、下層 (第14図⑤) となる。遺物は主に、中層より出土し、一部上・下層よりも出土した。各土層出土



第13図 拡張区 2 北壁土層図



第14図 拡張区2 第4遺構面遺構図

遺構	規模(cm)			底面レベル(m)	備考
	長径(長さ)	短径(幅)	深さ		
P 7	45	42	29	13.300	扁平な据石を底面に置く 一辺40～45cmの方形プランの掘方をもつ 一辺40～45cmの方形プランの掘方をもつ P 7より古い
P 20	18		20	13.341	
P 21	26	24	25	13.380	
P 22	(45)	—	20	13.374	
P 23	27	24	30	13.276	
P 65	21		6	13.445	
P 66	22	18	30	13.260	
P 67	39	17	12	13.419	
P 68	20	14	10	13.455	
P 69	30	22	7	13.450	
P 70	30	—	8	13.510	
P 71	35	22	11	13.494	
P 72	13	7	5	13.546	
P 73	—	—	5	13.575	
SD-10	>350	85～95	82～89	12.629～12.660	

表 4 拡張区 2 検出の遺構一覧表 (カッコ内の数字は推定)

の土器に時期差は認められず、全て弥生時代後期前半頃の所産とみられる。ただし、上層は堆積状況よりみてSD-10が埋没した後の別の溝状遺構ととらえることもでき、遺物としては2次的な移動により運ばれたものである可能性がある。

#### (4) 出土遺物 (第15図～第28図)

前述のとおり調査区全域の第4層、第5層より多量の土器が出土した。その一方で遺構に伴出した遺物は極めて少量であった。以下に遺構埋土出土土器を一括して扱い、トレンチ部と拡張区 2 包含層出土土器を同じ項で取り扱い、弥生土器が多量に出土した拡張区 1 包含層出土土器を別項で扱うこととする。

トレンチ部、拡張区遺構埋土出土土器 (第15図～第16図) 第5層下面で検出した遺構はSD-10を除いて大部分が、古墳時代後期のものとみられるが、第5層自体がプライマリーな包含層ではないため、遺構内埋土には須恵器、土師器よりむしろ弥生土器が多く検出された。ここでは、遺構の年代に関連するとみられる資料を中心に記述する。

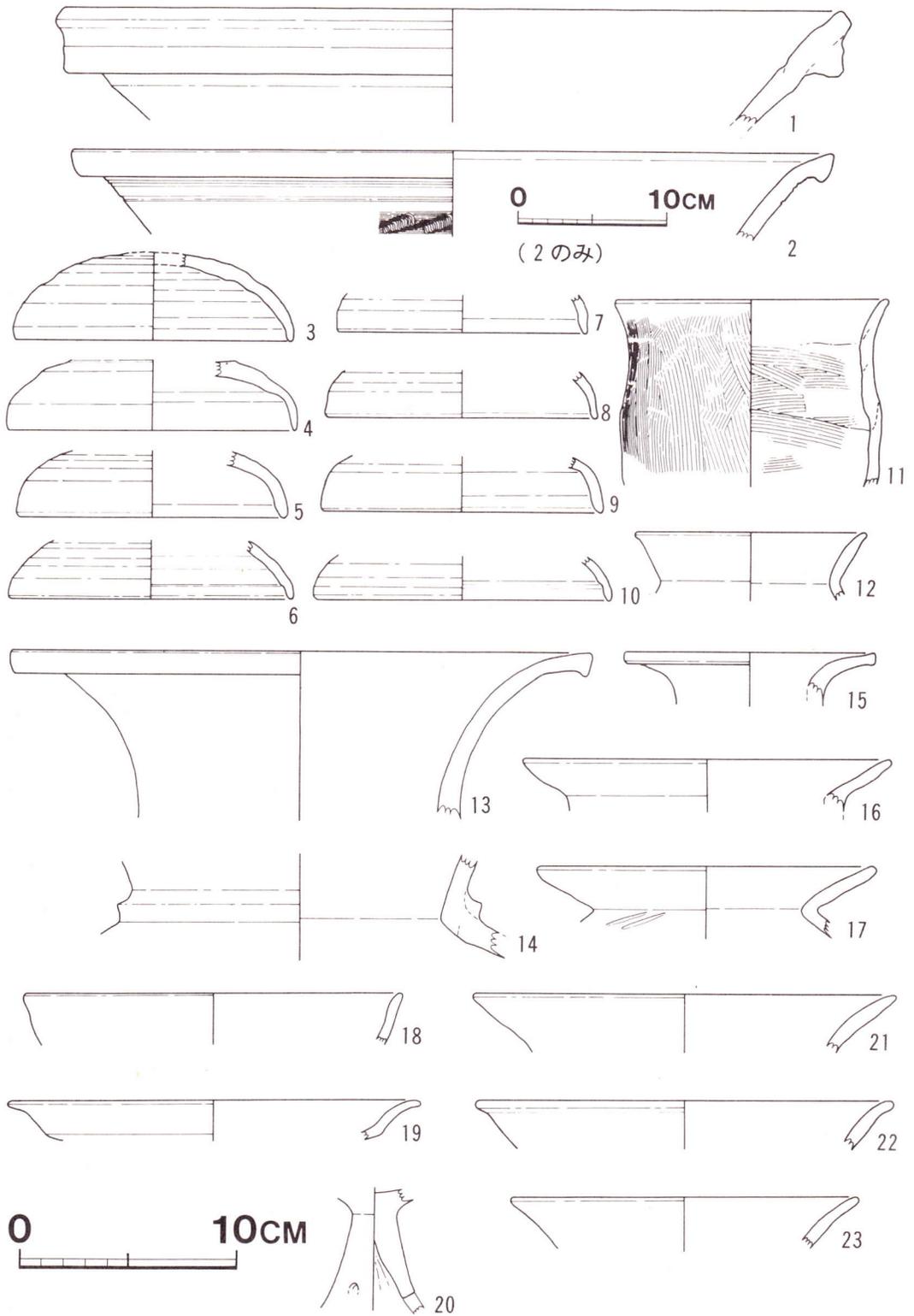
SD-02 1は土師質土鍋で、口縁端部よりやや下がった位置に断面台形の鏝がつく。外面は付着物 (スス?) により黒色を呈する。近世期のものと推定される。

P 2 7は須恵器杯蓋で古墳時代後期の所産である。

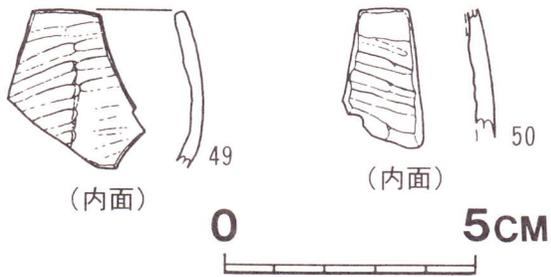
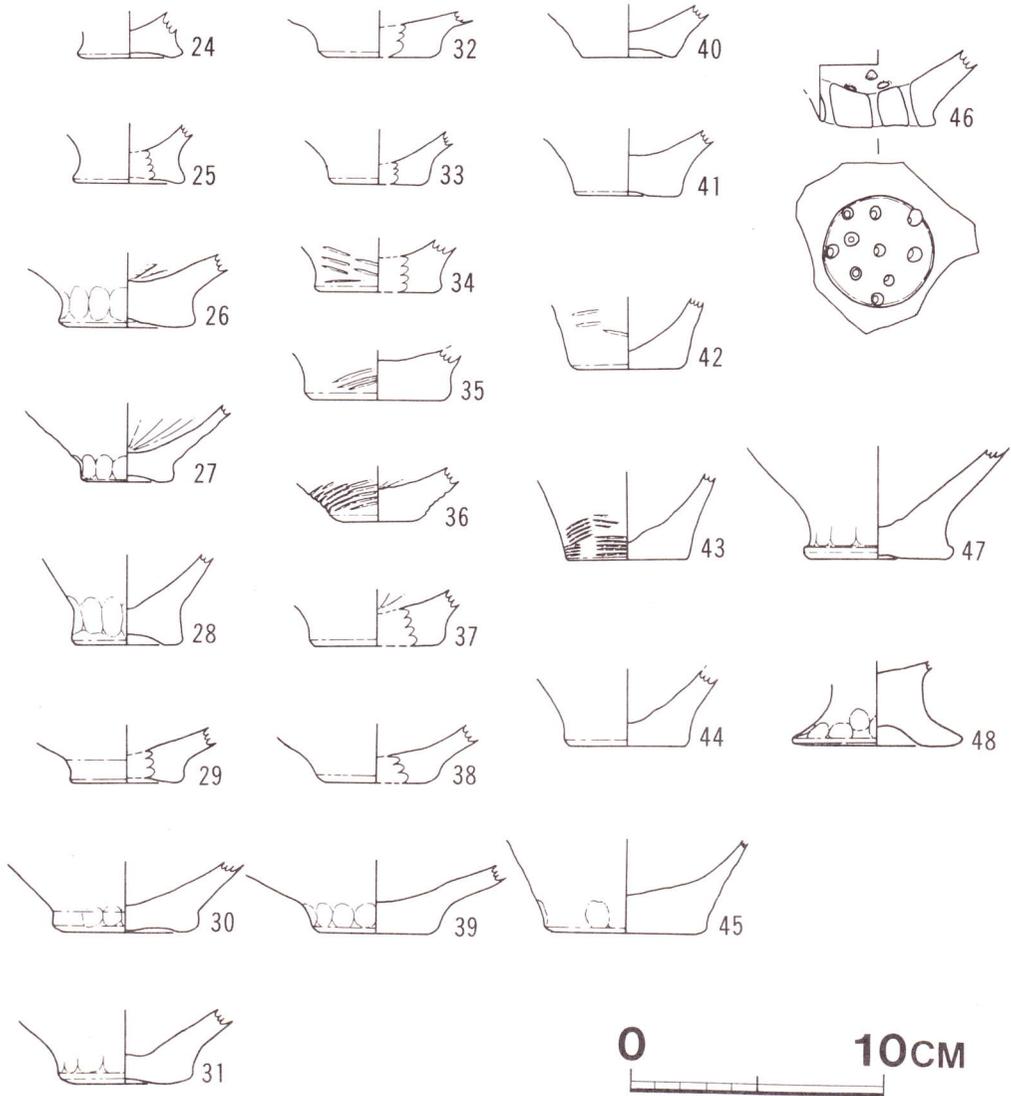
P 6 11は胴の張らないタイプの甕で、外面はタテ方向、内面はヨコ方向のハケメ調整 (5本/cm) が施される。古墳時代後期とみられる。

P 7 5は須恵器杯蓋で、口縁端部は丸く仕上げられる。古墳時代後期の所産である。

P 9 10は須恵器杯蓋で、口縁端部内側に凹線状の凹みがみられる。古墳時代後期の所産である。



第15図 トレンチ部・拡張区 遺構埋土出土土器 1



第16図 トレンチ部・拡張区 遺構埋土出土土器 2

P17 3・6・8はともに須恵器蓋で古墳時代後期のものである。3の天井部外面のヘラケズリの範囲は大変狭くなっている。6の口縁部内側には、10と同様の凹線状の凹みがみられる。

P20 9は須恵器杯蓋で、古墳時代後期の所産である。

P22 2は須恵器甕の口縁部で、頸部には波状文、凹線文が施される。古墳時代後期の所産とみられる。

その他、13～15は弥生土器の壺で、14の頸部下位には凸帯がみられる。12・16は古墳時代の土師器甕の口縁部である。18～20は高杯で、弥生時代後期のものとみられる。

24～47は底部で、上げ底気味で底部が突出するもの（24～31）平底で底部が突出するもの（32～39・47）、上げ底気味で胴部下半と底部の区別が不明瞭なもの（40・41）、平底で胴部下半と底部の境が不明瞭なもの（42～45）等がみられる。46の底部には直径4～5mの穿孔が10ヶ所に施される。39の底面には、ヘラ状工具による十字形の線刻がみられる。以上の底部については、弥生時代後期のものとみられる。48は端部が外へ大きく張り出す脚台部である。49・50は内面に貝殻条痕をもつ製塩土器で、二次焼成により外面は剝落し、赤変している<sup>(註7)</sup>。古墳時代中～後期の所産とみられる。

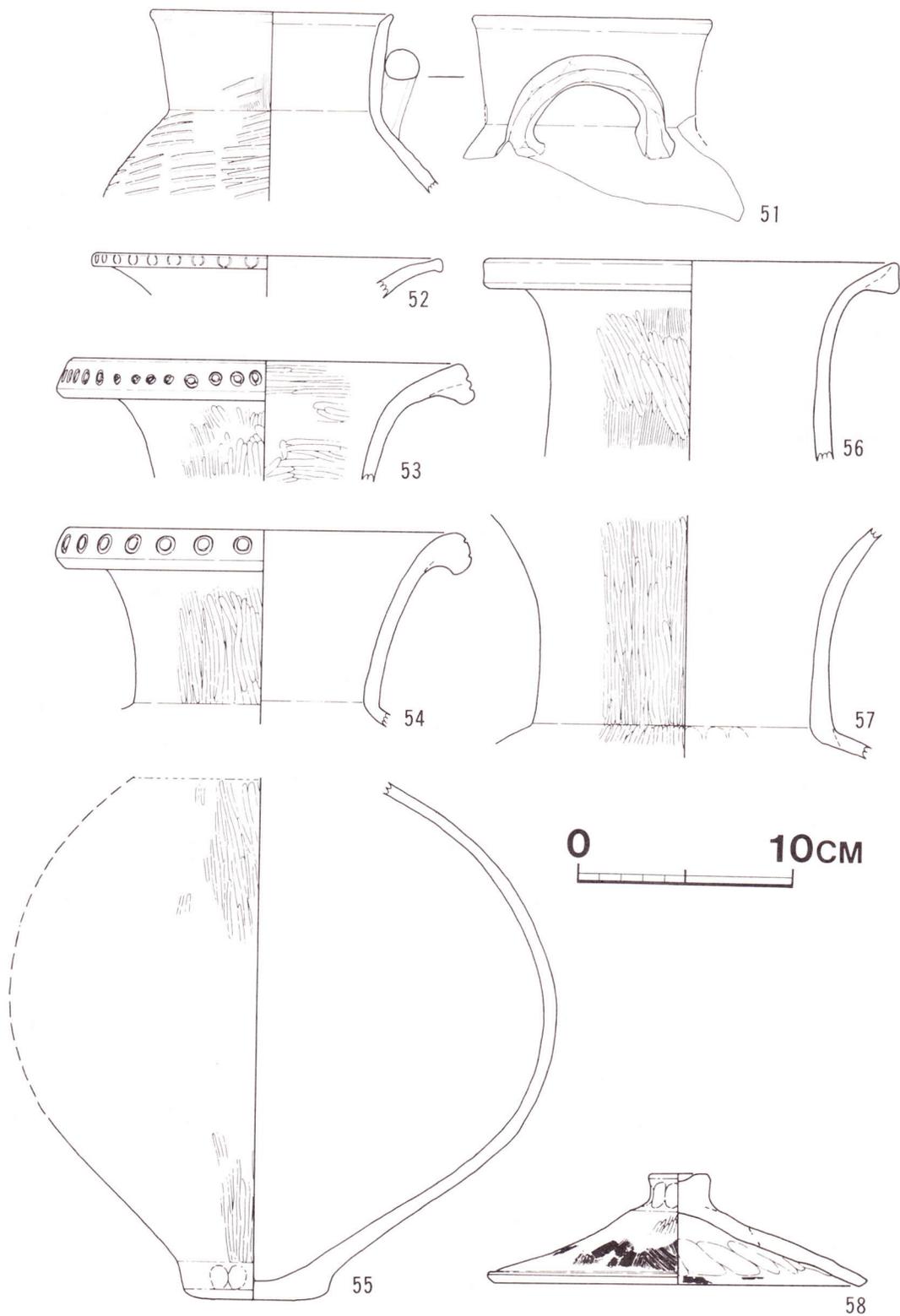
SD-10出土土器（第17図～第19図） トレンチ部5区及び拡張区2で検出したSD-10は、長さ約3.5m分しか調査できなかったが、中層を中心として大振りな個体の弥生土器が比較的多く出土した。

**壺**（51～57）51は把手付きの短頸壺で、胴部はタタキ調整がみられる。把手は頸部と接して付けられており、機能的にはかなり退化したものとなっている。53～57は、球形の胴部に直立あるいは外反する頸部をもち、口縁端部は粘土を貼り付けて垂下させている同種の広口壺とみられる。52の広口壺の口縁部はわずかに肥厚させている。口縁端面には、竹管（54）や半截竹管（52・53）による円形刺突文が施される。外面はタテ方向、頸部内面はヨコ方向へのヘラミガキが施されるが磨滅により観察できない箇所も多い。

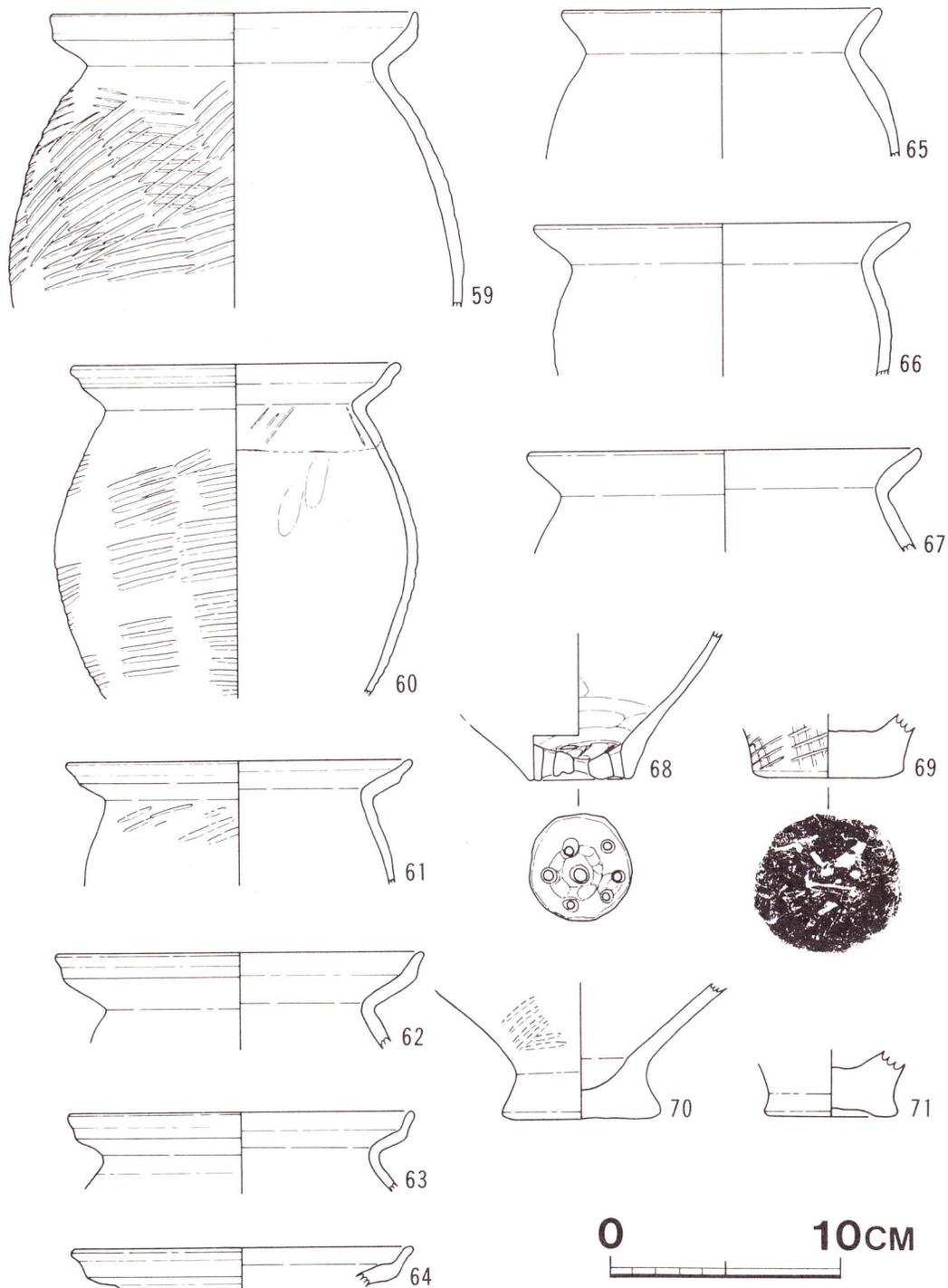
**蓋**（58）直径約17cmの蓋で、内面はコビナデ、外面は細かいハケと一部ミガキにより調整される。内面の端部より1～2cmの範囲には煤が付着しており、本来口径15cm前後の甕とセットで使用されていたことがわかる。

**甕**（59～67）全体的に磨滅しており、内外面の調整は不明なものが多い。口縁部の形態では、口縁の途中で一度屈曲してから立ち上がるもの（59～64）とくの字形の口縁部をもつもの（65～67）の2つのタイプが認められる。前者には、粗い右上がりのタタキ（2本/cm）が観察されるが、後者の胴部にはタタキの痕跡は認められない。

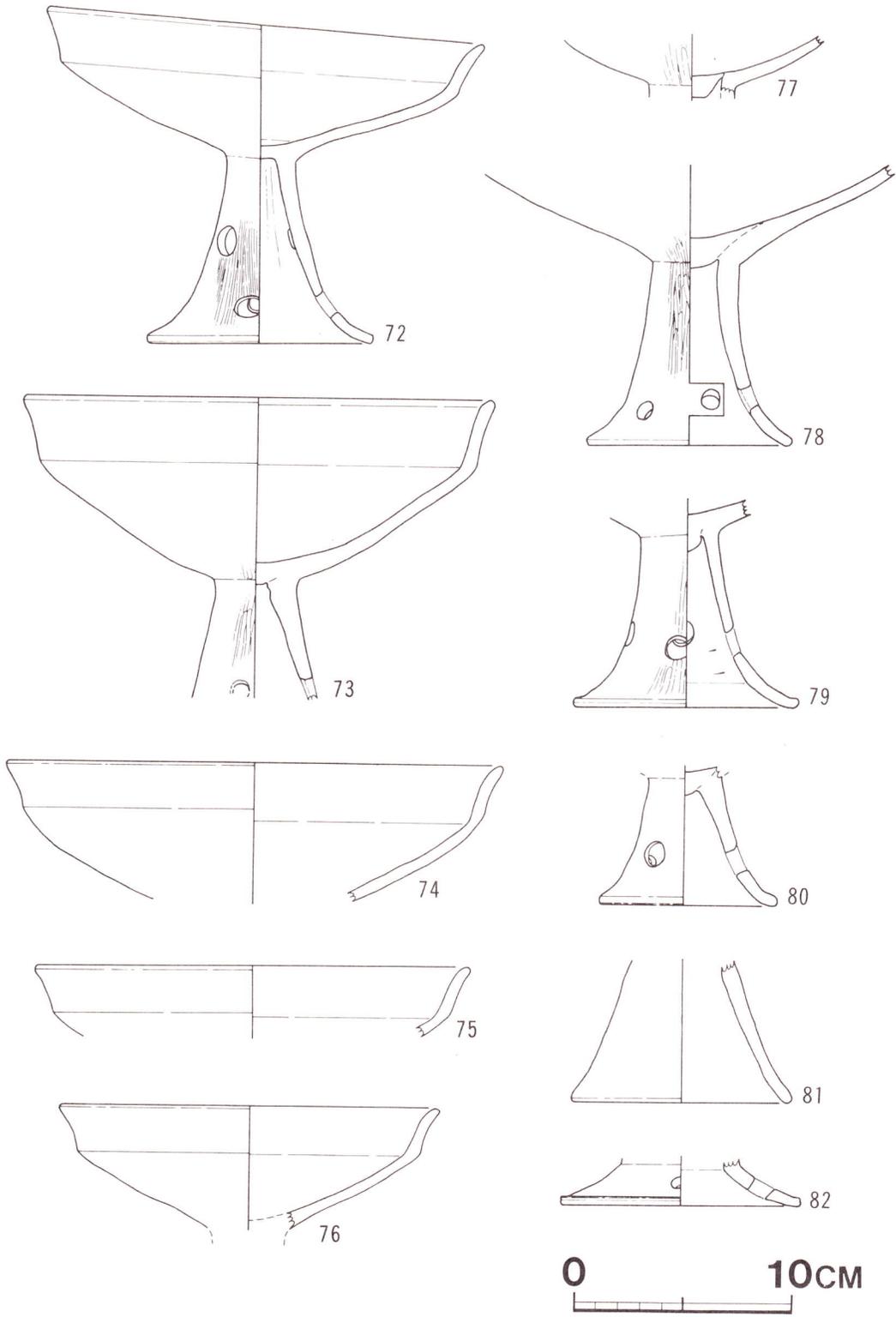
**底部**（68～71）底部を突出させるもの（70・71）と胴部下半と底部の境が不明瞭なもの（68・69）がある。68の底面には、7個の穿孔がみられる。69の底面には、靱と植物繊維の圧痕が観察される。



第17图 SD-10出土土器 1



第18图 SD-10出土土器 2



第19图 SD-10出土土器 3

**高杯** (72~82) 口縁部の残るものについては、全て皿形の形態をもつ (72~76)。本来なら内外面とも丁寧なヘラミガキが施されているはずであるが、ローリングによりほとんど観察されない。72の脚部はミガキに先行するハケ調整が露出している。脚部には、円形の透し穴が三方 (73・80) や四方 (78・79) に穿たれ、72は上段四方透し、下段四方透しの二段に穿孔されている。82は柱状の脚部をもつようである。杯部と脚部の接合方法では、多くは円板充填によるとみられる (73・77~80)。

以上の土器は、溝埋土出土ながら形態的にまとまりをもつ資料で、弥生時代後期前半に位置付けられる。

**トレンチ部・拡張区2 包含層出土土器** (第20~第23図) 第4層及び第5層から多量の土器が出土したが、前述の様にプライマリーな包含層ではないため、ここでは包含層出土土器を一括して扱う。

**土鍋** (83) 口縁端部が屈曲して立ち上がる。胴部はあまり張らないようである。胎土には粗い砂粒が多くみられる。

**青磁碗** (84) 体部外面に鎬蓮弁をもつ碗で、13世紀中葉~14世紀前半頃のものともみられる。

**すり鉢** (85) 備前焼のすり鉢で内面に斜行するすり目 (4本/cm) がみられる。

**瓦器椀** (86~88) しっかりした高台のつくもの (86) と退化した高台をもつもの (87・88) がある。後者は、13世紀中葉~後半頃であろう。

**須恵器** (89~125) **杯蓋** (89~99) 屈曲部にシャープな凹線が施されるもの (89)、低い段差をもつもの (90)、屈曲部が不明瞭なもの (92~93・95~98) 等がみられる。99は、かえりのつくものである。口径は13~14cmを測るもの (90~92) と12~13cmのもの (93~97) がある。97・98は土師質に近い焼成で、土師器杯身の可能性がある。

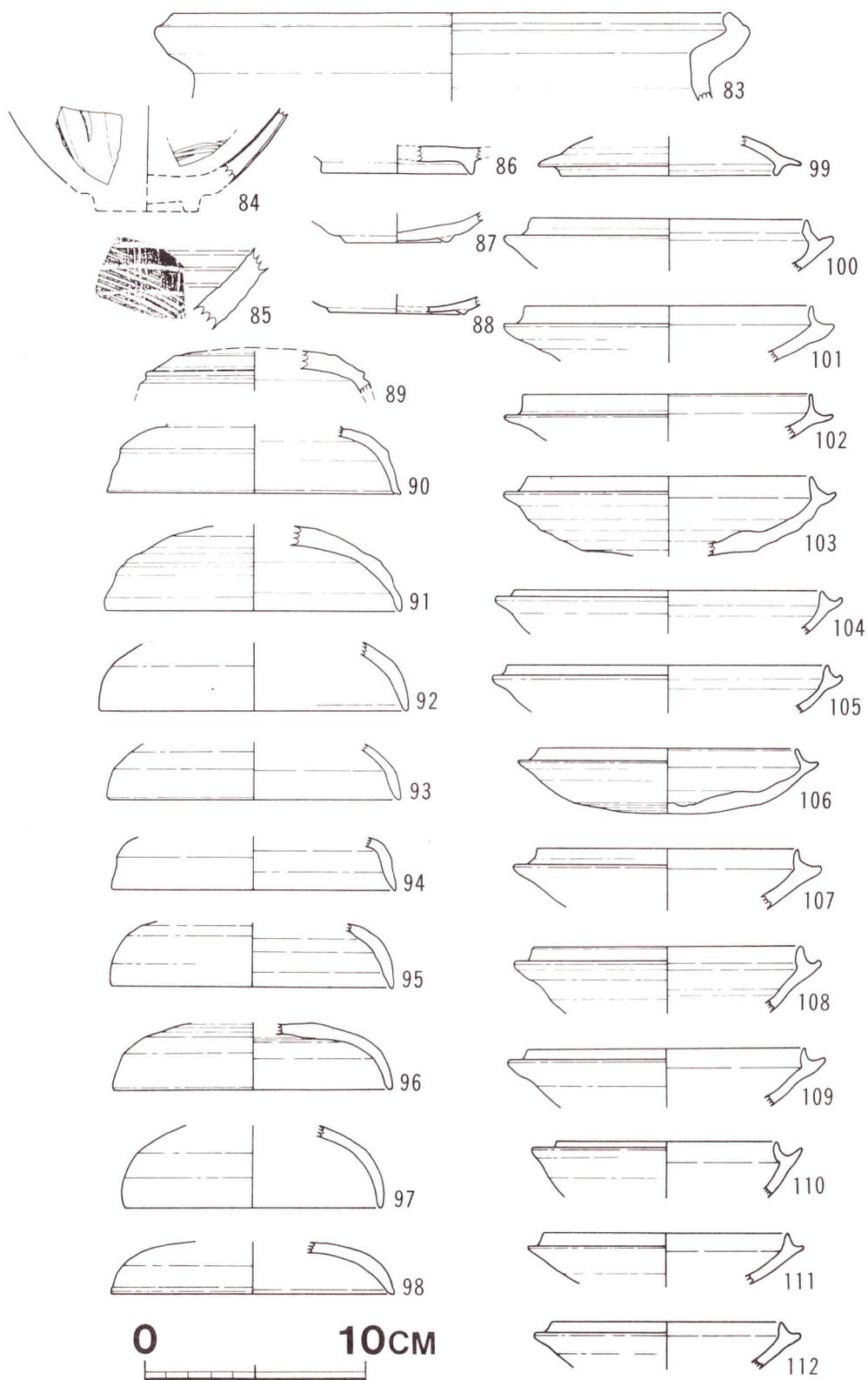
**杯身** (100~112) 受部径が13cm前後で受部が内方へ突出するもの (100~103)、受部径が14cm前後ながら受部があまり突出しないもの (104・105)、受部径が12cm前後で受部があまり突出しないもの (107~109)、受部径が10~11cmで受部があまり突出しないもの (110~112) 等がみられる。

**高杯** (113~116) 114は長脚二段透しの形態ながら、柱部上部が中実のため上段、下段とも完全な透しとならず、長方形の凹み部となっている。

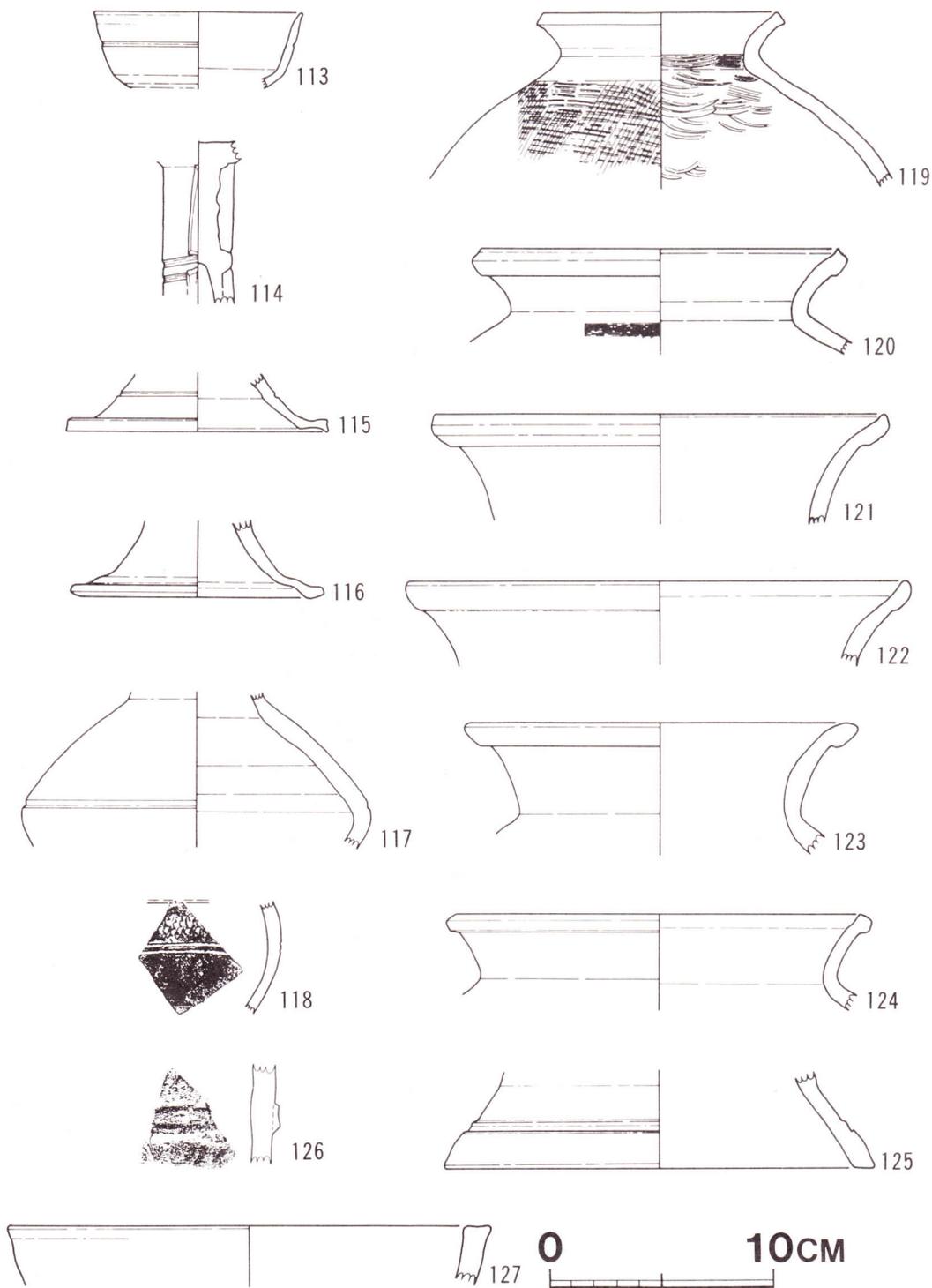
**壺** (117~119) 117の胴部には、凹線が一条みられる。118は凹線間にクシ状工具による刺突文が認められる。胎土は精良で、外面と内面下方に自然釉がかかる。胎土、焼成は他の須恵器とは明らかに異なっている。119の胴部外面は、平行タタキのちタテハケ調整がされる。

**甕** (120~124) 外反する頸部に肥厚する口縁部がつく。

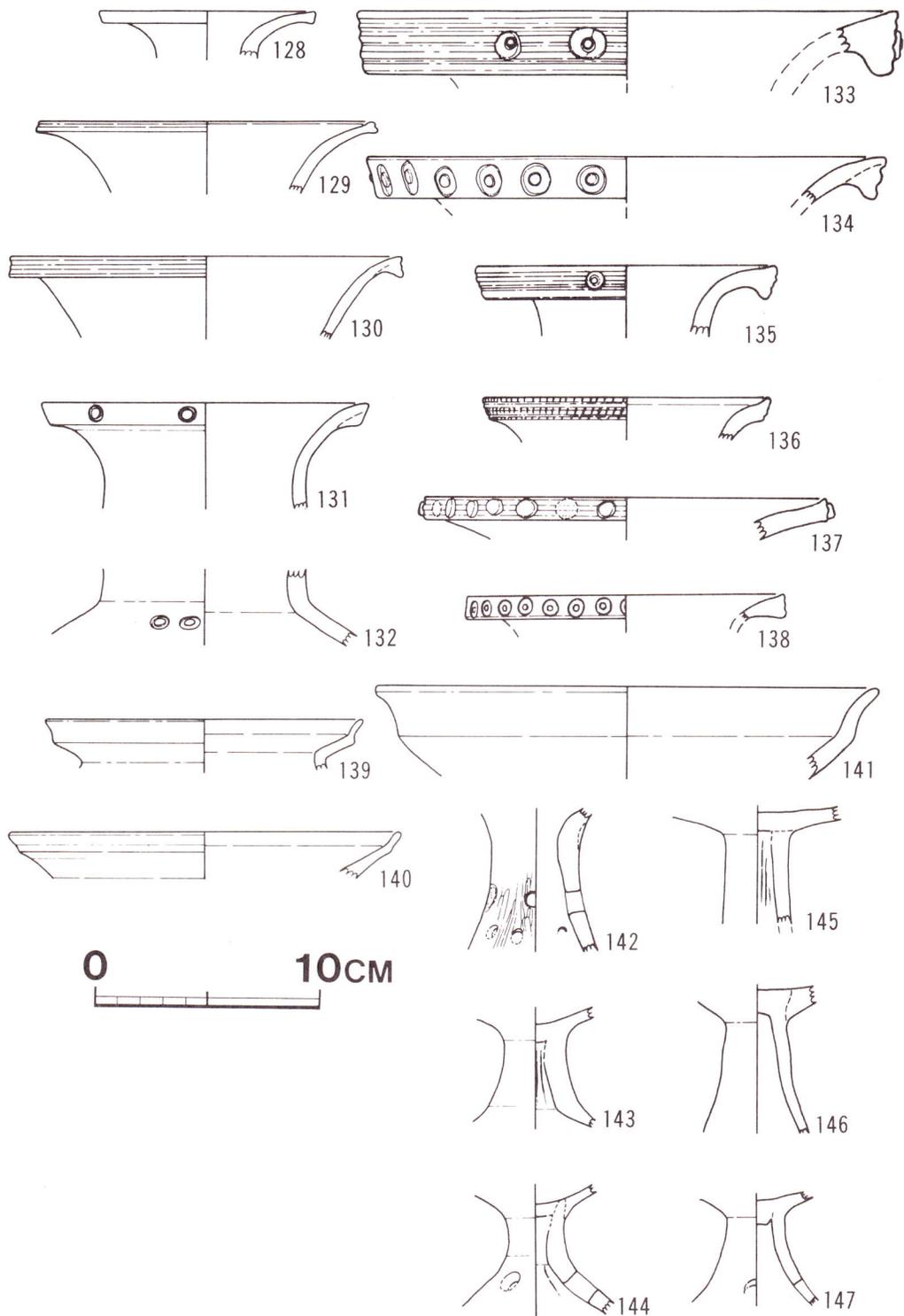
**器台** (125) 脚部の破片で、裾部は低く段状に肥厚する。



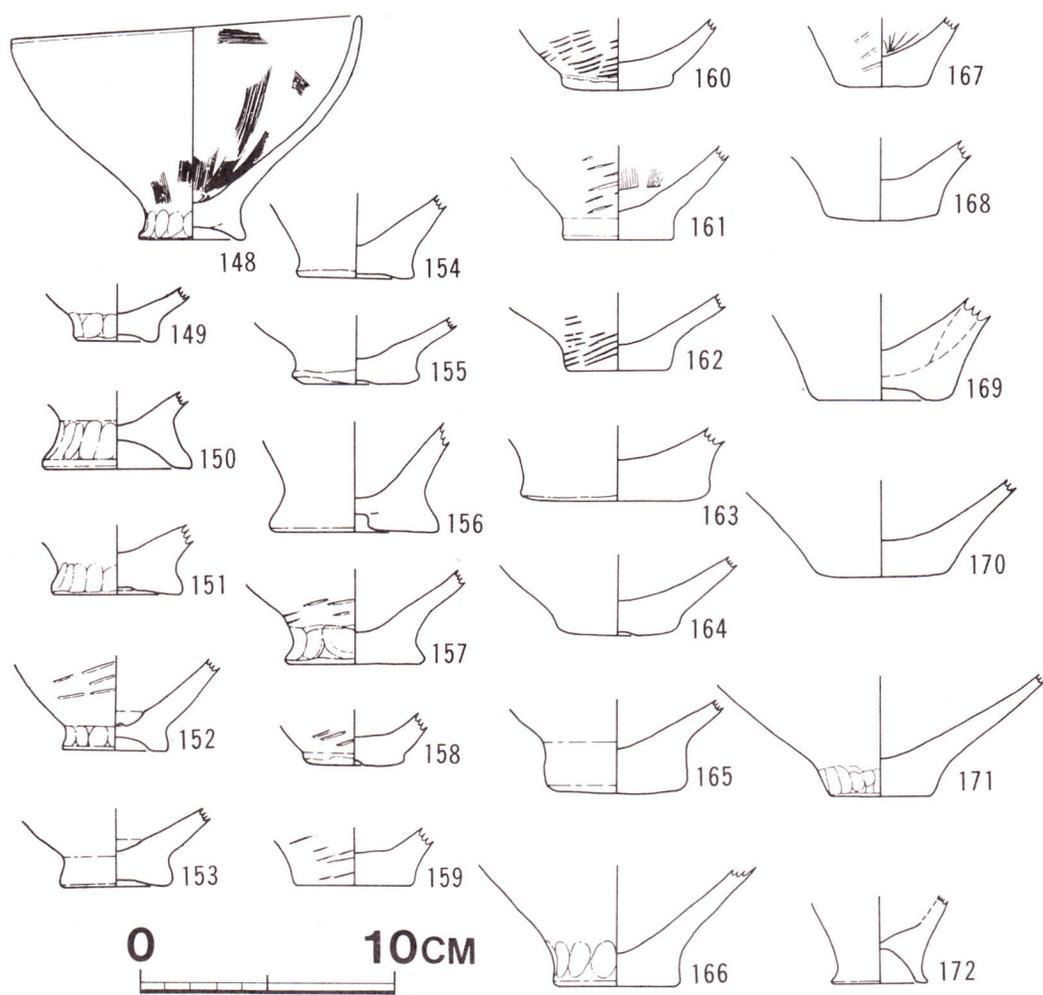
第20図 トレンチ部・拡張区2 包含層出土土器1



第21図 トレンチ部・拡張区2 包含層出土土器2



第22図 トレンチ部・拡張区 2 包含層出土土器 3



第23図 トレンチ部・拡張区2 包含層出土土器 4

以上の須恵器は、TK10～TK217型式のものがみられ、特にTK43～TK209型式が主体となっている。大部分は6世紀後半～7世紀初頭頃の所産とみられる。

**埴輪** (126・127) とともに円筒埴輪である。126のタガは低いM字状を呈し、高さ2～3mmしか突出しない。127は口縁部で、直径約22cmを測る。端部はわずかに外側に肥厚させている。いずれも土師質焼成で磨滅が著しい。6世紀代の所産とみられる。<sup>(註8)</sup>

**弥生土器** (128～172) **壺** (128～138) 頸部が外反するものが大部分である。口縁端部はわずかに肥厚するもの (128・129)、粘土を貼り付けて垂下口縁になるもの (130・131・133～135)、上方へ拡張するもの、(136・137) 等がみられる。端面施文は、無文 (128)、凹

線文のみ (129・130)、竹管文のみ (131・134・138)、凹線文+刻み目 (136) 等がみられる。

**甕** (139・140) 口縁部の途中に屈曲部をもち、139は立ち上がりの角度が急である。

**高杯** (141~147) 141は皿形の高杯である。142~147は脚柱部で、142は二段に円形透しが穿たれる。

**鉢** (148) 上げ底で外方向へ突出気味の底部をもつ。胴部は内弯しながら立ち上がり、内外面は細かいハケメにより調整されていたようである。

**底部** (149~172) 上げ底で端部が外方向へ突出するもの (149~154)、平底あるいは平底気味で底部が突出するもの (155~157)、平底で胴部と底部の境が不明瞭なもの (158~166・171)、平底で胴部と底部の境が不明瞭なもの (167~177)、極端な上げ底で脚台風の形態をもつもの (172) などがある。151・155・158・164の底面中央には、径1.5cm前後の指頭による凹みが認められる。

以上の弥生土器は、弥生時代後期の所産であろう。

#### 拡張区1 包含層出土土器 (第24図~第28図)

**甕** (第24図) 173~185・198・199) 包含層の第4、5層より弥生時代~古墳時代の土器が混在して出土している。173~175・177・182・183は、くの字に折れ曲がる口縁をもち、口縁端面に刻み目をもつもの (177・182) もみられる。これらの大部分は、弥生時代後期後半を中心とする時期の所産であろう。179は口縁端面をわずかに上方に肥厚させ、184は内面の口縁部と胴部の境がシャープに作られている。ともに古墳時代初頭の所産とみられる。176、178、181は、屈曲部の器肉が厚く、胴があまり張らないタイプで、古墳時代の所産とみられる。198、199は、口縁部が屈曲し、受口状となるタイプで、弥生時代後期前半頃のものであろう。ただし、198は頸部の形態より壺になる可能性もある。

**壺** (第24図186~197、第25図200~205・207~209・211) 外反する頸部から口縁部にいたる形態をもつものが大半である。口縁端部の肥厚が顕著でないもの (186・191・197・201・202・204・205) と粘土を貼り付けて下方に口縁端部を肥厚させたもの (187・188・190・193・195・196・200・203・207・209) がある。口縁端面には、刺突文 (190・191)、竹管文 (195)、円形浮文 (196)、擬凹線文 (200) などが施文される。211は、二重口縁壺の口縁屈曲部で、刺突文がみられる。以上の土器は、時期的には弥生時代後期後半の資料が多い。

**高杯** (第25図210・212~228) 210は結合土器の一種であり、高杯の口縁屈曲部に擬凹線をもつ垂下部が付加されたとみられる。212、213は、皿形高杯で、弥生時代後期の所産である。214~228は、高杯脚部であるが、223は脚台部に近い形態をもつ。脚部上部が中空のもの (215・217~221・224・225・227) と中実のもの (214・216・226・228) の両者が存在する。時期的には弥生時代後期を中心とするものとみられ、そのうち228は脚部が長

く古い様相をもち、中実で脚部が短い214は新しい様相をもつと理解される。

**底部**（第26図～第28図）拡張区1の包含層からは、さまざまな形態の底部が多量に出土した。煩雑さを避けるために底部の形態により以下の通りに分類して記述する。

A類（底部が下方へ突出する）

- A 1 類（平底に近い底面をもつ）
  - A 1 a 類（底面がほぼ平坦面となる）
  - A 1 b 類（底面が丸味をおびて突出気味になる）
- A 2 類（底面の中央部付近のみが上げ底になる）
  - A 2 a 類（上げ底部の深さが、胴部内底面の器壁の厚さを越えない）
  - A 2 b 類（上げ底部の深さが、胴部内底面の器壁の厚さと等しいかそれを越える）
- A 3 類（端部以外の底面全体が上げ底になる）
  - A 3 a 類（上げ底部の深さが、胴部内底面の器壁の厚さを越えない）
  - A 3 b 類（上げ底部の深さが、胴部内底面の器壁の厚さと等しいかそれを越える）

B類（底部と胴部の境が不明瞭になる）

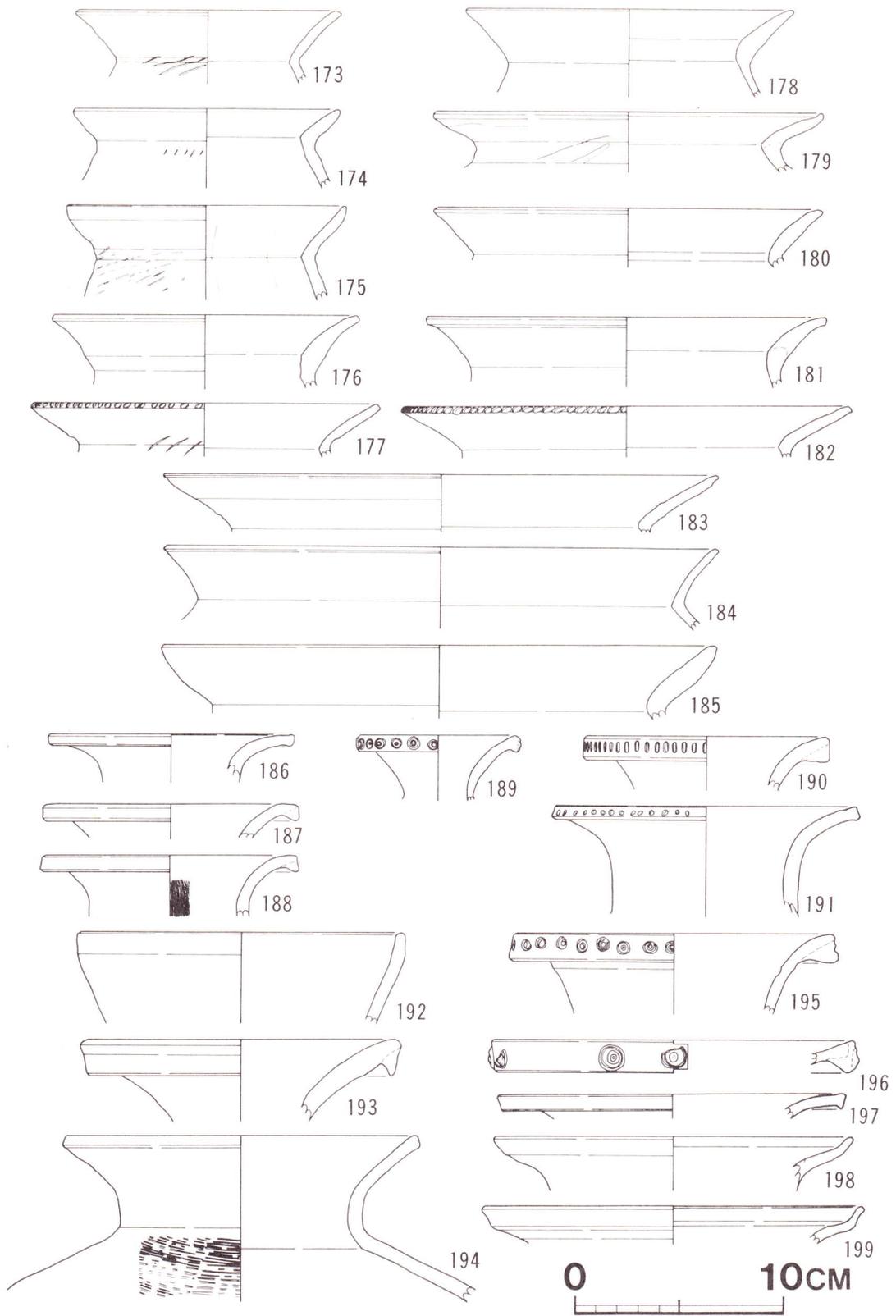
- B 1 類（平底に近い底面をもつ）
  - B 1 a 類（底面がほぼ平坦面となる）
  - B 1 b 類（底面が丸味をおびて突出気味になる）

全体の中で最も主体的であるのは、A 1 a 類とA 2 a 類であり、それぞれ全体の約3分の1程度を占める。次いで多いのは、A 3 a 類・A 2 b 類・B 1 a 類・A 3 b 類でそれぞれ全体の10%・8%・6%・5%程を占める。A 1 b 類・B 1 b 類は極めてまれで、1～2点しか確認されていない。A 1 a 類のなかでも底部の端部が外へ大きく張り出すもの（294）や直立して立ち上がるもの（231・232・249・257・268・269）、胴部からゆるく屈曲して端部にいたるもの（229・230・240・241・259・262）など多様性が認められる。A 2 a 類についても同様である。

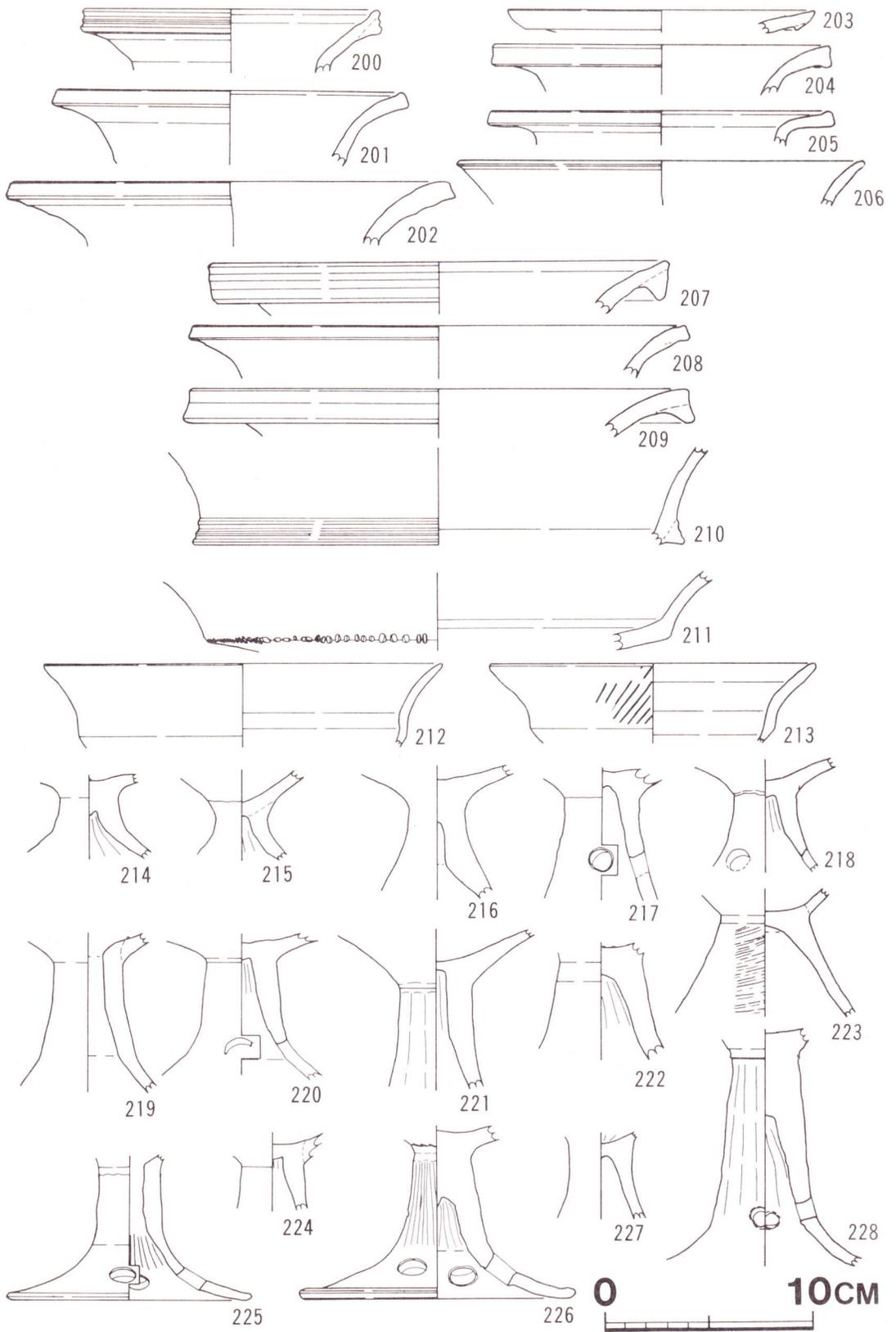
突出する底部から極端に大きく開いて胴部にいたる形態をもつ258（B 1 a 類）・259（A 1 a 類）・260（A 1 b 類）・263（B 1 a 類）・272（A 2 a 類）・303（A 3 a 類）・310（A 1 a 類）・354（A 2 b 類）や底部から屈曲せずに内弯気味に胴部につづく250（B 1 a 類）・255（B 1 a 類）などは壺の底部になる可能性がある。それら以外の大部分は甕・鉢の底部とみられる。

底径については平均4.65cmを測り（形態分類した120個体で計算）、4.0～5.5cmに全体の約8割が集中する。形態別では、A 3 a 類が平均5.08cm（11個体）で大きく、B 1 b 類が平均3.15cm（2個体）と小さい以外は、各形態とも平均4.5～4.7cmの値を示す。

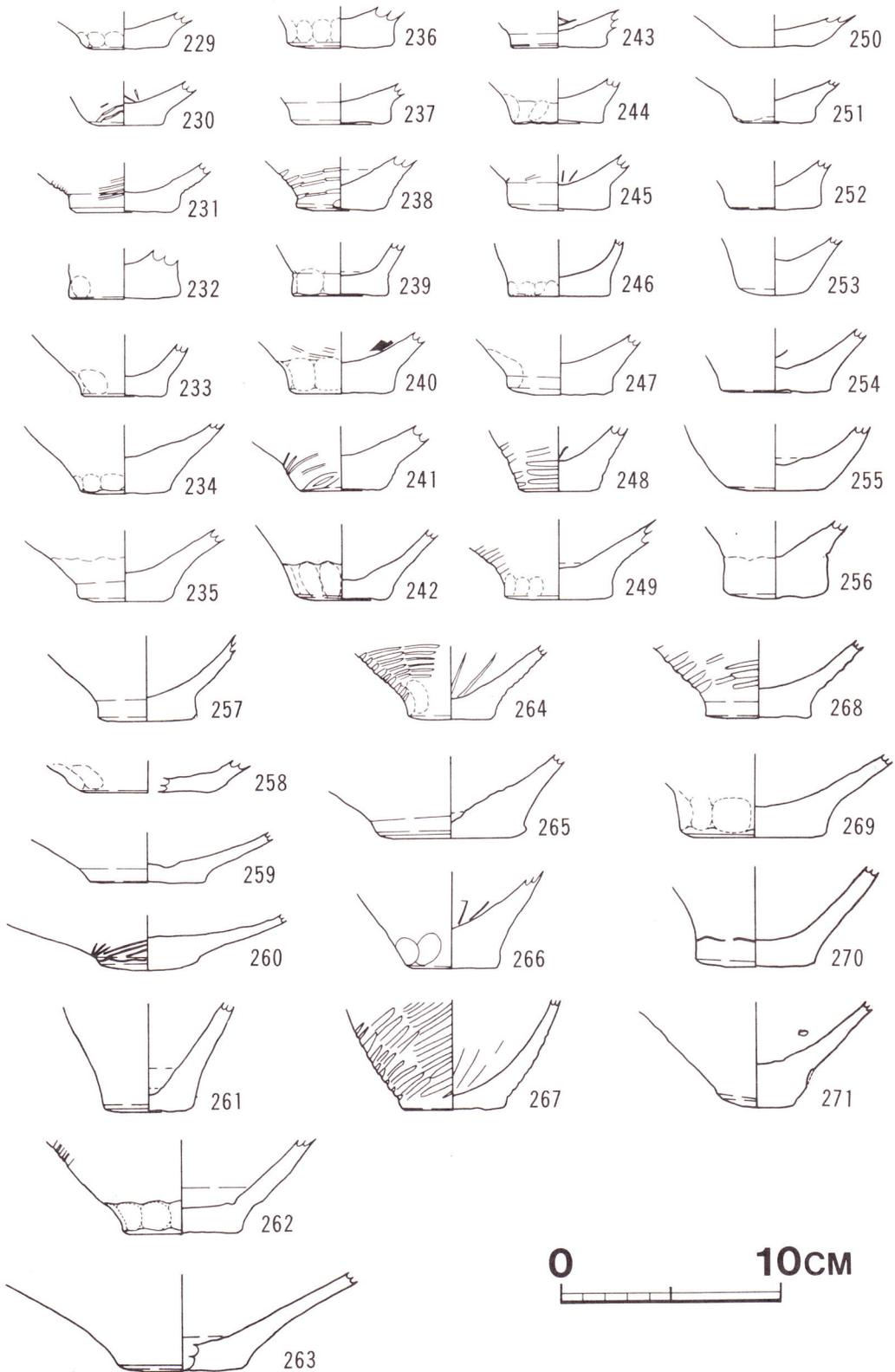
以上の底部については、大部分が弥生時代後期後半の所産とみられる。



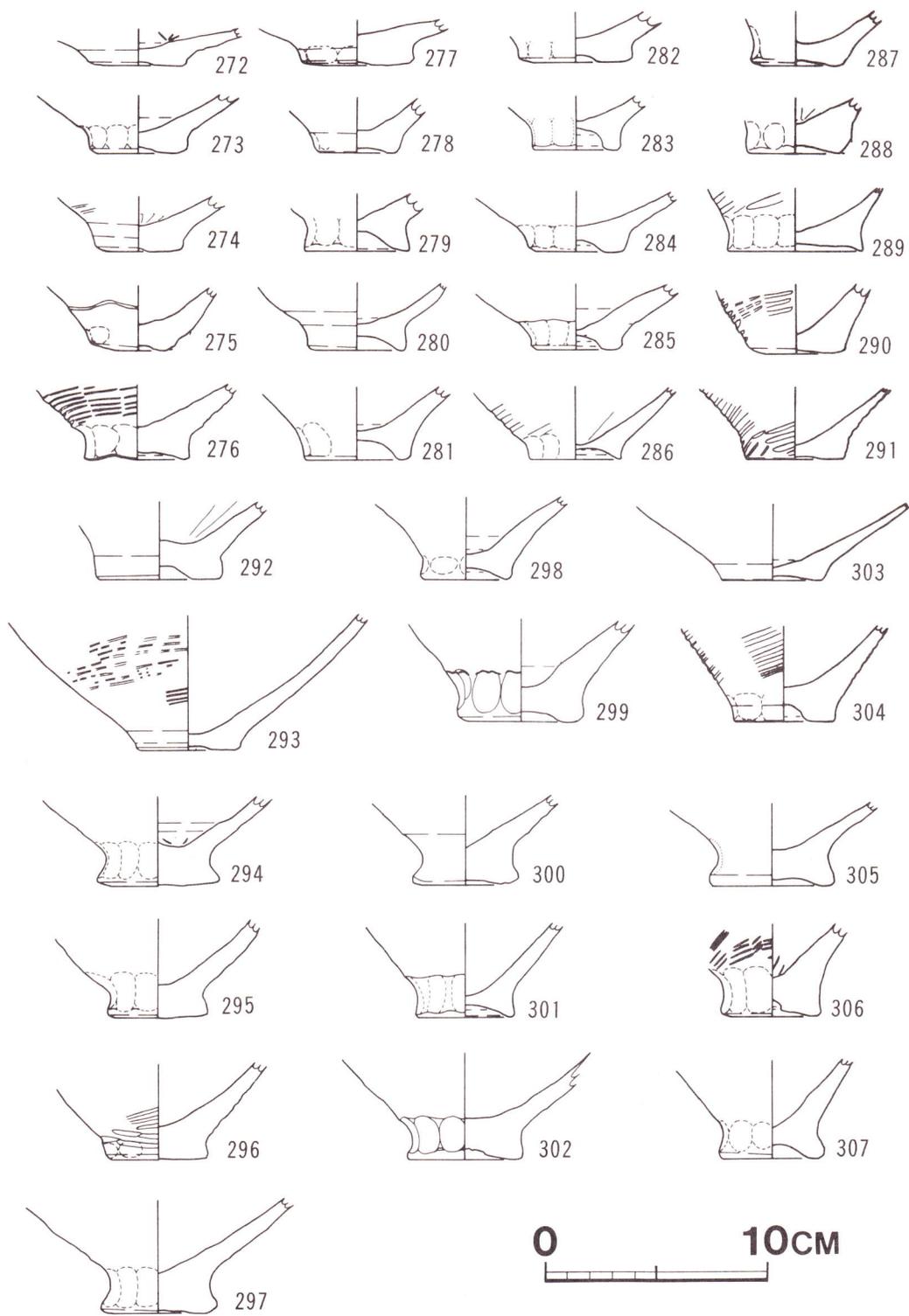
第24図 拡張区 1 包含層出土土器 1



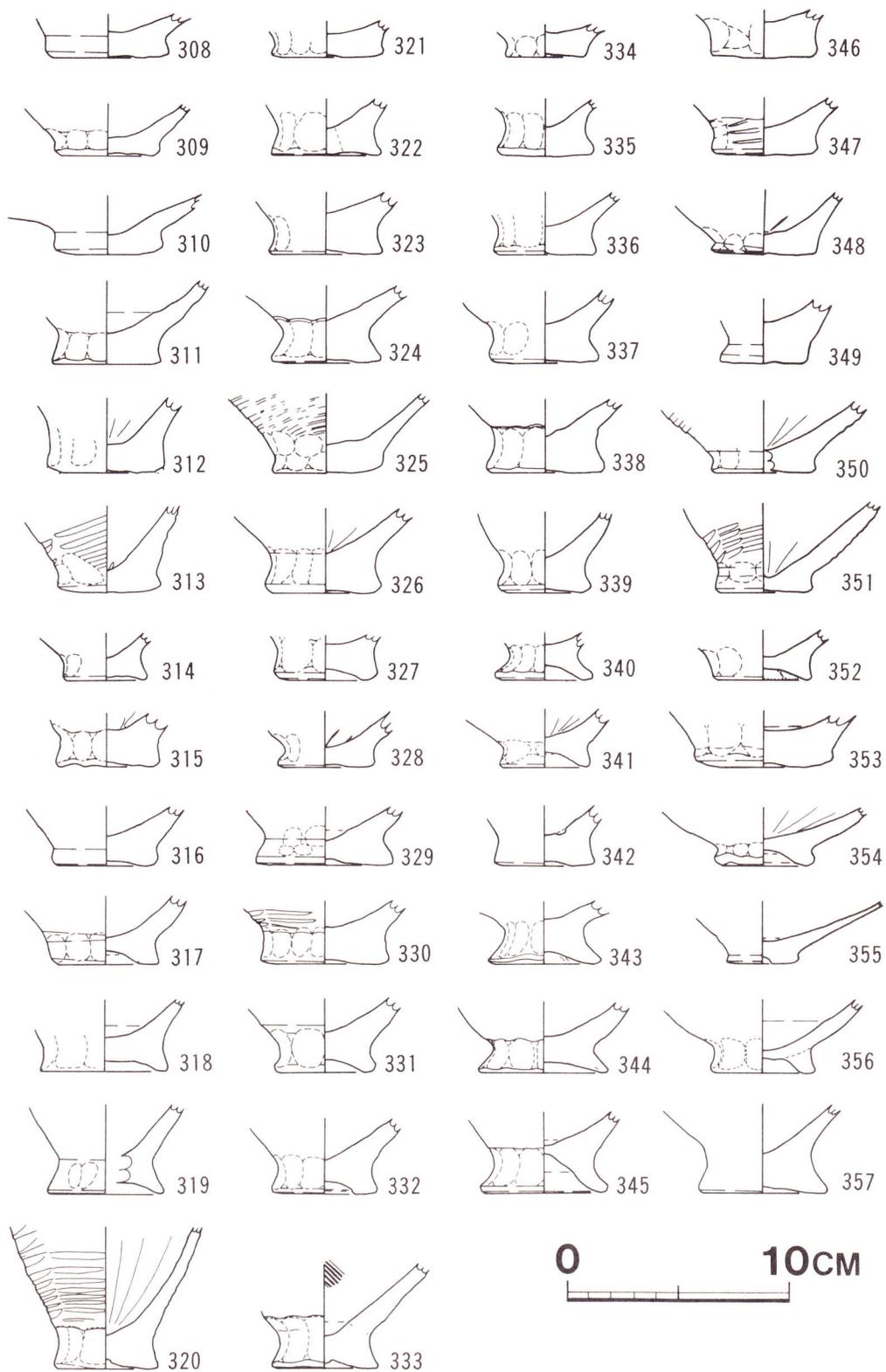
第25図 拡張区1 包含層出土土器2



第26図 拡張区1 包含層出土土器3



第27図 拡張区1 包含層出土土器4



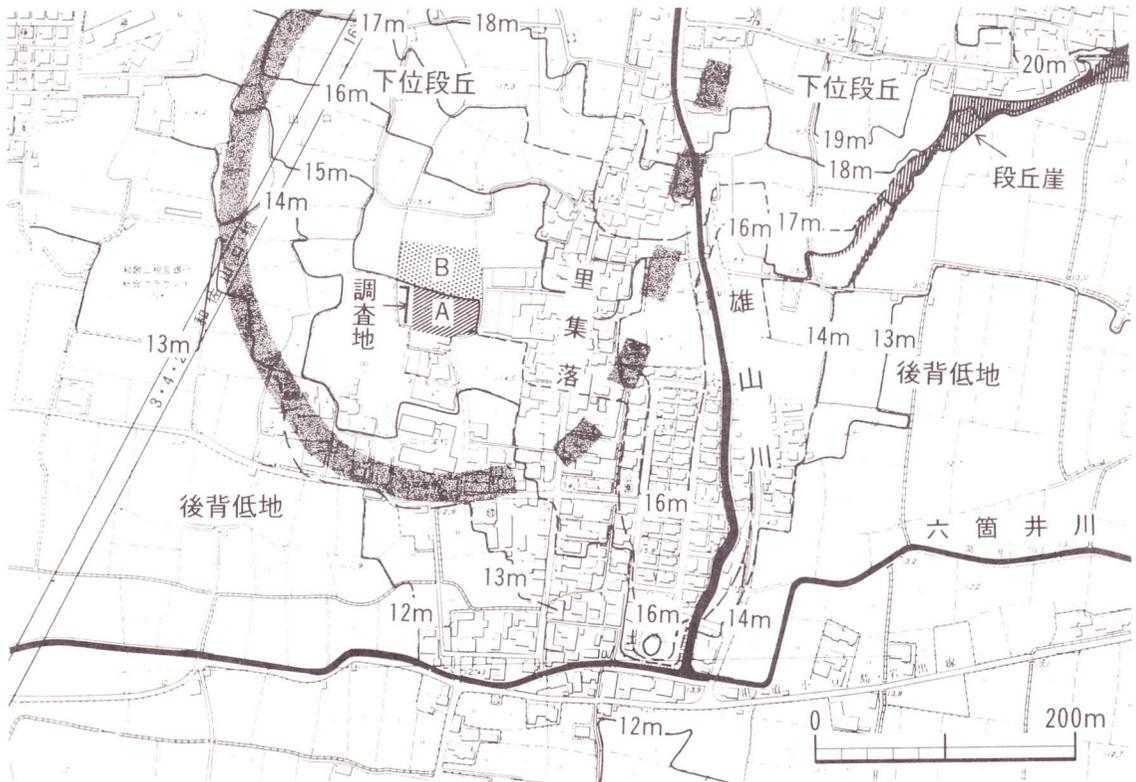
第28図 拡張区1 包含層出土土器 5

## 4. まとめ（第29図～第39図）

### (1) 周辺の地理的環境と遺跡の範囲（第29図）

山口遺跡は、東西約600m、南北約600mにも及ぶ推定範囲をもつ広大な遺跡である（第1図参照）。しかしながら、山口小学校周辺における調査地以外は全く様相が不明であり、その性格も不明確である。ここでは、周辺の地理的環境より、山口遺跡南半部の遺跡の範囲を若干推定しておく。

本遺跡は、雄山峠付近に源を発し、南流して紀ノ川に注いでいたとみられる雄山川の形成した扇状地上に立地している。本調査地の東約300mの地点から東北東方向にかけては比高2～2.5mを測る段丘崖が観察され、本遺跡が下位段丘上に位置しているとも言える（第29図）。周辺の等高線の様子から、今回の調査地は雄山川からやや西寄りに展開した扇状地形のほぼ中央に位置していることがわかる。雄山川に沿って標高14～16mの等高線が突出しているのは、雄山川の流路固定に伴う土砂堆積作用の結果であると推定される。近世の山口御殿の建設やそれ以降の学校関連の工事等により、山口小学校内の等高線の状態が不明であるが、今回の調査地を含めた標高14～16m付近が傾斜が最もゆるやかで、平坦地に近い様相を示している。調査地内で弥生・古墳時代の遺構が検出されたことにより、



第29図 周辺の地理的環境と遺跡の範囲

当時の人々はこの扇状地形の中央部の緩斜面を生活の中心の場としていた可能性が強まったと言える。今回の調査結果により、隣接地のAの水田・畑では弥生時代の溝と古墳時代の掘立柱建物が検出されるのは明らかであり、Bの水田には弥生時代の遺構が存在する可能性が高い。

遺跡の範囲については、調査地の北西約150m付近の標高14～17mの等高線の様子から、この付近が小さな谷状地形をなしていたとみられ、これを西端に想定し、南端については扇状地と後背低地の境である標高13mの等高線により区切ることが可能である。東端については、雄山川による地形変化や里集落の存在により本来の微地形が不明確であるが、先述の段丘崖の西端部の標高16～19mの等高線の状況により、本調査地から東約150～170mの里集落の東縁部をその東端に想定しておく。結果として、弥生・古墳時代を中心とする山口遺跡の南半部は東西約350mを測り、楕円形を呈する一つの範囲が設定できる。散布地の範囲は、この推定範囲より広がっていることにより、周辺には別の遺跡が存在している可能性もある。

## (2) SD-10出土弥生土器の位置付け (第30図～第39図)

トレンチ部5区と拡張区2で検出された溝(SD-10)からは、残存率の高い弥生土器(壺・甕・高杯・蓋)が出土した。これらは層位によって形態差が認められず、一括性の高い資料とみられる。本項では、皿形高杯や受口状口縁をもつ甕の分析を中心として、紀伊北部(紀ノ川流域～日高川流域)における本資料の位置付けを検討したい。

### 〈1〉皿形高杯の分析

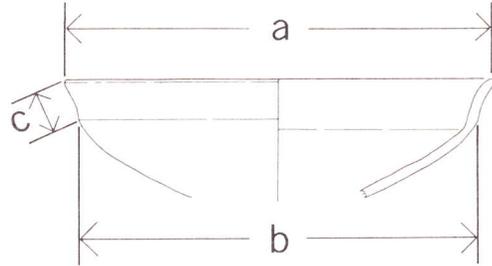
#### i. 分類

弥生時代後期の高杯には、杯部の口縁が外反して体部との境に稜線をもつ皿形高杯と体部から内弯しながら口縁部にいたる椀形高杯の二種類が存在する。後期前半頃に盛行期をもつ紀ノ川流域の船岡山遺跡(かつらぎ町)では、皿形高杯：椀形高杯の比率は約8：2(報告書に実測図掲載分<sup>(註10)</sup>107個体)で、後期後半から一部庄内期に及ぶ有田川流域の田殿・尾中遺跡の溝・住居跡等出土資料ではその比率は約9：1(報告書に実測図掲載分<sup>(註11)</sup>85個体)である。时期的・地域的特質は、今後各遺跡の詳細なデータが必要だが、県内の弥生時代後期の遺跡から出土する高杯については、8～9割が皿形高杯で、残りの1～2割が椀形高杯であったものとみられる。

直線的で屈曲部の多い皿形高杯については、すでに渋谷高秀、土井孝之氏により後期の土器の中で最も時期差を反映する器種として注目され、時期が新しくなるにつれて口縁部が発達し、逆に体部が縮小することが指摘されている。また、法量についても、口径・器高が縮小する方向にあることが言われている。<sup>(註12)</sup>

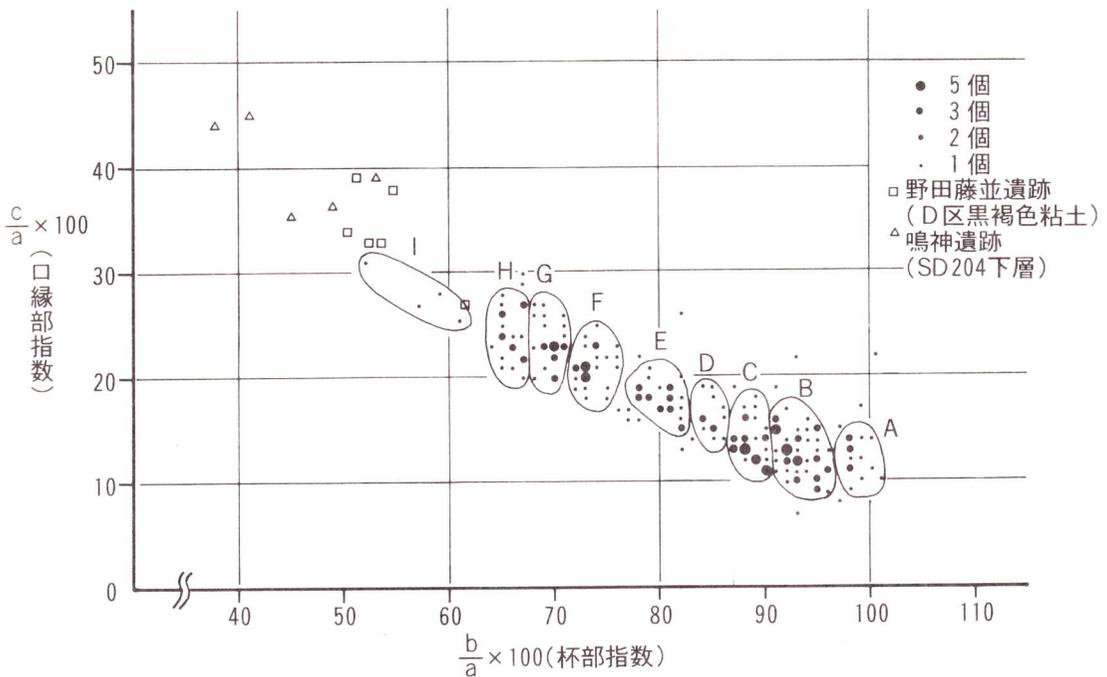
本報告も、基本的には上記の成果を追認するのみであるが、皿形高杯の屈曲部から上部

の破片も資料化し、より細かな変化を見出すために、第30図の様に杯部の口径（a）、杯部径（b）、口縁部の長さ（c）を報告書等より算出し、杯部指数（ $\frac{b}{a} \times 100$ ：杯部径が口径に対して占める割合）と口縁部指数（ $\frac{c}{a} \times 100$ ：口縁部の長さが口径に対して占める割合）を算出した。つまり、杯部指数が小さいほど杯部が縮小しており、口縁部指数が大きいほど口縁部が発達していることとなる。



第30図 皿形高杯分類の基準

紀ノ川流域から日高川流域に至る紀伊北部の弥生時代後期の遺跡（一部弥生時代中期末と古墳時代初頭を含む）<sup>(註13)</sup>から出土した皿形高杯約260個体について、口縁部指数をタテ軸に杯部指数をヨコ軸にとりグラフ化したのが第31図である。これによると、その分布は右下がりのほぼ一直線に並び、口縁部指数と杯部指数が相関関係にあるのが判明する。資料が多く、境界が不分明ながら布留式併行期を除く約250個体についてはおおむねA～Iの9タイプに分類できるようである。これらは、口縁部が短く体部の大きいAタイプから、口縁部が長く体部が短いIタイプへ型式学的には一連の組列を示している（第35図）。



第31図 皿形高杯の分類（野田藤並遺跡、鳴神遺跡出土資料は布留式古段階併行期）

器種 出土場所	皿形高杯					受口状甕						
	タイプ	A	B	C	D	E	A1	A2	B1	B2	C1	C2
SB-01 柱1 (床面)			┌───┐						┌───┐	┌───┐		
SB-03 床 上層		┌───┐		┌───┐								
SB-04 炉 覆土				┌───┐		┌───┐						
SB-05 床面 新壁溝層 4層 2層 1層		┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐		┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐
SB-06 下層 上層		┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐						
SB-07 床 覆土		┌───┐		┌───┐								
SB-08 6層 5層 2層								┌───┐	┌───┐			┌───┐
SB-09 床面 下層 覆土		┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐			┌───┐		
SB-10 床面 中央炉等 壁溝上層 床直上層 中層		┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐						
SB-10 4層 に伴う3層 SD-6 中層 上層		┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐					┌───┐	
SB-11 床面 下層 上層		┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐			┌───┐			
SK-96 SK-103 SK-175 SK-196 SK-227 SK-228 SK-230 SK-544 SK-613 SK-629 SK-634 SK-659		┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐		┌───┐		┌───┐		┌───┐
弥生II包含層 弥生I包含層		┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐		┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐
下層 IV区包含層中層 上層								┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐	┌───┐

第32図 船岡山遺跡における皿形高杯・受口状甕の出土状況  
 (┌───┐1点 ┌───┐┌───┐2点 ┌───┐┌───┐┌───┐3点 ┌───┐┌───┐┌───┐┌───┐推定)

ii. 出土状況

弥生時代後期前半を中心とする船岡山遺跡（かつらぎ町）では、住居跡の覆土を中心に精緻な分層発掘が実施されている。<sup>(註14)</sup>良好な一括資料に乏しいのは惜しまれるが、船岡山遺跡において前項で分類された皿形高杯が層位的にどの様な出土状況を示すのかを検討したのが第32図である。

それによると、住居跡床面及び覆土下層にはA・Bタイプが多く出土し、覆土上層にはC・D・Eタイプが認められる。多少の混入・混在はあるとしても、

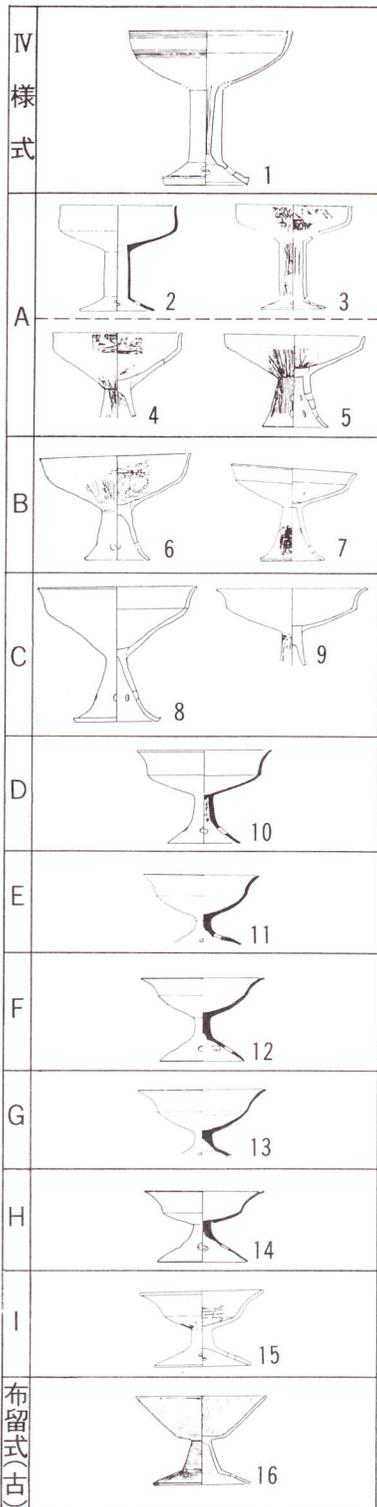
SB-03・04・05・06・07・09・11やSB-10に伴うSD-6などの様相よりみてA→B→C→D・Eと変化したと想定される。ただ、層位的資料である弥生I・II（落ち込み状地形の堆積層で、弥生Iが弥生IIより上位に位置する）は各タイプが混在しており、一括性に欠けている。

タイプ 出土場所	E	F	G	H
溝2 下層	3	9	9	3
中層	6	6	4	7
上層		1		2

第33図 田殿・尾中遺跡、溝2における皿形高杯の出土状況

遺跡・遺構名	高杯	杯部形態	個数	高杯	脚部形態	個数	伴出・共存資料										註
							長頸壺	広口長頸壺	受口状壺	器台	二重口壺	細頸壺	手捻り土器	つまみ上げ高杯			
①橋谷 (和歌山市)	A	B	8	A	B	41	●		●	●							15
②船岡山 (かつらぎ町)	A	B	C	D	E	80	●	●	●	●							16
③船岡山 SB-01 床面・柱穴等 ( // )	A	B				2											17
④船岡山 SB-05 床・壁溝等 ( // )	A	B		A	B	9											18
⑤東郷 SD-2 中層 (御坊市)		B		A	B	7			●								19
⑥山口5次 SD-10 (和歌山市)		B		A	B	4			●								20
⑦血縄 (橋本市)	B	C	D		B	5	●		●	●			●				21
⑧星尾山・野井奥の谷 (有田市)	B	C	D	A	B	7			●								22
⑨滝ヶ峯 (和歌山市・海南市)	A	B	E	A	B	9			●								23
⑩亀川6次 グリッド18 土器溜まり (海南市)		C			B	4							●				24
⑪亀川3次・4次 ( // )		E			B	7	●						●	●			25
⑫東郷 SD-25 (御坊市)		E		B	C	2									●		26
⑬亀川5次 SB-51 (海南市)		F				0										●	27
⑭亀川1次 第1溝 ( // )	C	D	F	G		4			○								28
⑮田殿・尾中 溝2 下層 (吉備町)	E	F	G	H		25							●				29
⑯田殿・尾中 溝2 中層 ( // )	E	F	G	H		24											30
⑰田殿・尾中 溝4 ( // )	F		G			4							●				31
⑱田殿・尾中 溝2 上層 ( // )	F	H	I		B	C							●			●	32
⑲亀川5次 SD-54 (海南市)	G	H		B	C									●	●		33
⑳田殿・尾中 東端高地 (吉備町)	F	G	H	I	B	C							●				34
㉑田殿・尾中 溝1 ( // )	E	F	G	H	B	C										●	35
㉒野田・藤並 4区CD区 灰色粘土 ( // )		G			B								●			●	36
㉓亀川5次 土器溜まり 古・C (海南市)		I		B	C					●			●		●		37

第34図 主要遺跡出土の皿形高杯の組成と共伴・共存資料 (註50)  
 (脚部形態 A:柱状 B:八の字状 C:中実の八の字状)  
 (●:1点 ●:2~4点 ●:5点以上、白ヌキは推定)



第35図 後期を中心とする皿形高杯の組列(縮尺12分の1)

後期後半にその中心時期をもつ田殿・尾中遺跡(吉備町)の溝2では、溝の上層に一括投棄された状況で多量の土器群が検出され、3層に分層して取り上げられている(第33図)。下層・中層ともE~Hの各タイプを含み、上層では資料が少ないもののHタイプの占める割合が増加するようである。

第34図は、紀伊北部の主な遺跡・遺構から出土した皿形高杯のタイプ別の保有率と高杯脚部の形態やその他の時期的特徴を示す器種との共存状況を示したものである。高杯の柱状脚部や器台、長頸壺、いわゆる受口状口縁をもつ甕(以下受口状甕と称する。次項で若干の検討を加える。)など弥生時代中期から継続したり、弥生時代後期前半に盛行するとみられる器種・形態が認められる遺跡・遺構では、皿形高杯A・B・Cタイプが多数を占めている。それに対して、二重口縁壺、細頸壺、手焙り形土器、口縁端部をつまみ上げる皿形高杯(以下につまみ上げ高杯と称する)、低脚で中実の高杯など弥生時代後期後半から古墳時代初頭頃にかけて盛行する器種・形態が認められる遺跡・遺構では、皿形高杯F・G・Hタイプが多くみられる。

以上の層位的資料や遺跡・遺構ごとの共存状況よりみて、前項で分類された皿形高杯は、弥生時代中期末~古墳時代前期初頭にかけてA→B→C→D→E→F→G→H→Iタイプへと製作のモデルを変化させたとみられる(第35図)。

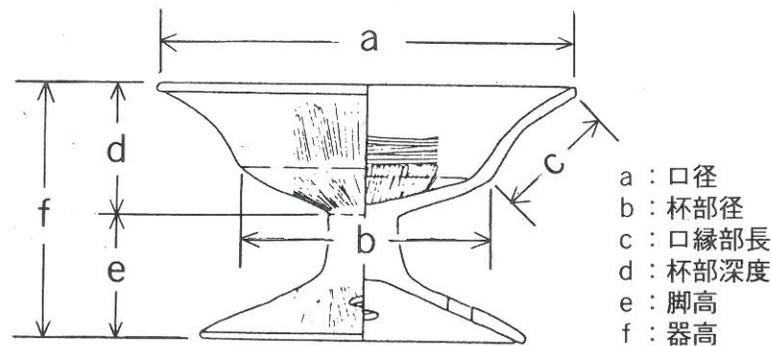
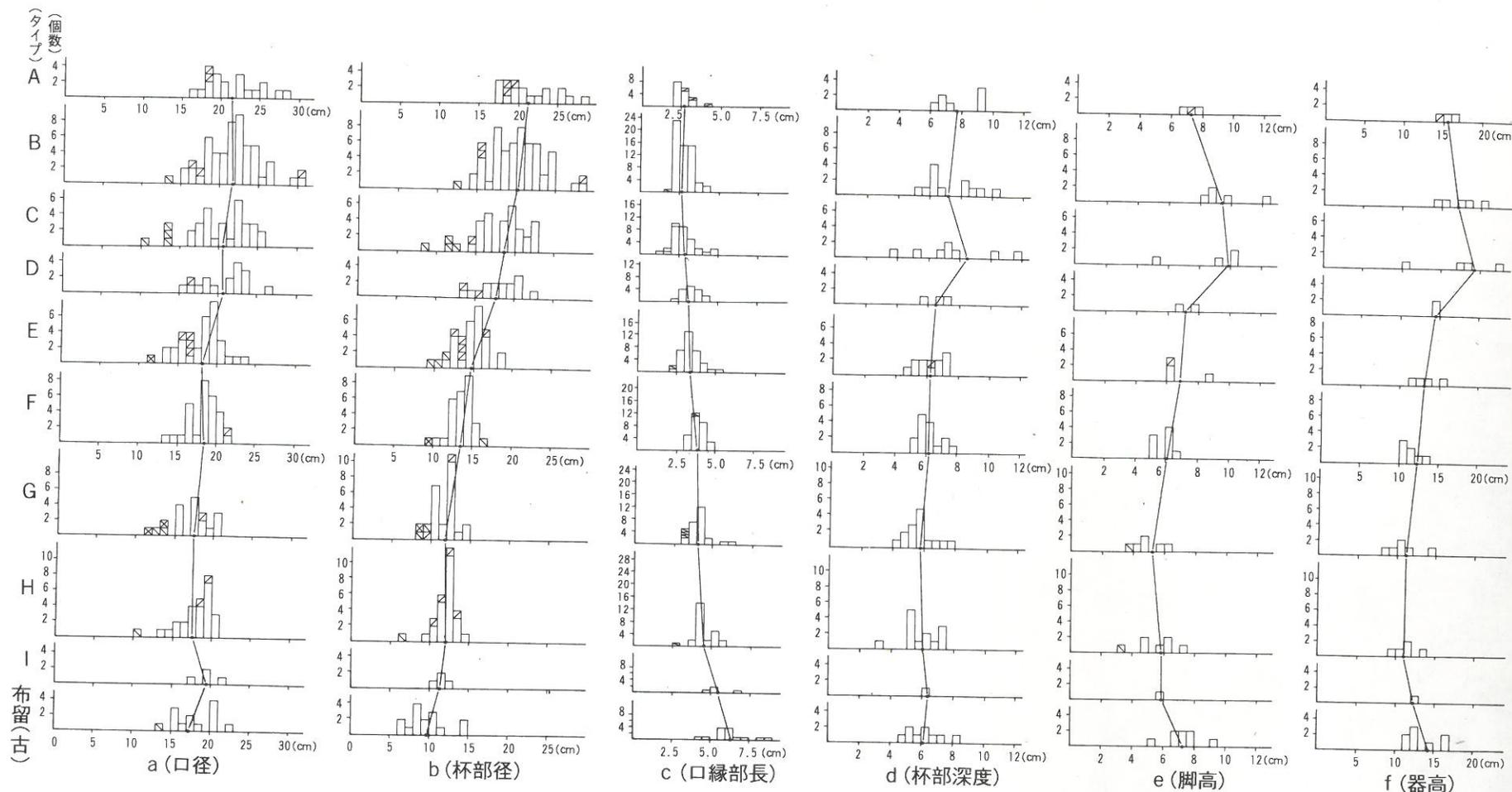
短期間のうちに埋没した遺構においては、皿形高杯が単一のタイプで構成される例があるが、現実的には遺構の埋土より2~4タイプがセットで出土するのが通例である(第32・34図)。遺構の埋没時期の序例は、層位的に検出された皿形高杯のタイプ別の保有率でおおむね決定できるであろう。

後期後半にその中心時期をもつ田殿・尾中遺跡(吉備町)の溝2では、溝の上層に一括投棄された状態で多量の土器群が検出され、3層に分層して取上げられている(註38)(第33図)。下層・中層ともE~の各タイプを含み、上層では資料が少ないもののタイプの占める割合が増加するようである。

第34図は、紀伊北部の主な遺跡・遺構から出土し皿形高杯のタイプ別の保有率と高杯脚部の形態や他の时期的特徴を示す器種との共存状況を示しものである。高杯の柱状脚部や器台、長頸壺、いわゆる受口状口縁をもつ甕(以下受口状甕と称する。項で若干の検討を加える。)など弥生時代中期から継続したり、弥生時代後期前半に盛行するとみられる器種・形態が認められる遺跡・遺構では、皿形高杯A・B・Cタイプが多数を占めている。それに対して、二重口縁壺、細頸壺、手焙り形土器、口縁部をつまみ上げる皿形高杯(以下につまみ上げ高杯と称する)、低脚で中実の高杯など弥生時代後半から古墳時代初頭頃にかけて盛行する器種・形態が認められる遺跡・遺構では、皿形高杯F・G・Iタイプが多くみられる。

以上の層位的資料や遺跡・遺構ごとの共存状況よみて、前項で分類された皿形高杯は、弥生時代中末~古墳時代前期初頭にかけてA→B→C→D→F→G→H→Iタイプへと製作のモデルを変化させたとみられる(註39)(第35図)。

短期間のうちに埋没した遺構においては、皿形高杯が単一のタイプで構成される例があるが、現実的には遺構の埋土より2~4タイプがセットで出土するのが通例である(第32・34図)。遺構の埋没時期序列は、層位的に検出された皿形高杯のタイプ別保有率でおおむね決定できるであろう。



 小形品       推定  
 ※折れ線グラフは、小形品を除いた平均値の変化を示す  
 ※布留式古段階は、鳴神地区遺跡SD204下層、野田藤並地区遺跡C・D区黒褐色粘土出土資料による。

第36図 皿形高杯の法量変化

### iii. 法量変化

皿形高杯は、口縁部が短く直立するものから、口縁部が長く外反するものへと変化した。以下では、分類された紀伊北部の各タイプの高杯の法量変化について述べる（第36図）。

口径（a）既述の通り弥生時代後期の皿形高杯の口径は、順次縮小する傾向にある。しかし、その変化は一律ではなく、B～Cタイプ、D～Eタイプ間に顕著に縮小する。A～Dタイプでは、口径25～30cm前後を越える大形品を含み、平均が20cmを越えるのに対して、Eタイプ以降は大形品がなくなり平均が17～18cm程度になる。また、度数分布にバラツキが少なくなるのもEタイプ以降である。

杯部径（b）口径よりも縮小する度合いが大きく、特にA～Eタイプへは急激に縮小する。Eタイプ以降は、漸次減少する傾向にあり、Iタイプ～布留式併行期に再び急激に縮小するようである。

口縁部長（c）A～Bタイプではほとんど変化しないが、Bタイプ以降は漸次長くなり、Hタイプ以降更に急激に発達する。

杯部深度（d）A～Cタイプでは、深さ8～12cmの深いタイプ（第35図 2・4・6・8）と深さ5～8cmの浅いタイプ（第35図 3・5・7・9）の二者が存在するようである。Dタイプ以降は深いタイプがみられなくなり、深さ6cm前後の平均値を保ち続ける。

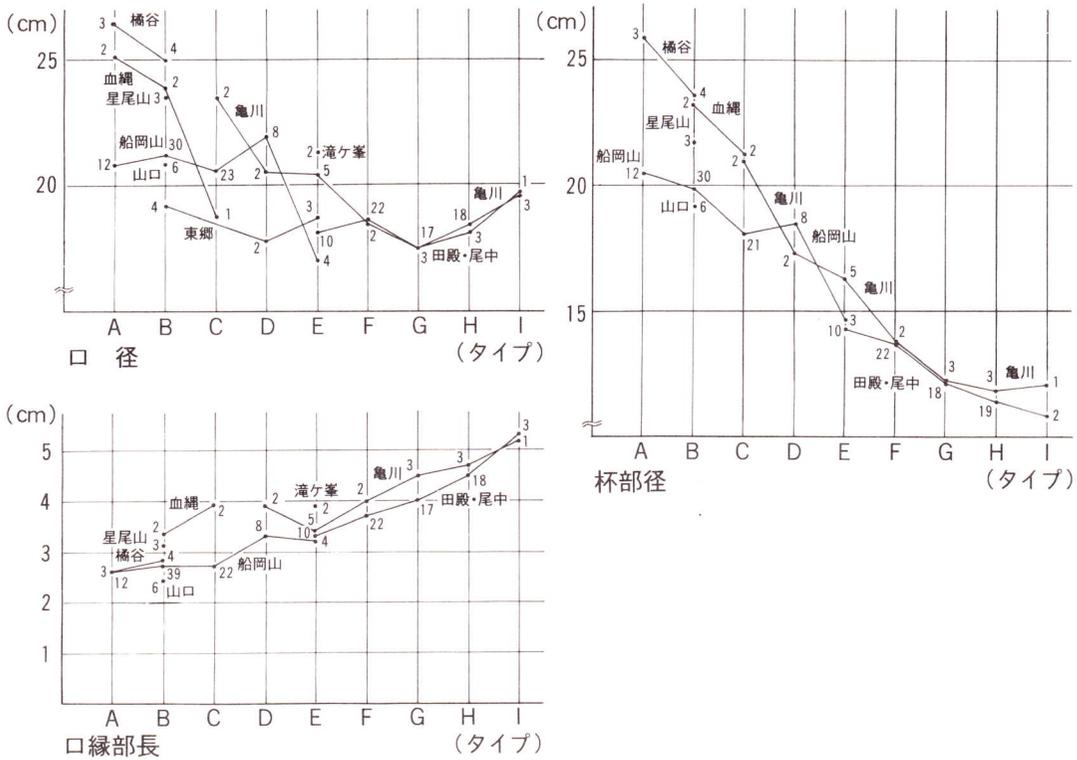
脚高（e）Aタイプの良好な資料を欠き、一見するとCタイプの時期が最も高くなるように見える。しかし、橘谷遺跡や船岡山遺跡では、Aタイプの皿形高杯に付くとみられる高さ10～15cmの柱状脚部が多く認められることにより、本来A～Cタイプにおいては平均10cm前後の脚高があったと考えるのが妥当であろう。<sup>(註40)</sup>Dタイプ以降は、漸次低くなり、Gタイプが最も低く、H～Iタイプ・布留式古段階併行期にかけて再び高くなる傾向がある。

器高（f）杯部深度の変化に較べて脚高の変化の方が顕著であるため、器高は脚高とほぼ同じ変化を辿る。前述の通りAタイプと強く関連するとみられる柱状高杯には、復元すると器高が20cmを越えるものが少なからず存在しており、A～Cタイプでは平均20cm近い器高をもっていたとみられる。D～Gタイプにかけて器高は漸次減少し、Hタイプ以降再び高くなる傾向がみられる。

### iv. 遺跡間の格差

次に、皿形高杯の口径・杯部径・口縁部長の法量を資料として、遺跡間の格差を比較してみる。

第37図は、タイプ別の法量の平均値を遺跡単位で表したものである。<sup>(註41)</sup>口径については、A～Eタイプにおいて遺跡間の格差が著しい。特にA・Bタイプにおいて、橘谷、血縄、星尾山遺跡では、船岡山、山口、東郷遺跡よりも2～6cm程、口径の平均値が大きい。また、大半の遺跡ではA～Dタイプへと変化するのに伴って口径が縮小するのに対して、



第37図 皿形高杯の法量の地域性 (数字は平均値を求めるのに使用した資料数)

船岡山遺跡では口径の平均値はあまり変化していない。Fタイプ以降では、亀川遺跡と田殿・尾中遺跡で、その変化が極めて良く一致しているのは注目される。

杯部径では、口径と同様にA～Eタイプで遺跡間の格差が認められ、その傾向は特にA～Cタイプにおいて顕著である。橘谷、血縄遺跡では、船岡山や山口遺跡よりも3～5cm程、杯部径の平均値が大きい。Fタイプ以降は、やはり亀川遺跡と田殿・尾中遺跡でよく似た変化を示す。

口縁部の長さは、口径や杯部径に較べて格差が少ないものの、B～Dタイプにおいて遺跡単位にバラツキがみられる。血縄遺跡では、橘谷、山口、船岡山遺跡よりも口縁部の長い個体が多いようである。

#### v. 変遷と区分

以上概観してきた形態変化や法量変化よりみて、弥生時代後期を中心とする皿形高杯は大きく前半期の様相と後半期の様相に二分される。形態的には、A～Cタイプは口径と口縁部の長さはさほど変化せずに杯部径が縮小した段階であり、D～Iタイプは口縁部が発達するとともに杯部径も縮小した段階である。法量的には、A～Dタイプでは、口径、杯

部径の分布がバラエティに富み、口径20cmを越える大形品の比率が高く、杯部深度が8～12cmを測る深いタイプの一群も存在している。一方、E～Iタイプでは、口径15～21cmの一般的規模のものに口径10～13cmの小形品が若干伴い、杯部深度が5～7cmに集中する。よって、A～Dタイプを前半期とし、E～Iタイプを後半期とすることが可能である。ただしここでは、Dタイプを前半期に含めたが、厳密には前半期と後半期の両方の様相をもち、過渡的段階ととらえるべきであろう。また、後半期のなかでは、G・Hタイプを弥生時代後期の皿形高杯の変化の到達的であるとするなら、次の段階への要素を多くもつIタイプもまた過渡的段階として区別されるべきであろう。<sup>(註42)</sup>

## 〈2〉受口状甕の分析

### i. 分類

本来、胴部・底部の成形・調整方法を含めて分類すべきであるが、完形品の資料が極めて少ないため、本項では口縁部の形態による分類を行なう<sup>(註43)</sup>（第38図）。

**A 1類** 口縁部が屈曲して直立気味に立ち上がる。屈曲部を挟んで器壁の厚さがあまり変化しない。

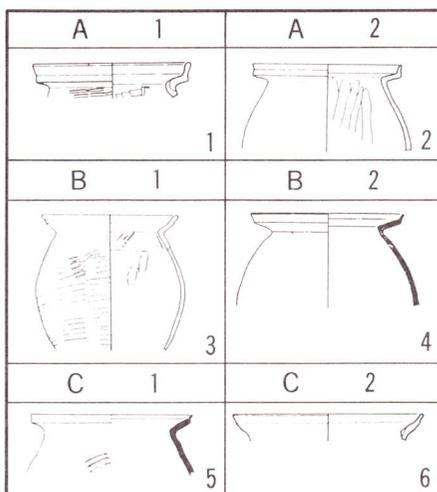
**A 2類** 口縁部が屈曲して直立気味に立ち上がる。立ち上がり部が比較的薄く仕上げられる。

**B 1類** 口縁部が屈曲して外上方へ開く。屈曲部を挟んで器壁の厚さがあまり変化しない。

**B 2類** 口縁部が屈曲して外上方へ開く。屈曲部から口縁端部まで器壁が薄くなる。

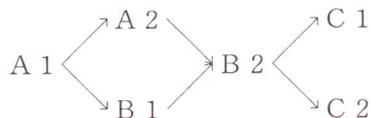
**C 1類** 口縁端部付近が屈曲して短く立ち上がる。

**C 2類** 口縁部の途中で屈曲して外上方へ開くが、屈曲部が不明瞭である。



第38図 受口状甕の分類

分類された各タイプについては、弥生時代中期に類例があり、シャープにつくられるA 1類を古く設定し、後期の一般的なくの字状口縁に近い形態をもつC 1・C 2類を新しい様相とするならば、型式学的には



の組列が考えられる。

## ii. 出土状況と変遷

船岡山遺跡において、分類された受口状甕の出土状況を示したのが第32図である。それによると、皿形高杯程も整序関係を示さないが、遺構の埋土下層にはA1・A2・B1・B2類が含まれ、埋土の上層にはC2類が多くみられる。特に、SB-08、SB-09、SB-10に伴うSD-6、Ⅳ区包含層の出土状況は、想定した組列によく合致している。

第39図は、遺跡及び遺構から出土した受口状甕の状況である。<sup>(註44)</sup>皿形高杯A・Bタイプを多く出土し、古い様相をもつ橋谷遺跡や船岡山遺跡、東郷

遺跡SD-2中層などでは、A1～B2類の受口状甕の比率が高く、皿形高杯B～Eタイプを出土した血縄、星尾山・野井奥の谷、滝ヶ峰遺跡では、B2、C1類が比較的多く認められる。船岡山遺跡における状況とも照らし合わせるなら、皿形高杯Cタイプ以降に受口状甕C1、C2類が伴う蓋然性が高いとみられる。

受口状甕の終焉については、亀川遺跡第5次調査のSC(土器溜まり)－B<sup>(註45)</sup>で皿形高杯Iタイプと受口状甕A2類が出土しているが、他の共存資料からみて特異な例とみなし得る。ほとんどの受口状甕は、皿形高杯Dタイプまでにその製作を終えている可能性がある。

以上の状況よりみて、受口状甕は前項で想定した組列に変遷した可能性があるが、短期間の変遷であることや一括資料の乏しさにより厳密な検証はなし得なかった。資料の増加を待って再検討したい。

### 〈3〉SD-10出土土器の位置付け

県下において弥生時代後期は、遺跡の立地ばかりでなく土器の様相からも大きく前半期と後半期に二分される。<sup>(註46)</sup>すなわち、皿形高杯A～Dタイプ、受口状甕、長頸壺、器台、柱状脚部をもつ高杯等を出土する橋谷、船岡山、血縄、星尾山・野井奥の谷、滝ヶ峰、山口遺跡SD-10、東郷遺跡SD-2中層などの主たる内容を前半期とし、高杯E～Iタイプ、二重口縁壺、細頸壺、手焙り形土器、つまみ上げ高杯、短脚で中実の高杯等を出土する亀川、田殿・尾中、野田・藤並地区遺跡の遺構、包含層の内容を後半期とすることができる。各期は、器種の変遷・消長等により将来的にはそれぞれを3期程度に細分する事が可能と推定される。

さて、今回調査したSD-10からは、Bタイプの皿形高杯6個体とA2、B1、B2類の受口状甕がそれぞれ1、3、2個体確認された。その他、把手付短頸壺や柱状高杯の脚裾部が出土することよりみても、SD-10出土土器が弥生時代後期前半期に含まれること

遺跡	類	A1	A2	B1	B2	C1	C2
① 橋谷		(1)	2	1	2		
② 船岡山		12	7	20	26	5	7
③ 東郷 SD-2中層		1		1			
④ 山口5次 SD-10			1	3	2		
⑤ 血縄					4	1	
⑥ 星尾山・野井奥の谷					1	5	
⑦ 滝ヶ峰			1	3	2	1	
⑧ 亀川5次	SC-B SC-C	1					

第39図 受口状甕の出土状況  
(カッコ内は推定)

は確実である。また、皿形高杯Bタイプや受口状甕B1類は、前半期の中ではポピュラーな存在であり、皿形高杯Cタイプや受口状甕C1、C2類を含まない事を勘案すれば、仮に前半期を3期に区分した場合の2番目頃の時期に相当する可能性がある。

他遺跡との関係では、橘谷遺跡の新しい時期、船岡山遺跡の盛行期と共存していたとみられる。

### (3) 調査の成果と今後の課題

**弥生時代** 後期前半頃の溝と後期後半頃の土器が多量に検出されたことより、近接地に弥生時代後期の集落が存在することが明らかになった。県下においては、後期前半期の平地に立地する遺跡が稀薄であり、遺跡の展開を考える上で重要な発見となった。北西約3kmの丘陵上に位置する高地性集落の橘谷遺跡とは、土器でみる限り共存期間を持っていた<sup>(註47)</sup>ようで、遺跡相互の関係が注目される。拡張区1を中心に多量に出土した土器群は、後期前半頃と古墳時代初頭頃のものを若干含むが、その大半は後期後半頃の所産とみられる。くの字に屈曲する口縁部をもつ甕（一部口縁端部に刻み目）やゆるく外反して端部をあまり肥厚させない広口壺、分類されたA1a類、A2a類の底部を多く出土するという様相は、周辺地域では亀川遺跡第5次調査で検出されたSK-04、SD-51、SB-51、SC(土器溜まり)-B・C、SD-54等の遺構埋土出土土器の様相に類似するものである。後期後半でも新しい様相をもつものと理解される。

**古墳時代** 後期の掘立柱建物の一部が検出された。遺構の検出状況よりみて、調査地周辺に建物群が規則的な配置をもって展開している可能性が高い。時期的には、建物跡より下るものではあるが、本遺跡周辺は古代南海道の想定ルート上にあり、9世紀前半に廃駅された名草駅を本遺跡周辺に設定する意見がある。それらの前段階の様相として、今後注意しなければならない。

**奈良時代以降** 本調査地では、奈良時代以降の遺構・遺物は極めて少なく、集落として展開していたのは古墳時代後期までであったようである。土層よりみて、古墳時代の建物が廃絶した後に、北側の高い土地から弥生土器を多く含む土が遺構面の上に厚く堆積した状況が窺われるが、それが人為的なものかどうかは不明である。中世の鎌倉時代頃以降は現在にいたるまで何回もの床上げが繰り返され、水田として利用されてきたとみられる。

以上のように、従来不明瞭であった本遺跡の内容の一端が明らかになった。遺跡推定範囲の縁辺部付近での狭い面積の調査という実態を考え合わせるなら、本遺跡は周辺地域においてもより重要な遺跡として位置付けられる。現在では、調査地付近は水田が多く見られるが、近い将来、開発が頻発に行なわれるようになるのは確実であろう。今後、周辺地での開発には十分注意を払う必要がある。

註

- (註1) a. 『和歌山市宇田森遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会(1968)  
 b. 『和歌山市宇田森遺跡発掘調査概報2』和歌山県教育委員会(1969)
- (註2) a. 『吉田・北田井遺跡第1次調査概報』和歌山県教育委員会(1970)  
 b. 『吉田遺跡第2次調査概報』和歌山県教育委員会(1971)
- (註3) 『和歌山県文化財センター年報』財団法人和歌山県文化財センター(1988)
- (註4) 『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第13号 和歌山県(1934)
- (註5) 『紀伊風土記の丘年報』第5号 和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所(1978)
- (註6) 一辺16~19cm、厚さ約5cmの平行四辺形に近い扁平な結晶片岩の板石を使用する。結晶片岩は、紀ノ川南岸の三波川変成帯で産出することから、紀ノ川南岸より搬入された石材と言える。
- (註7) 薄手丸底式と称されるもので白石太郎氏分類F類(『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』同志社大学文学部文化学科 1968)、広瀬和雄氏分類の丸底I式(『岬町遺跡群発掘調査概要』大阪府教育委員会 1978)に相当するとみられる。
- (註8) 低いM字状のタガは、6世紀代の後期古墳に多く認められ、口縁両端部をわずかに肥厚させる埴輪は、河内一浩氏により6世紀前半代に成立したとされる「紀伊型埴輪」(河内一浩「古墳時代後期における紀伊の埴輪生産について」『求真能道』1988)に類似する。また、この2点の埴輪片は、今回出土した他の多量の土器と同じ赤色粒子(クサリ礫?)を含んでおり、在地産とみられる。
- (註9) 地理的環境については、調査地において和歌山市立博物館額田雅裕学芸員から教示を得た。
- (註10) 『船岡山遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会(1986)
- (註11) 『田殿・尾中遺跡』吉備町教育委員会(1982)
- (註12) a. 渋谷高秀「第5章 まとめ」(註11文献)  
 b. 渋谷高秀「第4章 出土遺物の考察」(『野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会1985)  
 c. 土井孝之「第IV章 まとめ」(註10文献)  
 d. 土井孝之「紀伊地域」(寺沢薫・森岡秀人編著『弥生土器の様式と編年』1989)
- (註13) 当地方では、胴部外面をタタキ調整する弥生時代後期的な甕が布留式併行期まで製作され、「古墳時代」の開始時期は不明確である。本稿では、布留式甕や小型精製土器(丸底壺、器台、鉢)の出土した鳴神地区遺跡SD-204下層の土器群や野田地区遺跡C・D区黒褐色粘土出土の土器群を布留式古段併行期ととらえ、それ以前の土器を一応分析の対象とした。  
 なお、分析の対象としたのは以下の遺跡である。  
 血繩(橋本市) 船岡山(かつらぎ町) 橋谷(和歌山市) 山口(和歌山市) 鳴神V(和歌山市) 滝ヶ峰(和歌山市・海南市) 亀川(海南) 野田(吉備町) 田殿・尾中(吉備町) 星尾山・奥の谷(有田市) 東郷(御坊市)
- (註14) 註10文献
- (註15) 1976~1977年和歌山市教育委員会調査資料による。
- (註16) ~ (註18) 註10文献
- (註19) 『東郷遺跡』御坊市遺跡調査会(1987)
- (註20) 本報告
- (註21) a. 『血繩遺跡緊急発掘調査報告書』和歌山県教育委員会、橋本市教育委員会(1973)  
 b. 『紀ノ川用水建設事業に伴う発掘調査報告書』和歌山県教育委員会(1978)
- (註22) 註11文献所収
- (註23) 『滝ヶ峰遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会(1972)
- (註24) 『亀川遺跡範囲確認調査概報一昭和62・63年度一』海南市文化財調査研究会、海南市教育委員会(1989)
- (註25) 『亀川遺跡第Ⅲ・第Ⅳ次発掘調査概報』海南市文化財調査研究会、海南市教育委員会(1981)
- (註26) 註19文献
- (註27) 『亀川遺跡V』海南市文化財調査研究会、海南市教育委員会(1985)
- (註28) 『亀川遺跡発掘調査概報』海南市文化財調査研究会、海南市教育委員会(1978)
- (註29) ~ (註32) 註11文献
- (註33) 註27文献
- (註34) ~ (註35) 註11文献
- (註36) 『野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会(1985)
- (註37) 註27文献
- (註38) 註11文献
- (註39) 使用した土器の出土遺跡は以下の通りである。  
 東郷(1) 滝ヶ峰(2) 船岡山(3~7、9) 血繩(8) 亀川(10、15) 田殿・尾中(11~14) 鳴神(16)  
 ただし、3の土器は同一個体ではなく、滝ヶ峰遺跡出土例を参考にして船岡山遺跡の弥生時代包含層Ⅰ・Ⅱよりの出土品の実測図を一部改変して作成したものである。
- (註40) 今回、脚部形態についてはあまり触れない。ただ、皿形高杯A・Bタイプを多く出土した橋谷遺跡において柱状脚部が約半数を占めることや皿形高杯Bタイプを出土した東郷遺跡SD-2中層、山口遺跡SD-10で柱状脚部が若干伴うことよりみて、現在までに同一個体では確認されていないが、皿形高杯AタイプばかりではなくBタイプにまで柱状脚部がつく例が遺存するものとみられる。
- (註41) 使用した文献は次の通りである。  
 註10、註11、註19、註21、註23、註24、註25、註27、註28
- (註42) Iタイプについては、分類のために設定した指数の分布(第31図)においても、他のタイプとは異なる分布状況を示す。
- (註43) 使用した土器の出土遺跡は以下の通りである。  
 船岡山(1、2、6) 山口(3) 血繩(4) 星尾山(5)
- (註44) 使用した文献は以下の通りである。  
 註10、註11、註19、註21、註23、註27
- (註45) 註27文献
- (註46) 渋谷高秀氏は、紀伊地方における弥生時代後期は、高地性集落の成立・廃絶の時期と再び低地で集落が経営される時期に大きく2分されるとし、さらに出土土器の様相によりそれぞれの時期が2小期に区分されることを指摘した(註11文献、および『和歌山県埋蔵文化財情報』16号 和歌山県文化財研究会)
- (註47) 海南市の亀ノ川流域に位置する平地の亀川遺跡と高地性集落の滝ヶ峰遺跡も土器の様相からみて共存していた可能性が高い。今後、精緻な土器研究を進めるとともに集落相互の関係を再検討する必要がある。
- (註48) 註27文献
- (註49) 服部昌之「南海道・紀伊国」(藤岡謙二郎『古代日本の交通路』Ⅲ 1978)  
 足利健亮「二 紀ノ川北岸縦貫南海道の復元」(『歴史の道調査報告書(Ⅱ)一南海道・大和街道他一』和歌山県教育委員会 1980)
- (註50) 年代観を認め得る器種や要素についての共存状況を検討する方法は、次の文献を参考にした。  
 『鬼塚遺跡Ⅱ、若江遺跡発掘調査報告』東大阪市教育委員会(1979)

# 遺物觀察表

実測番号	出土場所	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法など	胎 土	色 調	備 考
第15図 1	トレンチ1・2区 SD-02	土師器 埴	(口径)36.2 (残存)口縁12分の1	直線的に伸びる体部に断面三角形の 罫がつく。	クサリ礫などの 細粒を含む。	淡茶褐色。	外面に炭素 が吸着。
第15図 2	拡張区 2 P22	須恵器 甕	(口径)35.4 (残存)口縁10分の1	頸部上半に波状文、沈線が施される。	長石の細粒をや や多く含む緻密。	淡灰色。	
第15図 3 図版第12・13	トレンチ 4 区 P17掘方	須恵器 杯 蓋	(口径)12.9 (器高)(4.1) (残存)口縁 2 分の 1	天井部外面の 9 分の 4 にヘラケズリ が施される。	長石・黒色粒の 微粒を含む。緻密。	淡灰色。	
第15図 4 図版第13	トレンチ 3 区 P 4	須恵器 杯 蓋	(口径)13.4 (残存)口縁 6 分の 1	天井部から屈曲する口縁部をもつ。	径 1 mm の長石・ 黒色粒の微粒を 含む。	淡灰色。	
第15図 5	拡張区 2 トレンチ 7 区 P 7	須恵器 杯 蓋	(口径)12.4 (残存)口縁10分の1	天井部からゆるやかに屈曲して口縁 部にいたる。	長石・黒色粒の 微粒を多く含む。	淡灰色。	
第15図 6	トレンチ 4 区 P17掘方	須恵器 杯 蓋	(口径)13.1 (残存)口縁 6 分の 1	口縁端部内面が段状に凹む。	長石粒を多く含 む。緻密。	暗灰色。	
第15図 7	トレンチ 3 区 P 2	須恵器 杯 蓋	(口径)11.5 (残存)口縁12分の1	口縁端部がヨコナデにより外反気味 に仕上げられる。	長石の微粒など を含むが緻密。	淡灰白	
第15図 8	トレンチ 4 区 P17	須恵器 杯 蓋	(口径)12.5 (残存)口縁12分の1	口縁部はわずかに外反気味の形態を もつ。	長石などの微粒 を含む。	灰色。	
第15図 9	拡張区 2 P20東半	須恵器 杯 蓋	(口径)13.0 (残存)口縁10分の1	肩部で屈曲する。	長石などの細粒 を含む。緻密。	淡灰色。	
第15図 10	トレンチ 6 区 P 9	須恵器 杯 蓋	(口径)13.6 (残存)口縁16分の1	口縁端部内面が段状に凹む。	長石・黒色粒の 微粒をやや多く 含む。	灰白色。	
第15図 11 図版第12	トレンチ 4 区 P 6	土師器 甕	(口径)12.5 (残存)口縁 5 分の 1	体部外面は 5 ~ 6 本 / cm の粗いタ テハケ、内面は同一原本でヨコハケ で調整される。	長石・石英・片岩・ クサリ礫の砂粒 を含む。	茶褐色。	
第15図 12	トレンチ 4 区 SK-03	土師器 甕	(口径)10.4 (残存)口縁 5 分の 1	くの字に屈曲する口縁部をもち、端 部はわずかに丸く肥厚する。	長石・石英・クサ リ礫などの細粒 を多く含む。	暗茶褐色。	保存状態は 悪い。
第15図 13	トレンチ 3 区 SD-09	弥生土器 壺	(口径)27.0 (残存)口縁10分の1	外反する頸部に下方に拡張する口縁 端部をもつ。摩擦により内外面の調 整は不明。	長石・石英・片岩・ クサリ礫の細粒 を含む。	茶褐色。	
第15図 14	トレンチ 2 区 拡張区 1 SD-03	弥生土器 壺	(残存)頸部 4 分の 1	屈曲する胴部と頸部の境に断面三角 形の突帯を付加する。	長石・石英・片岩・ クサリ礫の細粒 を含む。	茶褐色。	
第15図 15	拡張区 1 P31柱芯	弥生土器 壺	(口径)11.6 (残存)口縁 4 分の 1	直立気味の頸部から外反する口縁に いたる。口縁端部は上下にわずかに 肥厚させる。	長石・石英・クサ リ礫などの細粒 を多く含む。	茶褐色。	
第15図 16	拡張区 1 P41	土師器 甕	(口径)16.9 (残存)口縁12分の1	胴部はあまり発達しない。	長石・石英・クサ リ礫の細粒を含 む。	淡茶褐色。	
第15図 17	拡張区 1 P31	弥生土器 甕	(口径)15.4 (残存)口縁 8 分の 1	くの字に屈曲する口縁がつく。体部 に右上りの粗いタダキメが観察され る。	石英・長石・黒色 粒・クサリ礫を 多く含む。	淡茶褐色。	
第15図 18	トレンチ 6 区 P 9	弥生土器 高 杯	(口径)17.6 (残存)口縁16分の1	短く外反して立ち上がる高杯の口縁 部とみられる。	クサリ礫を多く 含む。	淡茶褐色。	
第15図 19	拡張区 1 P30	弥生土器 高 杯	(口径)15.0 (残存)口縁10分の1	屈曲部から外反する口縁をもつ。	長石などの微粒 を含むが緻密。	赤褐色。	磨滅により 調整は不明。
第15図 20	拡張区 1 P31	弥生土器 高 杯	(残存)脚部のみ	透しは 3 方とみられる。脚部内面 には調整の際の工具痕が残る。脚部は 中実につくられている。	長石などの微粒 を含むが緻密。	淡茶褐色。	

実測番号	出土場所	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法など	胎 土	色 調	備 考
第15図 21	トレンチ6区 P9	土師器? 甕	(口径)19.4 (残存)口縁16分の1	残存部が少なく器種は不明確であるが、口縁の内外面がヨコナデにより調整されることや胎土よりみて甕の口縁部とみられる。	長石・石英・クサリ礫黒色粒を多く含む。	茶褐色。	
第15図 22	拡張区2 P21東半	土師器 甕	(口径)19.0 (残存)口縁8分の1	外反する口縁部をもち、口縁端部が丸く肥厚する。	長石・石英・黒色粒・クサリ礫の細粒を含む。	茶褐色。	
第15図 23	拡張区1 P41	甕?	(口径)16.0 (残存)口縁12分の1	くの字に屈曲する甕の口縁部か?	長石・石英・黒色粒・クサリ礫の細粒を含む。	茶褐色。	
第16図 24	拡張区1 P41	弥生土器 底 部	(底径)4.2 (残存)底部3分の1	やや上げ底気味。	長石・石英・黒色粒の微粒を多く含む。	淡茶褐色。	
第16図 25	拡張区1 P29	弥生土器 底 部	(底径)4.2 (残存)底部4分の1	やや上げ底気味。	長石・クサリ礫などの細粒を含む。	茶褐色。	
第16図 26	トレンチ1・2区 SD-02	弥生土器 底 部	(底径)5.2 (残存)底部5分の4	上げ底で、底面の中央がさらに円形に凹む。底部外面には指頭圧痕、内底面にはハケの工具痕が観察される。	長石・クサリ礫などの微粒を多く含む。	淡茶褐色。	
第16図 27	トレンチ7区 P15	弥生土器 底 部	(底径)3.8 (残存)底部は完存	上げ底で底部外面には指頭圧痕が残る。内底面にはハケ工具痕が残る。	長石・石英・クサリ礫・黒色粒などを多く含む。	淡茶褐色。	
第16図 28	トレンチ2区 SD-06	弥生土器 底 部	(底径)4.2 (残存)底部は完存	上げ底で、底部外面にユビオサエ痕が残る。	長石・石英・黒色粒・クサリ礫を多く含む。	淡茶褐色。	
第16図 29	トレンチ7区 P15	弥生土器 底 部	(底径)4.2 (残存)底部4分の1	上げ底気味の底部をもつ。	長石・石英・黒色粒・クサリ礫などを含む。	灰白色。	
第16図 30	拡張区1 P31柱芯	弥生土器 底 部	(底径)5.8 (残存)底部2分の1	底面がわずかに凹む。底部外面にはユビオサエの跡がみられる。	長石・石英・クサリ礫など微粒を含む。	淡茶褐色。	
第16図 31	トレンチ2区 拡張区1 SD-03	弥生土器 底 部	(底径)5.2 (残存)底部2分の1	底面中央がわずかに凹む。	長石・石英・黒色粒などの細粒を多く含む。	淡茶褐色。	
第16図 32	トレンチ5区 拡張区2 P7西半	弥生土器 底 部	(底径)4.4 (残存)底部3分の1	平底で突出する底部である。	長石・石英・片岩・クサリ礫などを含む。	外面は淡茶褐色。内面は黒色。	
第16図 33	トレンチ2区 SD-06	弥生土器 底 部	(底径)4.0 (残存)底部4分の1	平底で突出する底部である。	長石・片岩・クサリ礫などの砂粒を含む。	外面は茶褐色。内面は黒色。	
第16図 34	トレンチ4区 SK-03	弥生土器 底 部	(底径)4.6 (残存)底部4分の1	平底で突出する底部で、外面には粗いタキが残る。	長石・クサリ礫などの細粒を少量含む。	茶褐色。	
第16図 35	トレンチ2区 SD-06	弥生土器 底 部	(底径)5.2 (残存)底部3分の2	平底で突出する底部である。外面にタキがみられる。	長石・石英・黒色粒・クサリ礫などを含む。	外面は淡茶褐色。内面は黒色。	
第16図 36	拡張区2 P20	弥生土器 底 部	(底径)3.2 (残存)底部完存	底部はあまり突出せず、体部との境が不明確。外面には4本/cmのタキが施される。	長石・石英・黒色粒・片岩の細粒を含む。	茶褐色。	
第16図 37	トレンチ2区 拡張区1 SD-03	弥生土器 底 部	(底径)5.0 (残存)底部2分の1	突出する平底の底部をもつ。内面にハケ状工具の痕跡が認められる。	石英・長石などの砂粒を含む。緻密。	外面は淡茶褐色。内面は黒色。	
第16図 38	拡張区1 P31	弥生土器 底 部	(底径)4.2 (残存)底部3分の1	平底で突出する底部である。	石英・長石・片岩・クサリ礫の砂粒を含む。	明茶褐色。	
第16図 39 図版第16	拡張区1 P31柱芯	弥生土器 底 部	(底径)4.4 (残存)底部完存	平底で突出する底部で、外面にはユビオサエがみられる。	長石・黒色粒・クサリ礫を多く含む。	淡茶褐色。	底面に十字形の線刻あり。
第16図 40	トレンチ4区 P17掘方	弥生土器 底 部	(底径)3.8 (残存)底部2分の1	上げ底で、体部と底部の境が不明確である。	長石・石英・黒色粒・片岩の砂粒を含む。	茶褐色。	

実測番号	出土場所	器種・部位	法量(cm)	形態・技法など	胎土	色調	備考
第16図 41	拡張区1 P41	弥生土器 底部	(底径)4.2 (残存)底部4分の1	底面中央部わずかに凹む。	長石・黒色粒の砂粒を多く含む。 緻密。	暗茶褐色。	
第16図 42	拡張区1 P29	弥生土器 底部	(底径)4.4 (残存)底部4分の1	平底の底面より直立気味に立ち上がる形態をもつ。外面にはタタキの痕跡が観察される。	長石・石英・黒色粒などの砂粒を含む。	茶褐色。	
第16図 43	拡張区1 P39	弥生土器 底部	(底径)4.8 (残存)底部4分の1	平底の底面をもち、外面には5本/cmのタタキが施される。	長石・石英・黒色粒・片岩などの砂粒を含む。	茶褐色。	
第16図 44	トレンチ2区 SD-06	弥生土器 底部	(底径)4.4 (残存)底部3分の1	平底の底面をもつ。	長石・石英・黒色粒・クサリ礫などを含む。	赤褐色。	
第16図 45	トレンチ1・2区 SD-02東半	弥生土器 底部	(底径)6.2 (残存)底部3分の1	平底で大形の底部である。体部と底部の境は不明確で、底部外面にはユピオサユの痕跡がみられる。	長石・石英・黒色粒などの砂粒を含む。	明茶褐色。	
第16図 46	拡張区1 P30	弥生土器 底部	(底径)4.5 (残存)底部完存	径4～6cmの穿孔が10ヶ所みられる。穿孔は底面に対して斜めになるものが多い。いわゆる甌と呼ばれるものである。	長石・石英などの砂粒を多く含む。	茶褐色。	
第16図 47	トレンチ2区 拡張区1 SD-03	弥生土器 底部	(底径)5.6 (残存)底部2分の1	底面中央がわずかに凹む。底部の端部がわずかに肥厚する。	石英・長石・黒色粒などの砂粒を多く含む。	外面は淡茶褐色。内面は黒色。	
第16図 48	拡張区1 P31	底部	(底径)6.8 (残存)底部3分の2	底部の端部が外へ張り出し、底面は上げ底になる。脚台部に近いものである。	長石・石英・黒色粒・片岩などの砂粒を含む。	明茶褐色。	
第16図 49	トレンチ4区 SK-03	製塩土器	(残存)口縁一部のみ	内湾気味の口縁部をもち、内面には貝殻条痕がみられる。2次焼成を受け赤変する。	精良。	赤褐色。	
第16図 50	トレンチ4区 P17掘方	製塩土器	(残存)体部の一部のみ	内面に貝殻条痕がみられる。	精良。	赤褐色。	
第17図 51 図版第11	トレンチ5区 拡張区2 SD-10	弥生土器 短頸壺	(口径)11.2 (残存)口縁完存	2～3本/cmの粗いタタキをもつ。胴部に直立気味に立ち上がる頸部をもつ。胴上部には頸部に接するように半環状把手が付く。	石英・長石・黒色粒などの砂粒を多く含む。	茶褐色。	
第17図 52	トレンチ5区 拡張区2 SD-10	弥生土器 広口壺	(口径)16.0 (残存)口縁12分の1	外反する口縁部をもち、口縁端部は上下にわずかに肥厚する。口縁端面には半截竹管による円形刺突文が施される。	長石・石英・黒色粒・クサリ礫などを含む。	淡茶褐色。	
第17図 53	トレンチ5区 拡張区2 SD-10	弥生土器 広口壺	(口径)18.0 (残存)口縁3分の1	外上方へ開く頸部と粘土を貼り付けて垂下させる口縁部をもつ。口縁端面には半截竹管による円形刺突文が施される。	石英・長石・黒色粒・クサリ礫などを含む。	淡茶褐色。	
第17図 54 図版第10	トレンチ5区 拡張区2 SD-10上層	弥生土器 広口壺	(口径)18.0 (残存)口縁4分の3	わずかに外反しながら外上方に伸びる頸部をもち、口縁部は粘土を貼り付けて肥厚させる。	石英・長石・黒色粒・片岩・クサリ礫を含む。	淡茶褐色。	
第17図 55 図版第10	トレンチ5区 拡張区2 SD-10上層	弥生土器 壺	(底径)6.6 (残存)底部完存	球形に発達する胴部で、外面にはヘラミガキが施される。底部は突出する平底の形態をもつ。	長石・石英・片岩・クサリ礫の砂粒を含む。	外面茶褐色。内面黒色。	胎土・頸部径よりみて、54と同一個体とみられる。
第17図 56 図版第10	トレンチ5区 拡張区2 SD-10上層	弥生土器 広口壺	(口径)19.2 (残存)口縁3分の1	直立する頸部から外反する口縁部をもつ。口縁部は垂下口縁で、断面三角形に近い形態をとる。外面は、ハケメ調整のちミガキ調整される。	石英・長石・片岩・クサリ礫の砂粒を含む。	茶褐色。	
第17図 57 図版第10	トレンチ5区 拡張区2 SD-10上層	弥生土器 壺	(残存)頸部完存	頸部下位は直立気味に立ち上がり、頸部上位は外反する。外面はヘラミガキで調整される。	石英・長石・片岩・クサリ礫の砂粒を含む。	茶褐色。	
第17図 58 図版第12	トレンチ5区 拡張区2 SD-10上層	弥生土器 蓋	(口径)17.2 (残存)口縁5分の4	直線的に伸びる体部に突出するつまみ部がつく。外面には13～14本/cmの細かいハケメ、内面はユピナデにより調整される。	長石・石英・クサリ礫などの微粒を多く含む。	外面茶褐色。内面淡茶褐色。	内面端部から幅1.5cmの範囲にスズが付着する。
第18図 59 図版第10	トレンチ5区 拡張区2 SD-10中層	弥生土器 甕	(口径)16.0 (残存)口縁ほぼ完存	球形の胴部に受口状の口縁がつく。口縁の端部は細くつまみ上げられる。胴部外面には2本/cmの粗いタタキが施される。	石英・片岩・クサリ礫の大きな砂粒を含む。	茶褐色。	
第18図 60 図版第10	トレンチ5区 拡張区2 SD-10上層	弥生土器 蓋	(口径)14.0 (残存)口縁3分の1	球形の胴部に受口状口縁がつく。屈曲する口縁は外上方へ開く。胴部外面には2本/cmのタタキが施される。	長石・石英・クサリ礫・片岩などを含む。	淡茶褐色。	

実測番号	出土場所	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法など	胎 土	色 調	備 考
第18図 図版第11	トレンチ5区 拡張区2 SD-10	弥生土器 蓋	(口径)15.0 (残存)口縁6分の1	口縁は途中で屈曲するもので受口状の口縁を呈する。	長石・石英・片岩・黒色粒などの砂粒を含む。	茶褐色。	
第18図	トレンチ5区 拡張区2 SD-10	弥生土器 蓋	(口径)16.0 (残存)口縁10分の1	屈曲する受口状の口縁をもつ。	長石・石英・片岩・黒色粒・クサリ礫を含む。	茶褐色。	
第18図	トレンチ5区 拡張区2 SD-10	弥生土器 蓋	(口径)15.0 (残存)口縁15分の1	頸部は湾曲しながら屈曲する。口縁は受口状を呈する。	長石・石英・片岩・黒色つぶなどの砂粒を含む。	茶褐色。	
第18図	トレンチ5区 拡張区2 SD-10	弥生土器 蓋	(口径)14.8 (残存)口縁7分の1	口縁が屈曲してから立ち上がる受口状の口縁である。	長石・石英・黒色粒・クサリ礫などを含む。	淡茶褐色。	
第18図 図版第10	トレンチ5区 拡張区2 SD-10	弥生土器 蓋	(口径)15.0 (残存)口縁4分の3	くの字に屈曲する短い口縁部をもつ。	長石などの微粒を含む。	外面暗灰色。茶赤褐色。内面暗灰褐色。	全体的に磨減が著しい。
第18図 図版第11	トレンチ5区 拡張区2 SD-10	弥生土器 蓋	(口径)16.2 (残存)口縁3分の1	くの字に屈曲する口縁をもつ。口縁部分はヨコナデにより調整される。	石英・長石・黒色粒・片岩などを含む。	淡褐色。	胴部の磨減・剝離が著しい。
第18図	トレンチ5区 拡張区2 SD-10	弥生土器 蓋	(口径)17.0 (残存)口縁10分の1	くの字に屈曲する短い口縁部をもつ。口縁部分はヨコナデにより調整される。	長石・石英・黒色粒・片岩・クサリ礫を含む。	淡茶褐色。	胴部の磨減・剝離が著しい。
第18図 図版第12	トレンチ5区 拡張区2 SD-10	弥生土器 底部	(底径)4.5 (残存)底部完存	底面中央が凹む底部で、穿孔される。	赤色粒・長石の微粒を含む。	淡茶色。	底面に7個の穿孔あり。
第18図 図版第16	トレンチ5区 拡張区2 SD-10	弥生土器 底部	(底径)6.4 (残存)底部完存	平底の底部で、内底面は凹凸がみられる。外面はタタキ調整される。	赤色粒・長石の微粒を含む。	外面黒色・淡灰茶色。内面暗灰茶色。	底面に杓と植物繊維の圧痕あり。
第18図	トレンチ5区 拡張区2 SD-10下層	弥生土器 底部	(底径)7.0 (残存)底部完存	平底で底部端部は外へ張り出す。胴部下半には2本/cmの粗いタタキがみられる。	石英・長石・片岩・黒色粒・クサリ礫を含む。	茶褐色。	
第18図	トレンチ5区 拡張区2 SD-10中層	弥生土器 底部	(底径)5.5 (残存)底部4分の3	上げ底の底部である。	石英・長石・片岩・黒色粒を含む。	外面暗茶褐色。内面黒色。	砂粒が粗い。
第19図 図版第11	トレンチ5区 拡張区2 SD-10上層	弥生土器 高 杯	(口径)20.1 (脚径)10.2 (器高)14.8 (残存)口縁4分の1	皿形の高杯で、脚部外面にはヘラミガキの痕跡が残る。脚部の円形透し穴は下段が4方向、上段が2方向にあげられる。	石英・片岩・長石・クサリ礫などを含む。	茶褐色。	全体的に磨減が著しい。
第19図 図版第11	トレンチ5区 拡張区2 SD-10上層	弥生土器 高 杯	(口径)21.6 (残存)口縁10分の1	皿形の高杯で、脚部体部下端にはヘラミガキが残存している。杯部と脚部の接合には内盤充填技法が使われている。透し穴は3方向である。	石英・長石・黒色粒・片岩・クサリ礫を含む。	淡茶褐色。	磨減が著しい。
第19図	トレンチ5区 拡張区2 SD-10上層	弥生土器 高 杯	(口径)23.0 (残存)口縁4分の1	皿形の杯部をもつ高杯である。	長石・黒色粒・片岩・クサリ礫を含む。	茶褐色。	磨減が著しい。
第19図	トレンチ5区 拡張区2 SD-10	弥生土器 高 杯	(口径)20.0 (残存)口縁15分の1	外反する皿形高杯の口縁部である。	長石・黒色粒・クサリ礫などの微粒を含む。	淡茶褐色。	
第19図	トレンチ5区 拡張区2 SD-10上層	弥生土器 高 杯	(口径)17.2 (残存)口縁8分の1	外反する皿形高杯の体部と口縁部である。	長石・黒色粒・片岩などの砂粒を含む。	淡茶褐色。	
第19図	トレンチ5区 拡張区2 SD-10上層	弥生土器 高 杯	(残存)杯部一部のみ	高杯の杯部と脚部の境目の破片で接合は縁板充填によってなされる。	長石・石英・片岩・黒色粒・クサリ礫を含む。	茶褐色。	
第19図 図版第11	トレンチ5区 拡張区2 SD-10上層	弥生土器 高 杯	(脚径)9.4 (残存)脚裾部2分の1	八の字形に開く脚部で外面にヘラミガキが施される。脚部裾部には5方向に円孔が穿たれる。体部と脚部の境には円板充填がみられる。	石英・長石・黒色粒・片岩・クサリ礫を含む。	淡茶褐色。	
第19図 図版第11	トレンチ5区 拡張区2 SD-10	弥生土器 高 杯	(脚径)10.1 (残存)脚裾部5分の4	八の字に開く高杯の脚部で、4方向の円孔が穿たれる。外面にヘラミガキが観察される。	石英・長石・黒色粒・片岩・クサリ礫を含む。	淡茶褐色。	
第19図	トレンチ5区 拡張区2 SD-10上層	弥生土器 高 杯	(脚部)8.1 (残存)脚裾部6分の5	八の字に開く脚部で、円孔が3方向に穿たれる。	石英・長石・片岩・黒色粒・クサリ礫を含む。	茶褐色。	

実測番号	出土場所	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法など	胎 土	色 調	備 考
第19図 81	トレンチ5区 拡張区2 SD-10	弥生土器 高 杯	(脚径)10.0 (残存)脚根部5分の1	八の字に開く高杯の脚部で、外面にはハケのちミガキ調整が観察される。	長石・黒色粒・クサリ礫の細粒を含む。	茶褐色。	
第19図 82	トレンチ5区 拡張区2 SD-10上層	弥生土器 高 杯	(脚径)11.0 (残存)脚根部3分の1	高杯の柱状脚部の一部である。円孔は2方向か4方向である。	長石・クサリ礫などの微粒を少量含む。	茶褐色。	
第20図 83	トレンチ3・4区 3層	土師器 土鍋	(口径)25.5 (残存)口縁6分の1	くの字に屈曲した口縁部で、端部は内上方へ屈曲して仕上げられる。	径1mm内の長石・片岩を多く含む。	灰茶色。	
第20図 84	トレンチ3・4区 3層	青 磁 碗	(残存)体部のみ	片切彫による連弁文が描かれている。	灰白色を呈し、緻密。	濃緑色。	
第20図 85	拡張区2 3層	備前焼 摺 鉢	(残存)体部のみ		長石などの粗砂を含むが緻密。	赤茶褐色。	
第20図 86	拡張区2 3層	瓦 器 碗	(底径)6.9	断面三角形の高台部をもつ。	精良。	灰黄黒色。	
第20図 87	拡張区2 3層	瓦 器 碗	(底径)4.7	断面三角形の低い高台をもつ。	長石・石英の細粒を含む。	灰黒色。	
第20図 88	トレンチ4区 4層	瓦 器 碗	(底径)6.0	断面三角形の低い高台をもつ。	精良。	灰色。	磨滅著しい。
第20図 図版第13	トレンチ4区 4層	須恵器 杯 蓋	(残存)天井部の一部	天井部と口縁部との境には、凹線が施される。	径0.5mm内の長石・赤色粒を含む。	外面赤褐色。 内面灰色。 器内赤褐色。	
第20図 図版第13	トレンチ2区 4層	須恵器 杯蓋	(口径)13.6 (残存)口縁16分の1	屈曲部が浅い段となり、口縁端面は面をなす。	長石・黒色粒の微粒を含む。緻密。	淡灰色。	
第20図 図版第13	トレンチ4区 4層下層～5層	須恵器 杯 蓋	(口径)13.4 (器高)(4.0) (残存)口縁6分の1	天井部外面の17分の8にヘラケズリが施される。ロクロの回転は左回りである。	径1mm内の石英・長石を多く含む。	淡灰色。	
第20図 図版第13	トレンチ4区 4層	須恵器 杯 蓋	(口径)14.1 (残存)口縁8分の1	天井部からゆるく屈曲して口縁部にいたる。	長石・黒色粒の細粒あり。	淡灰色。	
第20図 図版第13	拡張区2 4・5層	須恵器 杯 蓋	(口径)13.2 (残存)口縁12分の1	天井部と口縁部との境はゆるく屈曲して綾線がみられる。	長石などの微粒を含む。	淡灰色。	
第20図 図版第13	トレンチ4区 5層上層	須恵器 杯 蓋	(口径)13.0 (残存)口縁12分の1	杯天井部と口縁部の境に綾線がみられる。口縁部は外反する。	長石の微粒を含む。精良。	青灰色。	
第20図 図版第13	トレンチ3・4区 4層	須恵器 杯 蓋	(口縁)12.9 (残存)口縁16分の1	天井部からゆるやかに屈曲して口縁部にいたる。内面はヨコナデによる凹みが明確である。	径1mm内の黒色粒を多く含む。	外面暗灰色・灰色。内面灰色。	
第20図 図版第13	トレンチ2区 4層	須恵器 杯 蓋	(口径)12.8 (器高)(3.1) (残存)口縁6分の1	杯天井部と口縁部の境はゆるやかな屈曲部となり、弱い綾線をもつ。	石英・黒色粒を含む。精良。	淡灰色。	
第20図 図版第13	トレンチ4区 5層下層	土師器? 杯 蓋	(口径)11.8 (残存)口縁6分の1	焼成があまく赤褐色を呈し土師器に近いが、器形は杯蓋に最も近い。不良焼成の杯蓋としたが、土師器の杯身の可能性がある。	石英・長石を多く含む。	赤褐色。	
第20図 図版第13	トレンチ4区 5層下層	土師器? 杯 蓋	(口径)13.0 (残存)口縁14分の1	97と同様に赤褐色を呈する。土師器の杯身の可能性がある。	長石・赤色粒を含む。精良。	赤褐色。	
第20図 図版第13	拡張区2 4・5層	須恵器 杯 蓋	(口径)10.0 (残存)口縁6分の1	天井部が失われているが、宝珠つまみのつく蓋とみられる。	精良。	灰白色。	
第20図 図版第13	トレンチ2区 5層上層	須恵器 杯 身	(口径)12.7 (残存)口縁5分の1	長さ1.1cmで、途中屈曲して直立するたちあがり部をもつ。	精良。	表面は暗灰色。器内は赤茶色。	

実測番号	出土場所	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法など	胎 土	色 調	備 考
第20図 101 図版第13	トレンチ3区 4層	須恵器 杯 身	(口径)13.0 (残存)口縁12分の1	長さ9mmのたちあがり部が内湾気味に立ち上がる。	長石の微粒を含む。	外面黄暗灰色。内面灰色。	
第20図 102 図版第13	トレンチ4区 5層下層	須恵器 杯 身	(口径)13.1 (残存)口縁8分の1	長さ8mmのたちあがり部が体部に垂直につく。焼成もナマ焼けに近い。	長石・石英・片岩を多く含む。	淡灰黄色。	
第20図 103 図版第13	トレンチ4区 4層下層～5層	須恵器 杯 身	(口径)13.2 (残存)口縁6分の1	体部外面の17分の8にヘラケズリが施される。たちあがり部は約9mmである。	黒色粒・長石の微粒を含む。精良。	淡灰色。	
第20図 104 図版第13	トレンチ4区 4層下層～5層	須恵器 杯 身	(口径)14.0 (残存)口縁6分の1	たちあがりは断面三角形で長さ約5mmである。	精良。	灰色。	
第20図 105 図版第13	トレンチ4区 4層	須恵器 杯蓋	(口径)14.7 (残存)口縁6分の1	断面三角形、長さ約6mmのたちあがりをもつ。	長石・黒色粒の細粒を含む。精良。	淡青灰色。	
第20図 106 図版第13	トレンチ4区 5層下層	須恵器 杯 身	(口径)11.9 (器高)3.0 (残存)口縁2分の1	体部外面の7分の4にヘラケズリが施される。たちあがりは7mmで、内方へ突出する。	長石・黒色粒あり。	淡灰色。	
第20図 107 図版第13	トレンチ4区 4層	須恵器 杯 身	(口径)12.0 (残存)口縁8分の1	長さ8mmのたちあがり部をもつ。	長石・黒色粒を多く含む。	淡灰色。	
第20図 108 図版第13	トレンチ4区 4層	須恵器 杯 身	(口径)12.2 (残存)口縁8分の1	直線的に伸びる体部に内湾する長さ8mmのたちあがりがつく。	長石などの微粒を含む。緻密。	淡灰色。	
第20図 109	トレンチ4区 5層下層	須恵器 杯 身	(口径)12.6 (残存)口縁8分の1	長さ約6mmの短いたちあがり部をもつ。	径1mm内の長石・黒色粒を含む。	灰色。	
第20図 110 図版第13	トレンチ4区 4層	須恵器 杯 身	(口径)10.0 (残存)口縁4分の1	長さ約9mmのたちあがり部は内湾する。	長石・黒色の微粒を含む。	外面灰色。内面はだ色。	
第20図 111	トレンチ5区 4層下層～5層	須恵器 杯 身	(口径)11.2 (残存)口縁8分の1	断面三角形のたちあがり部をもつ。	精良。	表面は淡灰色器内は灰紫色。	
第20図 112	トレンチ7区 3層下層	須恵器 杯 身	(口径)10.6 (残存)口縁8分の1	直線的に伸びる体部に短いたちあがり部がつく。	長石・黒色粒の微粒を含む。	淡灰色。	
第21図 113	トレンチ3区 4層	須恵器 高 杯	(口径)9.4 (残存)口縁10分の1	杯部に凹線が1条施される。	精良。	淡灰青色。	
第21図 114	トレンチ5区 4層下層～5層	須恵器 高 杯	(残存)脚部のみ	長脚二段透しの形態をとるが、脚上部が中実でもあり、透し穴にはなっていない。	径1mm内の長石・石英を含む。	暗灰色。	
第21図 115	拡張区2 4層	須恵器 高 杯	(脚径)11.7 (残存)脚裾部6分の1	裾部付近で水平に屈曲して端部にいたる。端部は下方へわずかに突出する。脚部に1条の凹線がみられる。	径1mm内の長石粒を含む。	外面灰紫色。内面暗灰色。	
第21図 116	トレンチ4区 4層	須恵器 高 杯	(脚径)10.4 (残存)脚裾4分の1	脚裾部が一度ゆるやかに屈曲して端部にいたる。	長石・黒色粒の微粒を多く含む。	外面暗灰色。内面灰色。	
第21図 117	トレンチ5区 5層	須恵器 壺	(残存)胴部のみ	胴部最大径の付近に凹線が施される。	径1mm内の長石を含む。	淡灰青色。	
第21図 118 図版第16	トレンチ3区 4層	須恵器 罎?	(残存)胴部一部のみ	球形の胴部で、沈線間にクシ状工具による刺突文が施される。	黒色粒を含む。精良。	灰色。	内外面に自然釉による光沢あり。
第21図 119 図版第14	トレンチ4区 5層下層	須恵器 甕	(口径)10.5 (残存)口縁6分の1	発達した胴部にゆるやかに短く外反する口縁部がつく。胴部外面はタタキのちハケメ、内面は同心円文のちナデにより調整される。	長石の細粒を含む。精良。	灰色。	
第21図 120 図版第14	トレンチ5～7区 4層	須恵器 甕	(口径)16.1 (残存)口縁6分の1	胴部上半は平行タタキのちカキメに近い調整がされる。	長石・黒色粒を多く含む。	灰色。	

実測番号	出土場所	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法など	胎 土	色 調	備 考
第21図 121 図版第14	トレンチ2区 4層	須恵器 甕	(口径)20.2 (残存)口縁8分の1	口縁部を段状に肥厚させる。口縁端部は上方へわずかにつまみ上げる。	長石・片岩粒を含む。	淡灰色。	
第21図 122 図版第14	トレンチ4区 4層	須恵器 甕	(口径)22.0 (残存)口縁6分の1	口縁端部を段状に肥厚させる。	長石を多く含む。	暗灰色。	
第21図 123 図版第14	トレンチ7区 3層下層	須恵器 甕	(口径)17.0 (残存)口縁4分の1	口縁端部を段状に肥厚させるが、端部は丸く調整される。	長石の細粒多い。	淡灰色。	
第21図 124 図版第14	トレンチ5区 4層下層～5層	須恵器 甕	(口径)18.0 (残存)口縁8分の1	口縁端部を上下に肥厚させ、段面四角形に近い形態となる。	径1mm内の長石・石英を多く含む。	外面灰色器肉紫色。	
第21図 125	トレンチ6区 3層下層	須恵器 器台	(脚径)19.3 (残存)脚部12分の1	脚裾部が段状に低く肥厚する。	径1mm内の長石・石英を含む。良。	外面淡灰色。器肉灰茶色。	
第21図 126 図版第16	トレンチ1区 5層下層	埴輪 円筒埴輪	(残存)胴部一部のみ	高さ2～3mmの低いタガをもつ円筒埴輪の砂片をもつ。	径1mmの長石・石英・赤色粒を含む。	淡赤褐色。	
第21図 127 図版第16	拡張区2 4・5層	埴輪 円筒埴輪	(口径)22.0 (残存)口縁16分の1	口縁端部をわずかに肥厚させる。	径1mm内の赤色粒・長石を多く含む。	淡赤褐色。	
第22図 128 図版第14	トレンチ2区 5層上層	弥生土器 壺	(口径)9.8 (残存)口縁4分の1	直立する頸部と外反する口縁部をもつ。	径1～3mmの片岩を含む。	淡赤褐色。	
第22図 129 図版第14	トレンチ2区 5層上層	弥生土器 壺	(口径)15.0 (残存)口縁6分の1	ゆるやかに外反する頸部と上下にわずかに肥厚させる口縁部をもつ。口縁端面に1条の凹線が施される。	径1mm内の赤色粒・長石を多く含む。	赤褐色。	
第22図 130 図版第14	トレンチ2区 5層	弥生土器 壺	(口径)17.6 (残存)口縁10分の1	口縁端部を下方へ拡張し、端面に2条の弱い凹線を施す。	径1mm内の長石・片岩を含む。	淡黄赤褐色。	
第22図 131 図版第14	トレンチ3区 4層下層	弥生土器 壺	(口径)14.6 (残存)口縁6分の1	外反する頸部に断面三角形の粘土を貼りつけて口縁部をつくる。口縁外面には円形刺突文が施される。	径1mm内の片岩・長石を含む。	赤褐色。	
第22図 132	トレンチ1区 5層上層	弥生土器 壺	(残存)頸部・胴部の一部	胴部上半には、2個で1対とみられる円形刺突文が施される。	径1mm内の赤色粒・砂岩粒を含む。	外面赤褐色。内面暗灰色。	
第22図 133 図版第14	拡張区2 4～5層	弥生土器 壺	(口径)24.0 (残存)口縁8分の1	口縁端部を垂下させ、端面に4条の凹線と円形浮文を付加する。	長石・赤色粒を含む。	赤褐色。	
第22図 134 図版第14	トレンチ2区 4層	弥生土器 壺	(口径)23.2 (残存)口縁12分の1	断面三角形の粘土を貼りつけて口縁部を肥厚させる。端面には径1.2～1.5cmの円形刺突文が施される。	径1～2mmの長石・片岩を多く含む。	淡赤褐色。	
第22図 135 図版第14	トレンチ1区 5層上層	弥生土器 壺	(口径)13.6 (残存)口縁4分の1	頸部から外反して口縁にいたる。口縁端部は上下に肥厚して、端面には3条の凹線と円形浮文をもつ。	径1mm内の片岩・長石を含む。	淡赤褐色。	
第22図 136 図版第14	トレンチ4区 5層下層	弥生土器 壺	(口径)12.7 (残存)口縁8分の1	外反する頸部に、わずかに上部につまみ上げる口縁端部をもつ。端面には3条の凹線と3段の刻み目をもつ。	精良。	淡灰黄色。	
第22図 137 図版第14	トレンチ2区 5層	弥生土器 壺	(口径)18.0 (残存)口縁8分の1	口縁端部を上下に肥厚させる。端面には幅広い凹線を2条施し、径8～9mmの円形浮文を貼りつける。	径1mm内の片岩・赤色粒・長石を多く含む。	淡灰黄色。	
第22図 138 図版第14	トレンチ4区 5層下層	弥生土器 壺	(口径)14.2 (残存)口縁8分の1	外反する口縁の端部で、端面には円形刺突文が施される。	径1mm内の赤色粒を含む。	灰黄色。	
第22図 139 図版第14	トレンチ1区 5層下層	弥生土器 甕	(口径)14.0 (残存)口縁6分の1	口縁の途中で一度屈曲して外反する受口状の口縁部をもつ。	径1mm内の長石・黒色円礫を多く含む。	黄赤褐色。	
第22図 140 図版第14	トレンチ2区 4層	弥生土器 甕	(口径)17.3 (残存)口縁10分の1	口縁が屈曲する受口状口縁である。	長石・石英・黒色粒をやや多く含む。	茶褐色。	

実測番号	出土場所	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法など	胎 土	色 調	備 考
第22図 141	トレンチ2区 5層上層	弥生土器 高 杯	(口径)22.4 (残存)口縁12分の1	杯部と口縁部の境に稜線をもつ四形 高杯の杯部である。	径1mm内の長 石を多く含む。	淡黄色。	
第22図 142	トレンチ3区 4層	弥生土器 高 杯	(残存)脚部一部のみ	上下二段に円形透しが穿たれる。上 段は4方透し、下段は不規則な多孔 となる。	石英・長石・黒色 粒の微粒を含む。	淡灰黄色。	
第22図 143	トレンチ6・7区 5層上層	弥生土器 高 杯	(残存)杯部・脚部 の一部	脚部内面にシボリ目が残る。	長石・石英・赤色 粒を多く含む。	赤褐色。	
第22図 144	トレンチ1区 5層上層	弥生土器 高 杯	(残存)杯部と脚部 の一部	脚柱部からゆるく屈曲して裾部に いたる形態をとる。	片岩・褐色粒・長 石を含む。	赤褐色。	
第22図 145	トレンチ2区 4層	弥生土器 高 杯	(残存)杯部・脚部 の一部		石英・長石・赤色 粒を多く含む。	赤褐色。	
第22図 146	トレンチ1区 4層	弥生土器 高 杯	(残存)脚部		片岩・赤色粒を 多く含む。	淡赤褐色。	
第22図 147	トレンチ2区 5層上層	弥生土器 高 杯	(残存)脚部		径1mm内の石 英・赤色粒を多 く含む。	淡赤褐色。	
第23図 148 図版第12	トレンチ1区 5層下層	弥生土器 鉢	(口径)13.8 (底径)4.0 (器高)8.0~9.0 (残存)口縁4分の3	上げ底の底部から内弯しながら立ち 上がる胴部をもつ。全体的に摩滅す るが、一部に内外面とも12~13本/ cmの細かいハケメ調整される。	長石・黒色粒・片 岩・クサリ礫を 多く含む。	淡茶褐色。	
第23図 149 図版第15	トレンチ2区 4層	弥生土器 底 部	(底径)3.2 (残存)底部完存	上げ底の底部である。	径1~2mmの 長石・片岩を含 む。	外面黒色。 内面淡赤褐 色。	
第23図 150 図版第15	トレンチ1区 5層上層	弥生土器 底 部	(底径)6.0 (残存)底部完存	極端な上げ底である。	径1mm内の赤 色粒・長石を含 む。	淡赤褐色。	
第23図 151 図版第15	トレンチ1区 4層下層	弥生土器 底 部	(底径)5.1 (残存)底部完存	上げ底の底部で、底面中央がさらに 凹む形態となる。	長石・赤色粒を 含む。	淡灰黄色。	
第23図 152 図版第15	トレンチ2区 4層	弥生土器 底 部	(底径)4.1 (残存)底部完存	上げ底の底部で、外面に2~3本/ cmの粗いタキ痕跡がみられる。 内底面が底面の上げ底に対応するよ うに凹む。	赤色粒・長石が 多い。	灰黄色。	
第23図 153 図版第15	トレンチ2区 5層	弥生土器 底 部	(底径)4.1 (残存)底部完存	上げ底の底部で、底面中央部はユビ オサエにより、さらに凹む。	片岩・長石・黒色 粒の微粒を含む。	灰黄色。	
第23図 154 図版第15	トレンチ2区 5層上層	弥生土器 底 部	(底径)4.5 (残存)底部完存	上げ底気味の底面をもつ。	径1mm内の長 石・片岩・赤色粒 を含む。	淡赤褐色。	
第23図 155 図版第15	トレンチ1区 5層上層	弥生土器 底 部	(底径)5.0 (残存)底部完存	平底の形態ながら底面中央が長さ1.8 cm、深さ2mm程凹む。胴部の内 底面も凹む。	径1mm内の長 石・片岩を含む。	外面黒色。 内面黄褐色。	
第23図 156 図版第15	トレンチ3区 4層下層	弥生土器 底 部	(底径)6.6 (残存)底部完存	底面中央に粘土の欠けた部分があり 極端に凹む。全体としてはわずかに 上げ底の形態をなすものであろう。	石英・長石の円 粒を含む。	外面赤茶色。 内面灰黄色。	
第23図 157 図版第15	トレンチ3区 4層	弥生土器 底 部	(底径)5.1 (残存)底部完存	平底の底部で、外面にはユビオサエ、 胴部下半にはタキの痕跡が認めら れる。	長石・赤色の微 粒を含む。	外面赤褐色。 内面淡灰黄 色。	
第23図 158 図版第15	トレンチ2区 4層	弥生土器 底 部	(底径)4.0 (残存)底部完存	平底の形態をとり、底面中央が径7 mm、深さ2mm分だけ凹む。	径2~4mmの 片岩・石英と雲 母を含む。	淡黄褐色。	
第23図 159 図版第15	トレンチ1区 4層	弥生土器 底 部	(底径)4.5 (残存)底部2分の1	平底の底部で、胴部外面にタキの 痕跡がみられる。	径5mmもの砂 粒を含む。	黒色・灰黄 色。	
第23図 160 図版第15	トレンチ7区 5層上層	弥生土器 底 部	(底径)4.3 (残存)底部2分の1	平底の底部と3~4本/cmのタ キをもつ胴部からなる。	長石・赤色粒の 細粒を含む。	外面黒褐色。 内面灰黄褐 色。	

実測番号	出土場所	器種・部位	法量(cm)	形態・技法など	胎土	色調	備考
第23図 161 図版第15・16	トレンチ2区 4層	弥生土器 底部	(底径)4.2 (残存)底部完存	下方に突出する平底をもつ。内面には細かいハケ調整が一部残存する。	径1mm内の石英・長石粒を多量に含む。	外面茶赤褐色。内面灰黄色。	底面に葉脈とみられる痕跡が残る。
第23図 162 図版第15	トレンチ6区 3層下層	弥生土器 底部	(底径)4.0 (残存)底部完存	平底で、外面に4本/cmのタタキが施される。	径1mm程の赤色粒と雲母の微粒が目立つ。	赤褐色。	
第23図 163 図版第15	トレンチ2区 5層	弥生土器 底部	(底径)7.4 (残存)底部完存	平底の底部である。	径1mm内の片岩・長石を含む。	赤褐色。	
第23図 164 図版第15	トレンチ2区 5層上層	弥生土器 底部	(底径)4.4 (残存)底部完存	平底の形態で、底面中央が凹む。	片岩・長石の細粒を含む。	外面黒色。内面黄褐色。	
第23図 165 図版第15	トレンチ4区 5層下層	弥生土器 底部	(底径)5.4 (残存)底部完存	平底で突出する底部をもつ。	石英・赤褐色粒を含む。	淡赤褐色。	
第23図 166 図版第15	トレンチ1区 4層	弥生土器 底部	(底径)4.7 (残存)底部3分の1	平底で、底面外面にユビオサエが認められる。	長石・黒色粒・クサリ礫などの粗砂を含む。	淡茶褐色。	
第23図 167 図版第15	トレンチ2区 4層	弥生土器 底部	(底径)3.2 (残存)底部完存	平底であるが、底面には凹凸がある。胴部外面にはタタキの痕跡、内底面にはいわゆるクモの巣状ハケメが残る。	径1~2mmの砂石・赤色粒を含む。	外面黒色と淡灰色。内面灰黄色。	
第23図 168 図版第15	トレンチ3区 5層上層	弥生土器 底部	(底径)4.5 (残存)底部完存	底面が丸く突出する	径1mm内の赤色粒・長石を含む。	淡灰黄色。	
第23図 169 図版第15	トレンチ2区 4層	弥生土器 底部	(底径)5.0 (残存)底部2分の1	上げ底で、底面はナデにより調整される。	片岩を多く含む。	赤褐色。	胎土よりみて紀ノ川南岸産の可能性がある。
第23図 170 図版第15	トレンチ1区 5層下層	弥生土器 底部	(底径)5.0 (残存)底部完存	平底であるが、底面がやや突出する。	径1~4mmの石英・砂石・長石を含む。	淡赤褐色。	
第23図 171 図版第15	トレンチ1区 5層下層	弥生土器 底部	(底径)4.0 (残存)底部完存	平底の底部をもつ。	長石・赤褐色の微粒を含む。	外面黒色。内面茶褐色。	
第23図 172 図版第15	トレンチ3区 4層	弥生土器 底部	(底径)3.8 (残存)底部4分の3	極めて高い凹み部をもつ。	径1mm内の長石・片岩を含む。	黒色・赤褐色を呈する。	
第24図 173 図版第16	拡張区1 4層	弥生土器 甕	(口径)12.5 (残存)口縁7分の1	くの字に屈曲する口縁部で、胴部上部にはタタキ調整が認められる。	径3mm以下の白色・灰色系の砂粒を含む。	外面赤褐色。内面橙褐色。	
第24図 174	拡張区1 4層	弥生土器? 甕	(口径)12.7 (残存)口縁10分の1	くの字に屈曲する口縁部は短く、やや肥厚する。胴部上部にはタタキの痕跡とみられる調整がみられる。	緻密。	外面灰白色。内面白褐色。	
第24図 175 図版第16	拡張区1 4層	弥生土器 甕	(口径)13.4 (残存)口縁10分の1	口縁はわずかに内弯気味に伸びる。胴部外面には右上りのタタキ調整が観察される。	径1mm内の灰色・赤色粒がわずかに入る。	外面淡黄白色。内面乳灰色。	
第24図 176 図版第16	拡張区1 4層	土師器 甕	(口径)14.8 (残存)口縁5分の1	口縁部の頸部側が肥厚する。胴部はあまり発達しないタイプとみられる。	径3mm内の白色・赤色・雲母の粒子を含む。	外面茶褐色。内面淡褐灰色。	
第24図 177	拡張区1 4層	弥生土器 甕	(口径)16.6 (残存)口縁7分の1	口縁端面に刻み目が施される。頸部付近にはタタキ調整の痕跡がみられる。	径3mm内の白色・赤色・黒色粒を含む。	外面赤乳色。内面暗灰褐色。	
第24図 178 図版第17	拡張区1 4層	土師器 甕	(口径)15.8 (残存)口縁5分の1	口縁部の頸部側が肥厚する。	径3mm以下の白色・灰色系の粒子を含む。	外面橙褐色。内面橙褐色。	
第24図 179 図版第16	拡張区1 4層	土師器 甕	(口径)18.8 (残存)口縁10分の1	口縁端部は上方へわずかにつまみ上げる。	径3mm以下の赤色・白色・灰色粒子を含む。	外面淡灰乳色。内面淡褐乳色。	
第24図 180	拡張区1 4層	弥生土器? 甕	(口径)18.4 (残存)口縁10分の1	直線気味に伸びる口縁部は端部でやや外反する。口縁端面はやや丸味を帯びる。	径3mm内の白色・赤色・灰色粒を含む。	外面褐赤色。内面濃褐赤色(一部淡黒色)。	

実測番号	出土場所	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法など	胎 土	色 調	備 考
第24図 181	拡張区 1 4層	土師器 甕	(口径)19.4 (残存)口縁10分の1	外反して伸びる口縁部で端部は丸く仕上げる。頸部付近の方が肥厚する。胴部はあまり発達しない。	径3mm以下の赤色・白色・灰色粒子を含む。	暗灰褐色。	
第24図 182 図版第16	拡張区 1 4層	弥生土器 甕	(口径)21.6 (残存)口縁5分の1	くの字に屈曲して直線的に伸びる口縁部で、端面には不規則な右上りの刻み目が施される。	径3mm内の白色・灰色粒子を含む。	外面淡乳黄色。内面淡乳褐色。	
第24図 183	拡張区 1 4層	土師器 甕	(口径)26.8 (残存)口縁20分の1	くの字に屈曲して直線的に伸びる口縁部で、端部はさらに細くつまみ出されて調整される。	径3mm内の灰色・灰色粒子が多く含まれる。	外面淡黄褐色。内面淡灰褐色。	
第24図 184	拡張区 1 4層	土師器 甕	(口径)26.6 (残存)口縁14分の1	くの字に屈曲し、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。胴部内面と口縁部の境は鋭い稜線をもつ。	径5mm内の白色・灰色粒子を含む。	外面白灰色。内面淡黄灰色。	
第24図 185	拡張区 1 5層	土師器 甕	(口径)26.8 (残存)口縁10分の1	直線的に伸びる口縁部は肥厚する。端部はやや細く仕上げられる。	径1mm内の白色・灰色粒子を少量含む。	外面褐灰色。内面灰黄色。	
第24図 186	拡張区 1 4層	弥生土器 壺	(口径)11.8 (残存)口縁7分の1	外反する頸部から口縁部にいたる。口縁端部は上下にわずかに肥厚する。	径1mm内の赤色・灰白・黒色粒子を含む。	淡赤褐色。	
第24図 187 図版第17	拡張区 1 4層	弥生土器 壺	(口径)12.1 (残存)口縁8分の1	外反気味に伸びる口縁部で、端部は粘土を貼りつけた垂下口縁となる。	径1mm内の赤色・灰色粒を含む。	外面乳褐色。内面淡乳黄色。	
第24図 188 図版第16	拡張区 1 4層	弥生土器 壺	(口径)12.0 (残存)口縁4分の1	外反する口縁部で、端部には粘土を貼りつけて垂下口縁となる。頸部内面には細かいハケメ調整が観察される。	径3mm内の赤色・白色・灰色の粒子を含む。	外面乳灰白色。内面乳黄色。	
第24図 189 図版第16	拡張区 1 4層	弥生土器? 壺	(口径)7.6 (残存)口縁1分の1	細い頸部から外反して伸びる口縁部をもつ。口縁端部はわずかに上下に肥厚し、端面には径5~7mmの円形浮文が24~25個付けられる。	径1mm内の白色などの粒子を含む。	橙褐色。	
第24図 190	拡張区 1 4層	弥生土器 壺	(口径)11.6 (残存)口縁10分の1	外反して伸びる口縁部の端部に断面三角形の粘土を貼りつけて垂下口縁をもつ。端面には楕円形の刺突文が施される。	径2mm内の白色・雲母の砂粒を含む。	外面淡黄褐色。内面黒黄色。	
第24図 191 図版第16	拡張区 1 4層	弥生土器 壺	(口径)14.6 (残存)口縁5分の2	直立する頸部から外反して伸びる口縁部をもつ。口縁端面は外傾する面をもち、不規則な刺突文が施される。	径3mm内の赤色・白色・雲母の粒子を含む。	外面赤褐色。内面淡乳褐色。	
第24図 192	拡張区 1 5層	弥生土器? 壺	(口径)15.8 (残存)口縁7分の1	斜上方に直線的に伸びる頸部からわずかに屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。端部は丸く仕上げる。	径1mm内の灰色・赤色粒を含む。	外面乳褐色。内面褐乳色。	
第24図 193	拡張区 1 5層	土師器 壺	(口径)14.9 (残存)口縁5分の1	外反気味に伸びる頸部と断面三角形の粘土を貼りつける垂下口縁部をもつ。端面は強いナデにより調整される。	径3mm内の赤色・灰色・白色粒子を含む。	外面乳赤色。内面灰橙色。	
第24図 194 図版第16	拡張区 1 4層	土師器 甕?	(口径)17.0 (残存)口縁5分の1	左上りの平行タタキをもつ胴部に直立する短い頸部と斜上方へ直線的に伸びる口縁部をもつ。形態よりみて壺の可能性はある。	径2mm内の赤色・白色・灰色粒子を含む。	外面赤褐色。内面橙褐色。	
第24図 195 図版第16	拡張区 1 4層	弥生土器 壺	(口径)15.2 (残存)口縁5分の1	ゆるやかに外反する頸部に断面三角形の粘土を貼りつけて垂下口縁をもつ。端面には竹管文が施される。	径2mm内の白色・赤色・雲母の粒子を含む。	外面黄褐色。内面黄灰色。	
第24図 196 図版第16	拡張区 1 4層	弥生土器? 壺	(口径)17.4 (残存)口縁7分の1	端部に粘土を貼りつけて垂下口縁をもつ。端面には竹管浮文が付加される。	径2mm内の赤色・白色粒子を含む。	外面橙褐色。内面淡黒色。	
第24図 197	拡張区 1 4層	弥生土器 壺	(口径)16.8 (残存)口縁8分の1	ゆるやかに外反する口縁部で、口縁端部は上下にわずかに肥厚する。	径1mm内の赤色・灰色粒子を含む。	外面赤褐色。内面褐赤色。	
第24図 198 図版第17	拡張区 1 4層	弥生土器 甕	(口径)17.2 (残存)口縁7分の1	ゆるやかに外反して伸びたあとに屈曲して斜上方に立ち上がる口縁部をもつ。	径3mm内の灰色・白色粒子を含む。	外面淡赤褐色。内面淡褐乳色。	
第24図 199	拡張区 1 4層	弥生土器 甕	(口径)18.4 (残存)口縁7分の1	ゆるやかに外反してから屈曲して外反する受口状の口縁部である。	径1mm内の白色・灰色の粒子を含む。	外面淡赤褐色。内面褐黄色。	
第25図 200	拡張区 1 4層	弥生土器 甕	(口径)14.2 (残存)口縁5分の1	直立する頸部から屈曲して斜上方へ直線的に伸びる口縁部をもつ。口縁端部は粘土を針つけて下方へ拡張させ、端面に凹線が施される。	径1mm内の白色・赤色・雲母粒子が入る。	外面赤褐色。内面淡灰褐色。	

実測番号	出土場所	器種・部位	法 量(cm)	形態・技法など	胎 土	色 調	備 考
第25図 201	拡張区1 4層	弥生土器 壺	(口径)16.6 (残存)口縁3分の1	外反する頸部から屈曲して口縁部にいたる。口縁端部は上方へわずかにつまみ上げる。	径3mm内の白色・灰色の砂粒を少し含む。	外面赤褐色。 内面橙褐色。	
第25図 202	拡張区1 4層	弥生土器 壺	(口径)21.2 (残存)口縁7分の1	直立気味の頸部からゆるやかに外反する口縁部をもつ。厚さは口縁部の方に徐々に肥厚する。端面は外傾する平坦面となる。	径10mm内の白色・灰色・雲母の粒子を含む。	外面暗赤褐色。 内面淡赤灰色。	
第25図 203	拡張区1 4層	弥生土器 壺	(口径)14.8 (残存)口縁10分の1	大きく直線的に開く口縁部で、端部は下方に粘土を貼りつけて少し丸味をもつ内傾面をつくる。	径5mm内の白色・灰色・黒色粒子を含む。	外面茶褐色。 内面淡褐茶色。	
第25図 204 図版第16	拡張区1 4層	弥生土器 壺	(口径)16.4 (残存)口縁5分の1	斜外方へ外反して伸びる口縁部をもつ。頸部より口縁部が肥厚する。	径3mm内の白色・黒色粒子を含む。	外面桃褐色。 内面淡褐赤色。	
第25図 205	拡張区1 4層	弥生土器 壺	(口径)16.4 (残存)口縁7分の1	直立する頸部から屈曲する口縁部をもつ。口縁端部は上方に粘土を貼りつけて肥厚させる。	径3mm内の白色・灰色粒子を含む。	外面淡赤白色。 内面淡赤灰色。	
第25図 206	拡張区1 4層	弥生土器 高杯?	(口径)19.6 (残存)口縁12分の1	ゆるやかに外反し、端部をわずかにつまみ出す口縁部をもつ。	径3mm内の赤色・白色・灰色の粒子を含む。	茶褐色。	
第25図 207	拡張区1 4層	弥生土器 壺	(口径)22.0 (残存)口縁10分の1	ゆるやかに外反する頸部と粘土を貼りつけた垂下口縁部をもつ。口縁端面には幅広い擬凹線が2条施される。	径1mm内の赤色・白色・灰色粒子を含む。	外面淡赤黄色。 内面淡褐黄色。	
第25図 208 図版第17	拡張区1 4層	弥生土器 壺	(口径)24.0 (残存)口縁10分の1	ゆるやかに外反して伸びる口縁部をもつ。端部はわずかに肥厚し、端面は外傾する。	径3mm内の赤色・白色の粒子を含む。	外面淡灰茶色。 内面灰褐色。	
第25図 209	拡張区1 4層	弥生土器 壺	(口径)24.0 (残存)口縁12分の1	外反する口縁の端部に粘土を貼りつけて垂下口縁をつくる。	径3mm内の赤色・灰色・雲母粒子を含む。	外面赤褐色。 内面褐赤色。	
第25図 210 図版第17	拡張区1 4層	壺?	(残存)屈曲部12分の1	屈曲して外反する形態で、屈曲部には粘土を垂下口縁状に貼りつけて外面に2条の凹線をもつ。異形土器であるが二重口縁壺であろうか?	径3mm内の白色・灰色・赤色粒子を含む。	褐灰色。	
第25図 211 図版第17	拡張区1 4層	弥生土器 壺	(残存)屈曲部10分の1	二重口縁壺の口縁部で、屈曲部に不規則な刻み目をもつ。	径5mm内の灰色・白色の粒子を含む。	外面黄褐色。 内面黄灰色。	
第25図 212	拡張区1 4層	弥生土器 高杯	(口径)19.4 (残存)口縁8分の1	屈曲して短く垂直に立ち上がってから外反する口縁をもつ。	径5mm内の白色・赤色・雲母の粒子を含む。	外面淡赤灰色。 内面灰白色。	
第25図 213	拡張区1 5層	弥生土器 高杯	(口径)15.8 (残存)口縁7分の1	屈曲部から外反する口縁部をもつ。	径3mm内の白色・灰色粒子を含む。	外面淡灰白色。 内面灰白色。	
第25図 214 図版第17	拡張区1 4層	土師器? 高杯	(残存)脚部	短脚で大きく開く脚裾部をもつものとみられる。	緻密。径1mm内の赤色・白色粒子を含む。	外面乳灰色。 内面乳黄色 杯底面は乳灰色。	
第25図 215 図版第17	拡張区1 4層	土師器? 高杯	(残存)杯部・脚部	脚高は低く、裾部が大きく開くタイプとみられる。脚内面に工具痕が残る。	緻密。径1mm内の白色・赤色粒子を含む。	外面赤褐色。 内面淡茶褐色。	
第25図 216 図版第17	拡張区1 4層	土師器? 高杯	(残存)杯部・脚部		径5mm内の白色・灰色・雲母粒子を含む。	外面橙褐色。 内面淡褐色。	
第25図 217 図版第17	拡張区1 4層	弥生土器 高杯	(残存)脚部	円孔は4方に穿たれる。	緻密。径1mm内の赤色・灰色粒子を含む。	外面乳赤色。 内面赤赤色。	
第25図 218 図版第17	拡張区1 4層	弥生土器 高杯	(残存)杯部・脚部	円孔は3方とみられる。脚内面には工具痕が残る。脚外面はタタキ調整を行なっている可能性がある。	径3mm内の白色・灰色・赤色粒子を含む。	桃乳色。杯底面は淡灰白色。	
第25図 219 図版第17	拡張区1 4層	弥生土器 高杯	(残存)脚部		緻密。5mm内の白色・灰色・雲母を含む。	外面淡灰褐色。 内面淡褐灰色。	
第25図 220 図版第17	拡張区1 4層	弥生土器 高杯	(残存)杯部・脚部		径1mm内の白色・灰色粒子を含む。	外面淡褐黄色。 内面淡黄褐色。	

実測番号	出土場所	器種・部位	法量(cm)	形態・技法など	胎土	色調	備考
第25図 221 図版第17	拡張区1 5層	弥生土器 高杯	(残存)杯部・脚部		径3mm内の白色・灰色・雲母粒子を含む。	外面淡褐灰色。内面乳灰色。	
第25図 222	拡張区1 5層	弥生土器 高杯	(残存)脚部のみ	脚内面にシボリ目状の痕跡がみられる。	径3mm内の砂粒を少し含む。	外面褐灰色。内面灰褐色。	
第25図 223 図版第17	拡張区1 4層	弥生土器 高杯?	(残存)脚部のみ	直線的に八の字形に開く脚部で、外面には3本/cmのタタキ調整が施される。	径3mm内の赤色・白色・灰色粒子を含む。	赤褐色。杯底面は褐白色。	
第25図 224 図版第17	各地用区1 4層	弥生土器 高杯	(残存)杯部・脚部		径3mm内の赤色・灰色粒子を含む。	乳赤色。外面一部黄乳色。	
第25図 225	拡張区1 4層	弥生土器 高杯	(脚径)11.4 (残存)脚裾部5分の2	直立する脚上部から大きく外反して拓く脚裾部をもつ。円孔は4方とみられる。	径3mm内の赤色・灰色粒子が多く含まれる。	外面乳白色。内面乳褐色。	
第25図 226 図版第11・17	拡張区1 4層	弥生土器 高杯	(脚径)13.0 (残存)脚裾部3分の1	直立気味の脚上部から外反しながら脚裾部にいたる。端部は丸く仕上げられ、脚外面にはヘラミガキ、脚内面にはシボリメが観察される。	緻密。径3mm内の白色・灰色粒子を含む。	灰褐色。外面一部褐灰色。	
第25図 227 図版第17	拡張区1 4層	弥生土器 高杯	(残存)脚部		緻密。	外面白褐色。内面赤褐色。杯底面は白褐色。	
第25図 228 図版第17・18	拡張区1 5層	弥生土器 高杯	(残存)脚部	長く直立気味に伸びる脚部から屈曲して裾部にいたる形態となる。脚上部は中実で、屈曲部付近の円孔は4方に穿たれる。	緻密。雲母等を含む。	外面褐灰色。内面褐赤色。	
第26図 229	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)3.8 (残存)底部完存	ほぼ平坦で突出する底部をもつ。内面には放射状に工具痕が観察される。	径1~5mmの赤色・灰色・白色粒子を含む。	外面乳黄色。内面黄乳色。	A1a類
第26図 230 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)3.4 (残存)底部完存	平底で突出する底部で、外面にタタキが観察される。	径1mm内の赤色・白色・灰色粒子を含む。	外面赤乳色。内面白灰色。	A1a類
第26図 231	拡張区1 5層	弥生土器 底部	(底径)4.4 (残存)底部5分の4	わずかに上げ底気味の底部で、胴部には右上がりのタタキが残る。	径3mm内の白色・灰色・雲母粒子を含む。	外面淡褐色。内面黒緑色。	A1a類
第26図 232 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.2 (残存)底部ほぼ完存	平底で下方へ突出する底部をもつ。	径1~3mmの赤色・白色粒子を含む。	淡灰黄色。	A1a類
第26図 233 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)3.5 (残存)底部完存	中央部が凹む平底の底部である。	径1~3mmの白色・灰色・赤色粒子を含む。	外面淡赤橙褐色。内面橙褐色。	A2a類
第26図 234	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.2 (残存)底部5分の3	底面中央がわずかに凹む平底の形態である。	径5mm内の白色・灰色・雲母粒子を含む。	外面淡灰褐色。底面褐灰色。内面白灰色。	B1a類
第26図 235	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.2 (残存)底部完存	平底で下方へ突出する底部である。	径1mm内の白色・赤色粒子を含む。	外面淡黒黄色。底面褐灰色。内面黒黄色。	外面にスス附着。A1a類
第26図 236 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.0 (残存)底部完存	ほぼ平底で下方へ突出する底部である。	緻密。	外面赤褐色。内面灰褐色。	A1a類
第26図 237 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.5 (残存)底部完存	わずかに凹む平底の底部である。	径1mm内の赤色・白色・黒色粒子を含む。	淡黒色。一部淡黄灰色。	A2a類
第26図 238	拡張区1	弥生土器 底部	(底径)4.0 (残存)底部完存	平底の底部で、胴部外面にタタキ調整が施される。	径1mm内の赤色・黒色粒子を含む。	外面乳白色。内面白灰色。	A1a類
第26図 239	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.2 (残存)底部2分の1	わずかに上げ底気味の底部である。	径1mm内の白色・灰色・赤色粒子を含む。	外面黒褐色。内面黄褐色。	A2a類
第26図 240 図版第17	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.8 (残存)底部5分の2	平底の底部であるが、凹凸が多く認められる。内面にハケメ調整(8mm単位)がみられる。	やや緻密。	外面白灰色。内面黒黄色。	A1a類

実測番号	出土場所	器種・部位	法量(cm)	形態・技法など	胎土	色調	備考
第26図 241	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)3.8 (残存)底部4分の3	胴部から屈曲して底部にいたる形態をもつ。底部は平底である。	緻密。赤色粒子を少し含む。	外面乳白色。 内面赤黄色。 内面の一部 灰黒色。	A1a類
第26図 242	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.3 (残存)底部5分の4	わずかに上げ底気味の形態をもつ底部である。	径1mm内の赤色粒子を少し含む。	外面乳白色。 内面白乳色。	A2a類
第26図 243	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.4 (残存)底部10分の7	平底の中央がわずかに凹む。	径1mm内の白色・赤色・黒色粒子を含む。	外面褐黄色。 内面淡褐灰色。	A2a類
第26図 244 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.2 (残存)底部完存	わずかに上げ底の底部である。	径1mm内の赤色粒子を含む。	外面淡乳灰色。 内面淡乳白色。	A3a類
第26図 245	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.7 (残存)底部完存	平底で下方に突出する。	径1mm内の白色粒子を含む。	外面褐黄色。 底面赤褐色。 内面淡黒灰色。	A1a類
第26図 246	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.8 (残存)底部2分の1	平底で下方に突出する。	径1mm内の白色・灰色の粒子を含む。	外面乳灰色。 内面黒灰色。	A1a類
第26図 247 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.9 (残存)底部完存	やや丸味をもつ平底の底部をもつ。	径1mm内の赤色・黒色粒子を多く含む。	外面乳灰色。 底面黄褐色。 内面白灰色。	A1a類
第26図 248	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)3.6 (残存)底部5分の3	平底の底部で、胴部外面に2本/cmのタキ調整がみられる。	緻密。	外面乳灰色。 内面灰乳色。	A1a類
第26図 249 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.0 (残存)底部完存	下方に突出する平底をもつ。胴部外面にはタキの痕跡が認められる。	径1~3mmの粒子を多く含む。	外面淡褐灰色。 内面淡黒色。	A1a類
第26図 250	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)3.6 (残存)底部ほぼ完存	平底の底部から屈曲せずに胴部にいたる形態をもつ。	径3mm程の雲母・白色・灰色粒子を含む。	外面赤褐色。 内面淡灰褐色。	B1a類
第26図 251	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)3.4 (残存)底部完存	底面中央がわずかに凹む平底である。	径1mm内の白色・黒色粒子を少し含む。	外面橙褐色。 内面黄褐色。	A2a類
第26図 252 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.2 (残存)底部完存	平底で下方へ突出する底部である。	径1mm内の赤色・黒色粒子を含む。	淡赤乳色。 底面赤黄色。	A1a類
第26図 253	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)3.1 (残存)底部完存	やや丸味をおびる平底から屈曲せずに胴部にいたる形態をもつ。	緻密。径1mm以下の白色粒子が目立つ。	外面淡黒灰色。 内面淡灰色。	外面にスス付着。B1a類
第26図 254 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.1 (残存)底部ほぼ完存	平底で底面中央がわずかに凹む。	緻密。	外面淡灰黄色。 内面淡灰白色。	A2a類
第26図 255	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.6 (残存)底部完存	平底の底部から内湾しながら胴部にいたる形態をもつ。内底面には棒状工具による圧痕が数ヶ所認められる。	径2mm内の赤色・白色・黒色粒子を含む。	外面灰乳色。 内面白白色。	B1a類
第26図 256 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.8 (残存)底部3分の2	約2cmも突出する平底の底部で、底面中央より少しずれて凹む箇所あり。	径1mm内の赤色・白色・灰色粒子を含む。	外面乳白色。 内面淡乳褐色。	A1b類
第26図 257 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.4 (残存)底部完存	やや丸味をもつ平底の底部で、突出した底部から内湾しながら胴部にいたる。	径1~5mmの赤色・白色・黒色粒子を含む。	外面褐赤色。 内面白橙色。	A1a類
第26図 258	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.6 (残存)底部4分の3	平底の底部から屈曲せずに胴部にいたる形態をもつ。	径1mm内の赤色・白色粒子を少し含む。	外面淡褐灰色。 内面灰白色。	B1a類
第26図 259	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.4 (残存)底部完存	わずかに突出する平底の底部から大きく開く胴部にいたる。	径1mm内の赤色粒子等を含む。	外面橙褐色。 内面橙黄色。	A1a類
第26図 260	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.5 (残存)底部完存	突出して底面は丸味をおびる平底形態をもつ。胴部は、底部から内湾しながら大きく開く。外面にはタキ調整がみられる。	径1~3mmの白色・灰色粒子を多く含む。	外面黒褐色。 底面赤褐色。 内面淡灰黄色。	A1b類

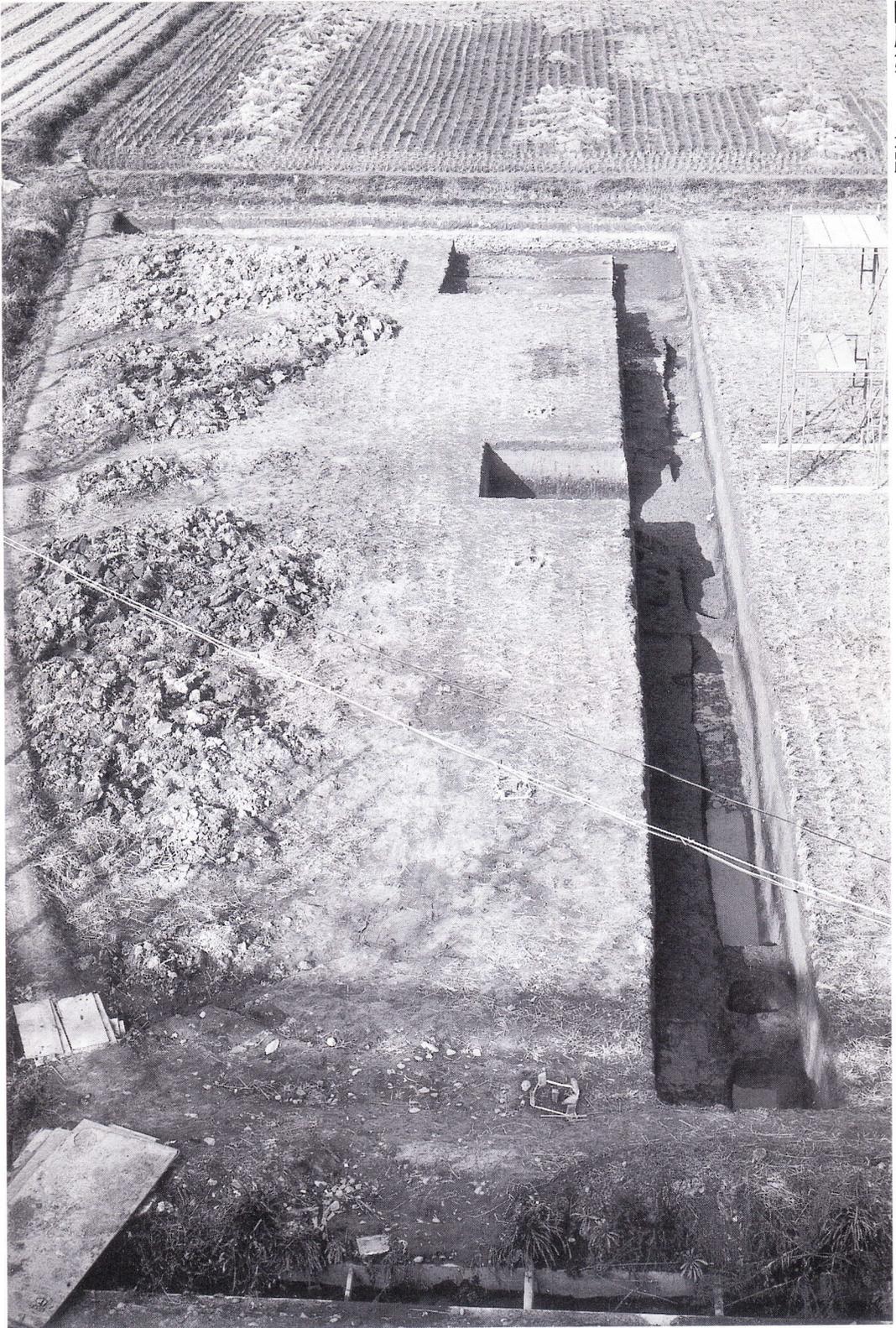
実測番号	出土場所	器種・部位	法量(cm)	形態・技法など	胎土	色調	備考
第26図 261	拡張区1 5層	弥生土器 底部	(底径)4.0 (残存)底部5分の3	平底の底部から比較的急に立ち上がる 胴部をもつ。	径1mm内の赤 色・白色・黒色粒 子を含む。	外面赤乳色。 内面淡黄褐色。 内底面 黒褐色。	B1a類
第26図 262	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.0 (残存)底部完存	ほぼ平底の底部で、胴部に右上りの タタキがみられる。	径3mm内の白 色・灰色粒子を 含む。	外面黄褐色。 底面橙褐色。 内面黒灰色。	A1a類
第26図 263	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.4 (残存)底部2分の1	平底の底部からゆるやかに外反しな がら胴部にいたる。	径3mm内の白 色・灰色・雲母粒 子を含む。	外面赤乳色。 内面橙褐色。	B1a類
第26図 264	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.0 (残存)底部完存	平底の底部で、胴部外面には4本/ cmのタタキが残る。内面には放射 状に工具痕が形成される。	径1～3mmの 赤色粒子をもつ。	外面褐黄色・ 褐灰色。内 面赤黄色・ 赤灰色。	A1a類
第26図 265	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)6.8 (残存)底部完存	大形の平底の底部をもつ。胴部外面 にかすかに左上がりのタタキの痕跡 が認められる。	径5mm内の灰 色・白色・赤色粒 子を含む。	外面淡乳黄 色。内面淡 乳灰色。	A1a類
第26図 266	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.2 (残存)底部完存	平底の底部から内湾気味に胴部にい たる形態をもつ。内面には放射状に 工具痕が残る。	径1mm大の赤 色粒子を少し含 む。	外面乳灰色・ 内面茶乳色。	B1a類
第26図 267	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.1 (残存)底部完存	底面中央部周辺がわずかに凹み低い 高台状の底部となる。胴部は底部か ら屈曲せずに内湾気味に立ち上がる。 外面には右上がりのタタキが残る。	径1～2mmの 赤色・黒色・白色 粒子を含む。	外面乳白色。 内面淡黒色・ 乳灰色。	B1a類
第26図 268	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.8 (残存)底部完存	下方に突出するほぼ平底の底部をも つ。胴部には右上がりのタタキ調整 が施される。	径1～3mmの 赤色・白色粒子 を多く含む。	外面褐褐色。 内面淡褐灰 色。	A1a類
第26図 269	拡張区1 5層	弥生土器 底部	(底径)4.7 (残存)底部4分の3	下方に突出する平底の底部をもつ。	径3mm内の灰 色・赤色粒子を 少量含む。	外面褐灰色。 内面淡灰褐 色。	A1a類
第26図 270	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.4 (残存)底部完存	突出気味の平底の底部から斜上方へ 開き気味に伸びる。	径5mm内の黒 色・白色・灰色・ 雲母を含む。	外面淡乳灰 色。内面淡 黒色。	A1a類
第26図 271	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)3.2 (残存)底部4分の1	丸い平底で、胴部かになわずかに突出 する底部をもつ。	径1mm内の粒 子を含む。	外面褐褐色・ 淡灰色。内 面暗褐灰色。	B1b類
第27図 272 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.5 (残存)底部5分の4	底面中央部が凹む平底の底部である。 内底面も一段低く凹み、その肩部付 近に工具痕が残る。	緻密。雲母粒子 を多く含む。	外面黄灰色。 内面淡黒灰 色。	A2a類
第27図 273 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.5 (残存)底部完存	下方に突出した底部で、底面中央部 が凹む。	径1～3mmの 赤色・白色・雲母 粒子を含む。	外面淡橙褐 色。内面暗 茶褐色。	A2a類
第27図 274	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.0 (残存)底部完存	下方に突出する平底の底部で、底面 中央部がわずかに凹む。内面に工具 痕が残る。	径1mm内の白 色粒子が目立つ。	外面乳灰色。 内面赤黄色。	A2a類
第27図 275	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)(3.4) (残存)底部2分の1	底面中央部が凹む形態となる。	径1～3mmの 赤色・白色・黒色 粒子を含む。	外面乳灰色。 内面赤黄色。	(A2a類)
第27図 276 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.8 (残存)底部5分の3	上げ底で下方へ突出する形態をもつ。 胴部外面には4～5本/cmのタタ キが観察される。	径1mm内の白 色・灰色・赤色粒 子を含む。	外面淡褐黄 色。内面白 灰色。	A3a類
第27図 277 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.1 (残存)底部完存	平底で底面中央部が凹む。	径1mm内の白 色・灰色粒子を 含む。	外面赤褐色 ～白灰色。 内面暗黄褐 色。	A2a類
第27図 278 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)3.5 (残存)底部5分の4	上げ底の底部をもつ。	径1mm内の白 色・黒色粒子を 含む。	外面黄茶色。 内面灰白色。	A2a類
第27図 279	拡張区1 5層	弥生土器 底部	(底径)4.8 (残存)底部2分の1	上げ底で端部は外下方へ大きく張り 出す形態をとる。	緻密。	外面褐乳色。 内面淡乳褐 色。	A2b類
第27図 280 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.4 (残存)底部ほぼ完存	下方へ突出する上げ底の底部である。 内底面も一段凹む形態となる。	緻密。	外面褐乳色。 内面乳白色 器壁茶褐色。	A3b類

実測番号	出土場所	器種・部位	法量(cm)	形態・技法など	胎土	色調	備考
第27図 281 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.9 (残存)底部完存	上げ底の底部で、ゆるやかに外反しながら胴部にいたる。	径1mm内の赤色・白色粒子を少量含む。	外面淡黄褐色。内面淡白灰色。	A2b類
第27図 282	拡張区1 5層	弥生土器 底部	(底径)5.1 (残存)底部完存	底面中央が凹む形態をもつ。	緻密。	外面淡灰褐色。内面赤褐色。	A2a類
第27図 283	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.0 (残存)底部2分の1	極端な上げ底で下方へ突出する底部形態をもつ。	径5mm内の赤色・白色・灰色粒子を含む。	外面淡褐黄色。内面淡橙褐色。	A2b類
第27図 284	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.1 (残存)底部10分の7	上げ底の底部で、胴部は発達する形態をとるようである。	径3mm内の灰色・白色・雲母粒子を含む。	外面淡褐灰色。内面淡灰茶色。	A2a類
第27図 285 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.2 (残存)底部10分の7	上げ底の底部で、底面の器壁が2～3mmと極端に薄い。	径1mm内の白色・赤色・灰色粒子を含む。	外面黒灰色。内面白灰色。	A2b類
第27図 286 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.2 (残存)底部完存	下方へ突出し、上げ底の底部である。底面の器壁は約2mmでかなり薄い。外面には右上がりのタタキが観察される。	径1mm内の赤色・白色粒子を少量含む。	外面淡褐灰色。内面淡赤灰色。	A3b類
第27図 287	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.1 (残存)底部5分の4	上げ底の底部である。	緻密。	外面灰乳色。内面暗灰乳色。	A2a類
第27図 288	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)(4.7) (残存)底部2分の1	上げ底の底部で、内面には工具痕がみられる。	粒子が細かくて密である。	外面白灰色。内面茶褐色。	A3a類
第27図 289	拡張区1 5層	弥生土器 底部	(底径)6.0 (残存)底部2分の1	上げ底の底部で底面はナデ調整される。胴部外面には2本/cmの粗いタタキが施される。	径3mm内の白色・灰色粒子を含む。	外面黒褐色。内面黒黄色。	A3a類
第27図 290	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.3 (残存)底部完存	底面中央部がタテ方向に凹む。外面には3本/cmのタタキが施される。	径1～3mmの赤色・白色・黒色粒子を含む。	外面灰褐色。内面白褐色。	A2a類
第27図 291	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.4 (残存)底部2分の1	底面中央がわずかに凹む形態で、胴部外面には右上がりのタタキが施される。	径3mm内の白色・灰色・黒色粒子を含む。	外面暗褐茶色。底面橙褐色。内面淡黒茶色。	A2a類
第27図 292	拡張区1 5層	弥生土器 底部	(底径)5.8 (残存)底部5分の3	下方へ突出し、底面中央部が凹む形態をもつ。内面には放射状に工具痕が残る。	緻密。	外面淡灰褐色。内面褐灰色。	A2a類
第27図 293	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.8 (残存)底部5分の3	下方へ短く突出し底面中央部が凹む底部をもつ。胴部外面に右上がりのタタキの痕跡が残る。	細かい粒子を含む。	外面乳黄色。内面淡黄褐色。	A2a類
第27図 294	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.6 (残存)底部完存	下方へ突出し、端部が外へ張り出す形態で、底面は平底に近い。	径1mm内の砂粒と赤色粒子を少し含む。	外面乳白色。内面淡乳赤色。	A1a類
第27図 295	拡張区1 5層	弥生土器 底部	(底径)4.6 (残存)底部4分の3	やや丸味をもつ平底の底部で、端部は外へ張り出す。	緻密。	外面黒褐色。内面白灰色。	A1a類
第27図 296	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.3 (残存)底部完存	平底の底部で、胴部から底部の外面にはタタキが施される。	径5mm内の白色・灰色粒子を多く含む。	外面淡灰褐色。内面淡灰褐色。	A1a類
第27図 297	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.3 (残存)底部完存	下方へ突出し、端部が外へ張り出す形態で、底面中央部が凹む。	径1mm内の粒子を少量含む。	外面淡灰色。内面淡褐色。	A2a類
第27図 298	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.2 (残存)底部完存	下方へ突出する上げ底の底部で、胴部へはゆるやかに外反してつづく。	緻密。	外面白灰色。内面灰黄色。	A3b類
第27図 299	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.8 (残存)底部完存	下方へ突出し、底面が上げ底になる。胴部内底面も凹む。	径1mm内の黒色粒子を少し含む。	外面淡灰褐色。内面淡灰白色。	A2a類
第27図 300	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.8 (残存)底部完存	下方へ突出し、端部は外へ張り出す。中央部が上げ底になる。	径1～3mm内の砂粒を少量含む。	外面淡褐色。内面白灰色。	A2a類

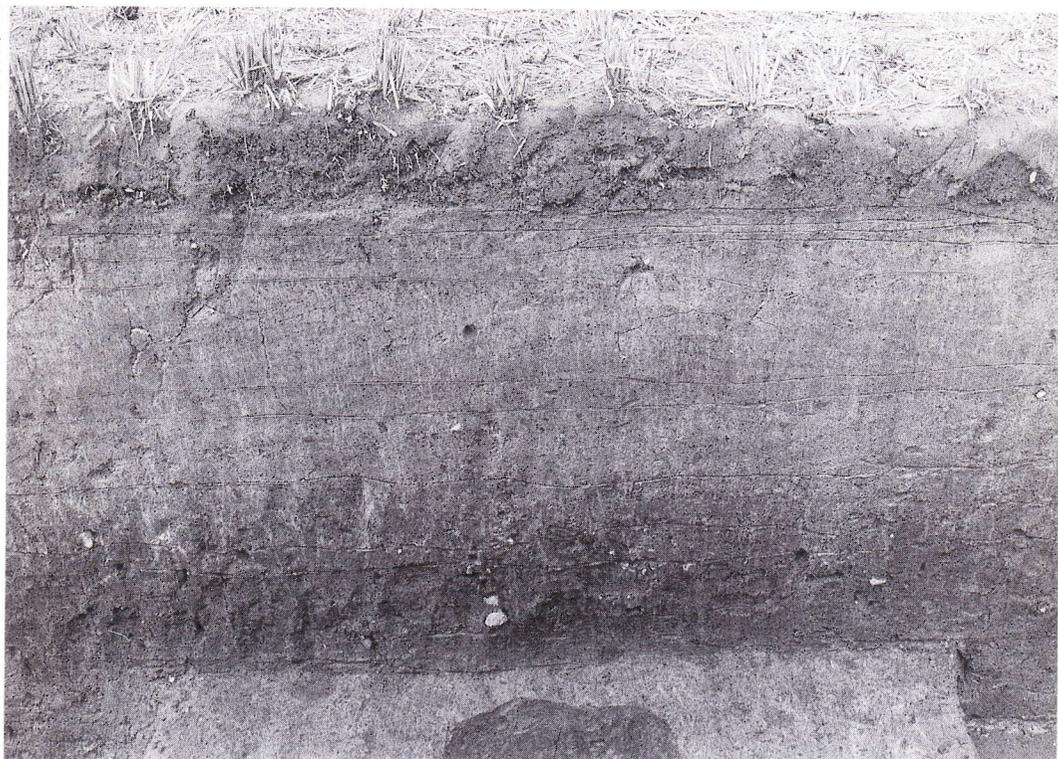
実測番号	出土場所	器種・部位	法量(cm)	形態・技法など	胎土	色調	備考
第27図 301	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.2 (残存)底部5分の2	上げ底の底部で端部は若干外へ張り出す。	径3mm内の赤色・灰色粒子を含む。	外面褐乳色。底面赤乳色。内面乳白色。	A3b類
第27図 302	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.2 (残存)底部完存	下方へ突出し、底面が上げ底になる。特に底面中央部は指で押しひねった様な痕跡がみられる。	径1～3mmの砂粒を含み、赤色粒子が目立つ。	外面乳褐色。内面茶乳色。	A2a類
第27図 303	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.6 (残存)底部2分の1	上げ底の底部から大きく開く胴部につづく。	径2mm内の赤色・黒色・白色粒子を含む。	外面褐灰色。内面淡黒色。	壺の底部か。A3a類
第27図 304	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.4 (残存)底部2分の1	底面の中央付近が極端に凹む形態をとる。	径3mm内の灰色・白色・赤色粒子を含む。	外面赤褐色。内面乳灰色。	A2b類
第27図 305 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.8 (残存)底部完存	下方へ突出し、端部は外へ張り出す形態をもつ。底面中央部が凹む。	径1～3mmの赤色粒子が目立つ。	外面淡橙灰色。内面橙褐色。	A2a類
第27図 306	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.6 (残存)底部4分の3	下方へ突出する底部で、底面が2段に凹む。胴部外面には右上がりのタタキ調整が施される。	雲母・赤色粒子を含む。	外面黒灰色。内面黄灰色。	A3a類
第27図 307 図版第18	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.8 (残存)底部完存	下方へ突出し、端部が外へ張り出す形態をもつ。底面中央部が深く凹む。	径1mm内の赤色・白色粒子を多く含む。	外面乳赤色。内面橙白色。	A2b類
第28図 308	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.4 (残存)底部ほぼ完存	ほぼ平底で下方へ突出する底部をもつ。	径1～3mmの雲母・白色・黒色粒子を含む。	外面赤褐色。内面黒色。	A2a類
第28図 309	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.2 (残存)底部2分の1	わずかに上げ底の底部をもつ。	緻密。	外面褐灰色。内面白褐色。	A2a類
第28図 310	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.0 (残存)底部完存	下方へ突出する平底の底部をもつ。胴部は底部から大きく開く形態になるとみられる。	径1～3mmの粒子を多く含む。	外面赤褐色・乳褐色。内面褐乳色。	A1a類
第28図 311	拡張区1 5層	弥生土器 底部	(底径)5.0 (残存)底部完存	平底の底部である。内底面も凹む。	緻密。	外面淡黒乳色。底面は黒色。内面は淡灰乳色。	A1a類
第28図 312	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.3 (残存)底部完存	下方へ突出し、底面中央部が少し凹む。	赤色・黒色・白色粒子を含む。	外面白灰色。内面淡灰黄色。	A2a類
第28図 313	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.7 (残存)底部完存	下方へ突出する底部をもち、胴部外面には右上がりのタタキ調整が施される。	径1mm大の砂粒を含む。	外面褐乳色。内面乳黄色。	A1a類
第28図 314	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)3.9 (残存)底部2分の1	下方へ突出し、端部が外へ張り出す形態をもつ。底面は上げ底となる。	径1mm内の赤色・白色・灰色粒子を含む。	外面淡乳灰色。内面乳灰色。	A3a類
第28図 315	拡張区1 5層	弥生土器 底部	(底径)4.8 (残存)底部5分の3	下方へ突出し、底面中央が凹む底部である。	緻密。	外面暗褐灰色。内面暗灰褐色。	A2a類
第28図 316	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.4 (残存)底部3分の2	わずかに上げ底で下方へ突出する底部である。	径1～3mmの雲母・白色・灰色粒子を含む。	外面暗黄灰色。内面暗乳灰色。	A2a類
第28図 317	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.5 (残存)底部3分の1	底面が大きく凹む上げ底の形態である。	径1mm内の黒色・灰色・白色粒子を含む。	外面灰褐色。内面淡灰褐色。底面赤褐色。	A2b類
第28図 318	拡張区1 5層	弥生土器 底部	(底径)5.7 (残存)底部6分の5	下方へ突出し、端部が外へ張り出す形態で、底面は上げ底になる。	径3mm内の灰色・赤色・白色粒子を含む。	外面淡黒褐色。内面淡黄褐色。	A3a類
第28図 319	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.1 (残存)底部2分の1	上げ底で端部が外へ張り出す形態をもつ。	緻密。	外面淡褐黄色。内面黄褐色。	A3a類
第28図 320	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.7 (残存)底部完存	下方へ突出し、底面中央部が凹む形態をもつ。胴部外面には2～4本/cmの平行・右上がりのタタキ調整が観察される。	径1～3mmの粒子を含む。雲母粒子を含む。	外面暗灰黄色。内面暗灰白色。	A2a類

実測番号	出土場所	器種・部位	法量(cm)	形態・技法など	胎土	色調	備考
第28図 321	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.1 (残存)底部2分の1	下方へ突出する底部で、底面中央が凹む。	径1mm内の白色・赤色粒子を含む。	外面褐褐色。 内面橙褐色。	A2a類
第28図 322	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.8 (残存)底部5分の3	わずかに上げ底の底部である。	径1mm内の赤色・白色粒子を含む。	外面白褐色。 底面淡白褐色。 内面褐黄色。	A3a類
第28図 323	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.3 (残存)底部4分の3	下方へ突出し、端部が外へ張り出す。底面は中央部が凹む。	径1mm内の粒子を含む。	外面淡灰乳色。 内面淡灰白色。	A2a類
第28図 324	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.0 (残存)底部完存	下方へ突出し、端部が外へ張り出す底部で、底面中央部が少し凹む。	径1mm内の灰色・白色・赤色粒子を含む。	外面褐色。 内面白灰色。	A2a類
第28図 325	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.9 (残存)底部ほぼ完存	下方へ突出する平底の形態をもつ。胴部外面に右上りのタキが施される。	径1mm内の赤色・灰色・雲母粒を含む。	外面淡黄灰色。 内面淡灰黄色。	A1a類
第28図 326	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.7 (残存)底部ほぼ完存	わずかに上げ底気味の底部をもつ。内面に工具痕がみられる。	径1mm内の白色・黒色粒子を含む。	外面淡灰褐色。 内面淡灰褐色。	A2a類
第28図 327	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.8 (残存)底部5分の4	下方へ突出する底部で、底面は中央部が凹む。	やや緻密。	外面暗褐色。 内面白灰色。	A2a類
第28図 328	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.4 (残存)底部3分の2	突出する底部で、底面中央が凹む。	径1mm内の赤色・灰色・白色粒子を含む。	外面赤乳白。 内面淡灰赤色。	A2a類
第28図 329	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)6.2 (残存)底部2分の1	下方へ突出し、端部が外へ張り出す底部で、底面中央部が凹む。	径3mm内の白色・灰色・赤色粒子を含む。	外面赤褐色。 内面橙褐色。	A2a類
第28図 330	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.8 (残存)底部完存	下方へ突出する底部をもち、底面中央部が上げ底となる。	径1～5mmの砂粒を多く含む。雲母多い。	外面暗褐灰色。 底面褐色。 内面灰褐色。	A2a類
第28図 331	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.3 (残存)底部ほぼ完存	上げ底で端部が外へ張り出す形態をもつ。	径1～3mmの赤色・灰色・白色粒子を含む。	外面乳赤色。 内面淡白赤色。	A2a類
第28図 332	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.6 (残存)底部完存	上げ底の底部である。	径1mm内の赤色・灰色・白色粒子を含む。	外面乳褐色。 内面灰乳色。	A2a類
第28図 333	拡張区1 5層	弥生土器 底部	(底径)4.8 (残存)底部ほぼ完存	上げ底気味の底部をもつ。内面にはハケ調整の痕跡が認められる。	緻密。	外面灰乳色。 内面白灰色。	A2a類
第28図 334	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)3.6 (残存)底部完存	わずかな上げ底で、下方へ突出する形態をとる。	径1～5mmの白色・灰色・赤色粒を含む。	外面黄乳色。 内面淡黄灰色。	A2a類
第28図 335	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.4 (残存)底部完存	やや丸味をもつ平底で、端部は外へ大きく張り出す。	径1mm内の白色・灰色粒子を多く含む。	淡黄灰色。 底面赤褐色。	A1a類
第28図 336	拡張区1 5層	弥生土器 底部	(底径)4.7 (残存)底部完存	下方へ突出し、端部が外へ張り出す形態をもつ。底面中央部が凹む。	径1mm内の白色・灰色粒子を少量含む。	外面暗褐褐色。 内面淡黒色。	A2a類
第28図 337	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.0 (残存)底部ほぼ完存	下方へ突出し、端部が外へ張り出す形態をもち、底面中央部が少し凹む。	径1～2mmの赤色粒子を多く含む。	外面乳白色。 内面褐乳色。	A2a類
第28図 338	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.4 (残存)底部完存	下方へ突出し、端部が外へ張り出す形態で、底面は中央部が凹む。	径1mm内の白色・赤色・黒色粒子を含む。	外面灰白色。 内面茶灰色。	A2a類
第28図 339	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.3 (残存)底部3分の2	下方へ突出し、端部が外へ張り出す形態で、底面中央部が上げ底になる。	径1mm内の白色粒子を多く含む。	外面赤褐色。 内面黄褐色。	A2a類
第28図 340	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.4 (残存)底部5分の3	上げ底で端部が外へ大きく張り出す形態をとる。	径1mm内の赤色・黒色・灰色粒子を含む。	外面乳褐色。 内面淡乳褐色。	A2a類

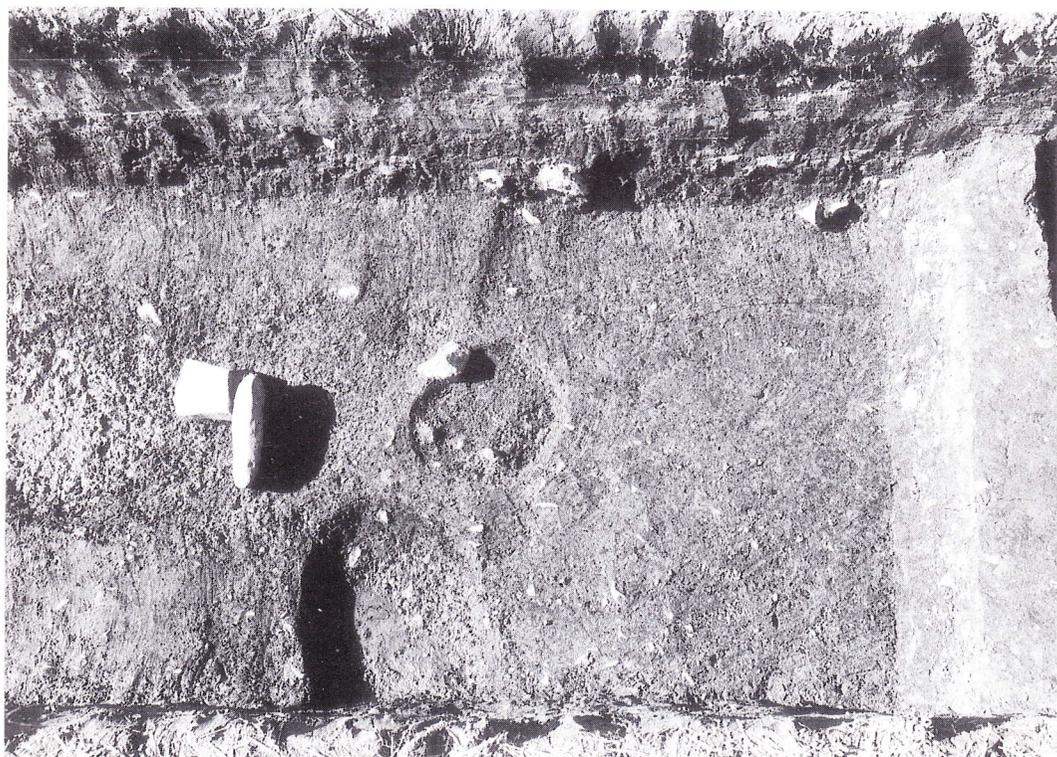
実測番号	出土場所	器種・部位	法量(cm)	形態・技法など	胎土	色調	備考
第28図 341	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)3.8 (残存)底部完存	上げ底で、端部は外へ張り出す。	径1mm内の黒色・赤色粒子を含む。	外面淡褐色。 内面白褐色。	A2b類
第28図 342	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.6 (残存)底部2分の1	底面中央部が凹む形態である。	径1mm内の粒子を含む。	外面褐色。 内面淡白灰色。	A2a類
第28図 343	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.2 (残存)底部5分の3	上げ底の底部で、端部は外へ大きく張り出す。	径3mm内の白色・灰色粒子を多く含む。	外面淡白褐色。 内面白褐色。	A3a類
第28図 344	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)6.0 (残存)底部10分の7	外へ張り出す端部と上げ底の底面をもつ。	径1mm内の白色粒子を含む。	外面黄褐色。 内面淡灰色。	A3a類
第28図 345	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.4 (残存)底部4分の1	深さ1.8cmもの極端に深い上げ底形態をもち、端部は外方へ大きく張り出す。	径1mm内の赤色・灰色粒子を含む。	外面乳灰色。 内面褐色。	A3b類
第28図 346	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.7 (残存)底部完存	平底で下方へ突出する底部をもつ。	径1mm内の赤色・灰色・黒色粒子を含む。	乳灰色。	A1a類
第28図 347	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.4 (残存)底部完存	下方へ突出する平底の底部をもつ。胴部から底部の外面にはタタキ調整が認められる。	径1～3mmの赤色・白色・黒色粒子を含む。	外面乳灰色。 内面淡乳灰色。	A1a類
第28図 348	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.8 (残存)底部完存	下方へ突出した底部で、底面はほぼ平坦面である。	径1mm内の白色・赤色・灰色粒子を含む。	外面赤褐色。 内面褐色。	A1a類
第28図 349	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.0 (残存)底部5分の1	下方へ突出する底部である。	径1mm内の赤色・黒色粒子を多く含む。	外面白灰色。 内面淡赤褐色。	A2a類
第28図 350	拡張区1 5層	弥生土器 底部	(底径)4.8 (残存)底部2分の1	下方へ突出し、底面中央部が凹むとみられる底部である。	径3mm内の白色・灰色粒子を含む。	外面暗赤褐色。 内面暗灰黄色。	A2a類
第28図 351	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.5 (残存)底部6分の5	下方に突出し、底面中央部が凹む。胴部外面には2～3本/cmの右がりのタタキ調整が施される。	径1mm内の粒子目立つ。	外面乳褐色。 内面灰乳色。	A2a類
第28図 352	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.5 (残存)底部完存	下方へ突出し、底面全体が上げ底になる。	径1～3mmの灰色・白色粒子を多く含む。	外面乳灰色。 内面乳黄色。	A3b類
第28図 353	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)6.4 (残存)底部2分の1	下方に短く突出し、底面中央部がわずかに凹む形態となる。	径3mm内の灰色・白色・黒色粒子を含む。	外面乳褐色。 内面白灰色。	A2a類
第28図 354	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)3.9 (残存)底部10分の7	上げ底で端部は丸く外へ張り出す形態をとる。	径3mm内の赤色・白色・灰色粒子を含む。	外面乳黄色。 内面淡乳赤色。	A2b類
第28図 355	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)3.3 (残存)底部完存	下方に短く突出し、底面中央部が凹む形態となる。胴部は底部から大きく開く。	径1～3mmの赤色・黒色・白色粒子を含む。	外面乳赤色。 内面暗乳灰色。	A2a類
第28図 356	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)4.8 (残存)底部完存	極端な上げ底で、端部が外へ張り出し、高台状の底部をもつ。	径1mm大の赤色粒子が目立つ。	外面乳赤色。 内面淡赤灰色。	A2b類
第28図 357	拡張区1 4層	弥生土器 底部	(底径)5.8 (残存)底部完存	下方へ突出し、端部が外へ張り出す形態をもち、底面は中央部に向かってより凹む。	径1mm大の赤色粒子が目立つ。	外面乳褐色。 内面乳赤色。	A3a類



1. 調査区全景（南より）



1. トレンチ部7区 東壁土層



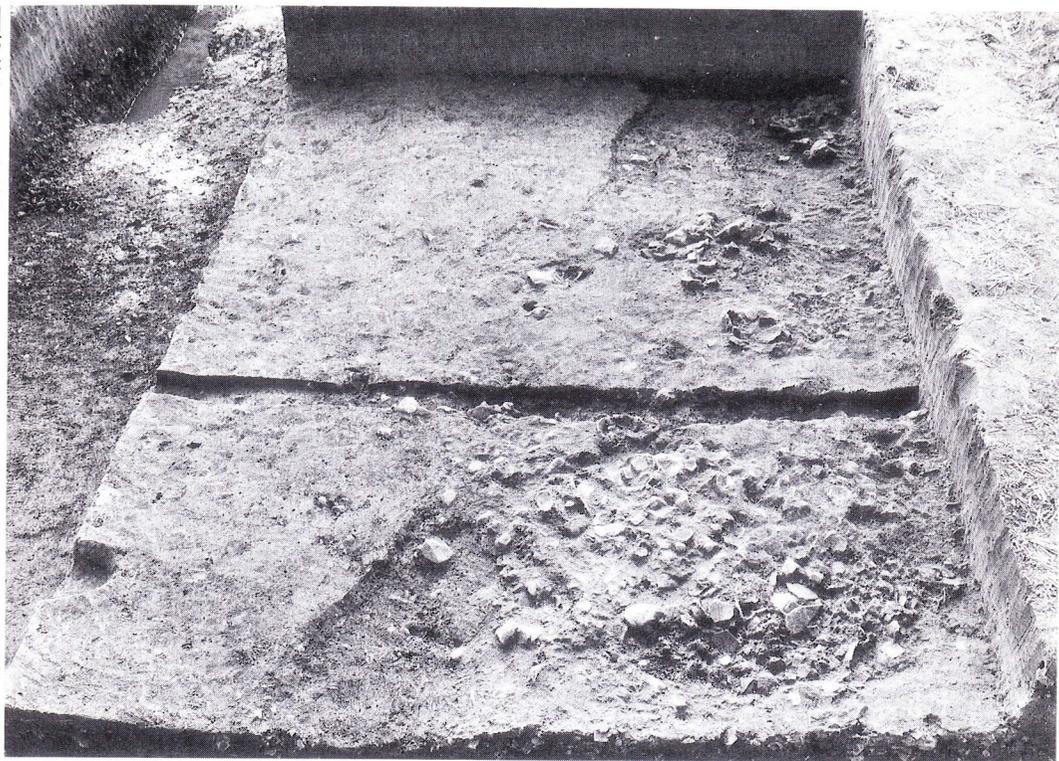
2. トレンチ部3区 第4層上面遺構



1. トレンチ部3区 SD-08 (南より)



2. トレンチ部3区 SD-08 (砥石)



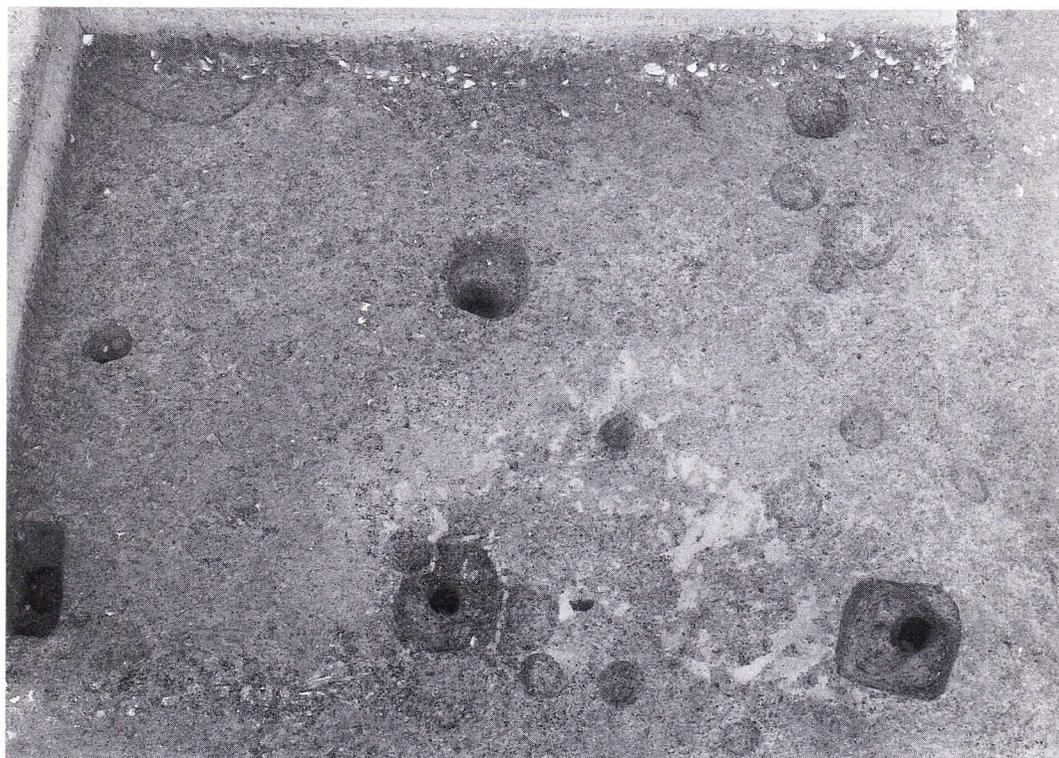
1. 拡張区1 第4層 弥生土器出土状況



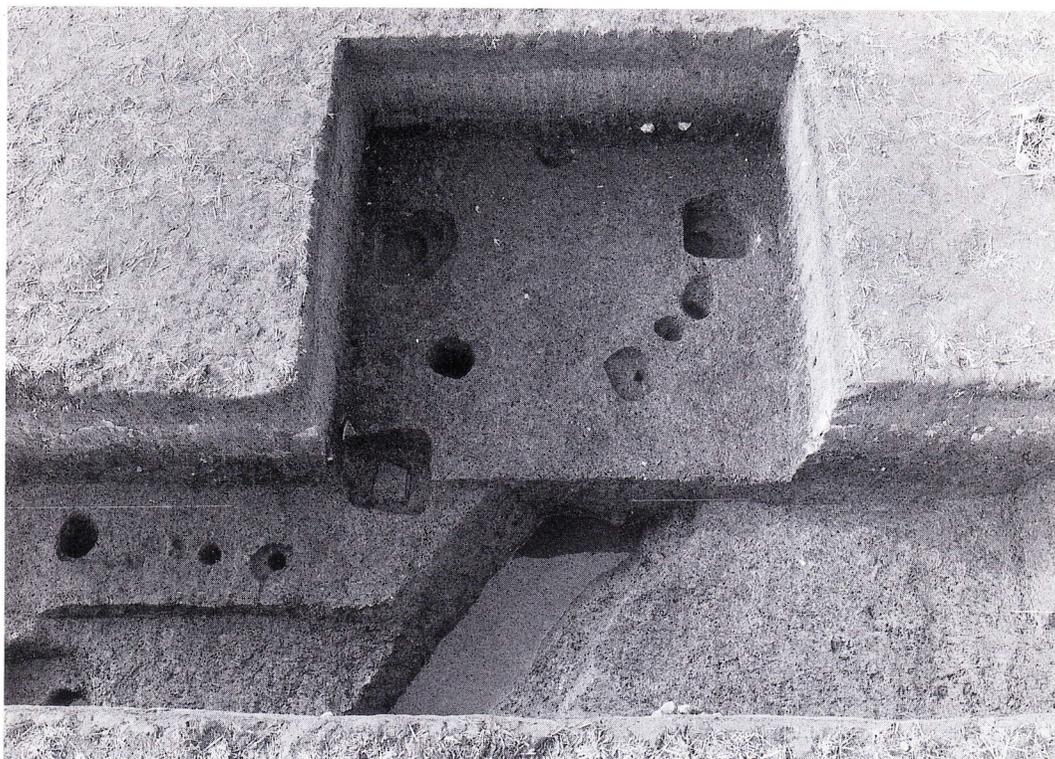
2. 拡張区1 西壁土層



1. 拡張区1 全景（東より）



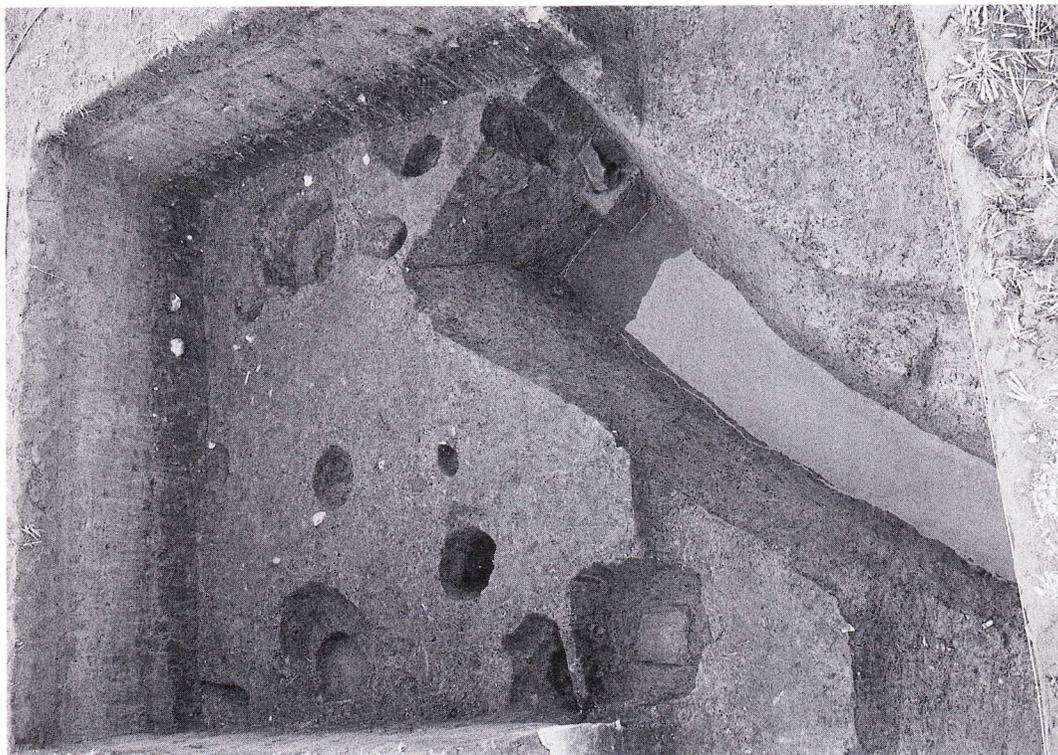
2. 拡張区1 SB-01（東より）



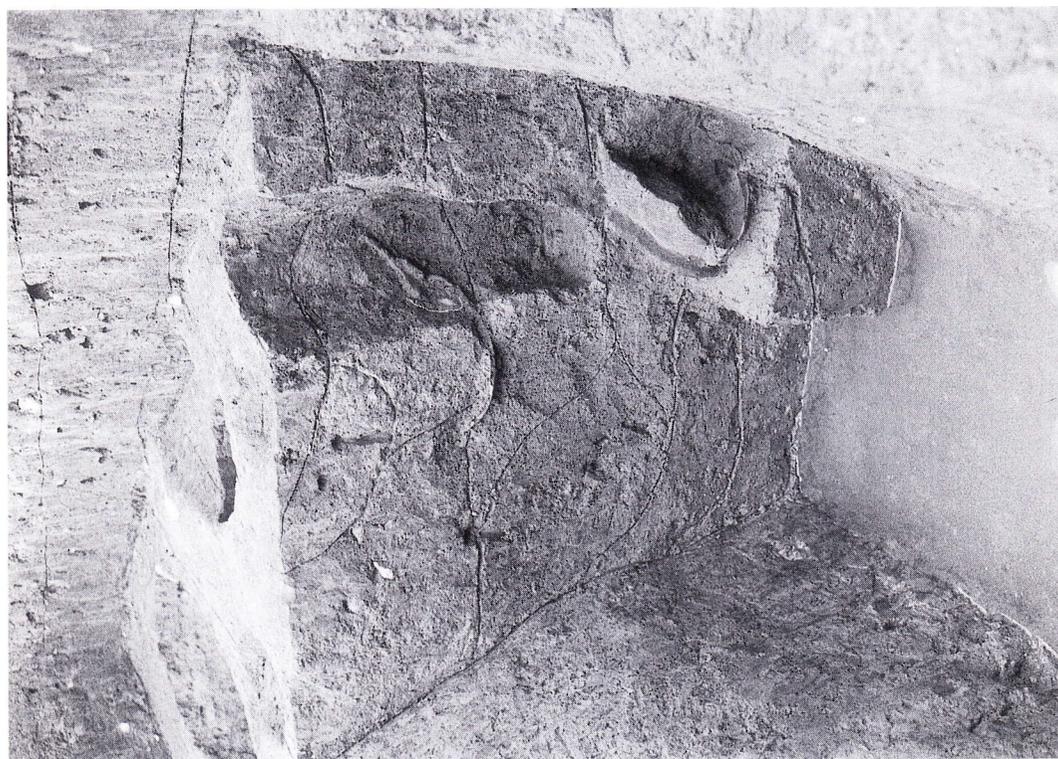
1. 拡張区2 全景（東より）



2. 拡張区2 SB-02（東より）



1. トレンチ部5区 拡張区2 SD-10 (東より)



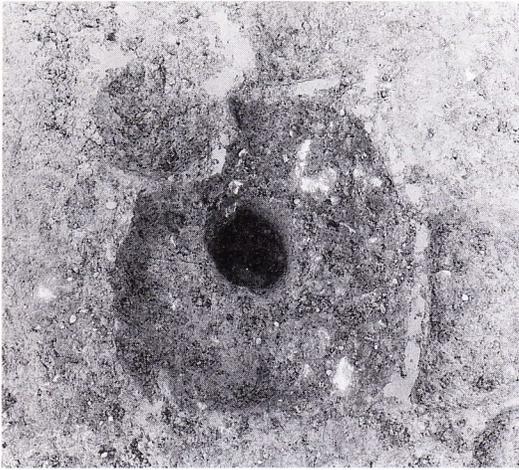
2. 拡張区2 SD-10西壁土層



1. トレンチ部4区 P17



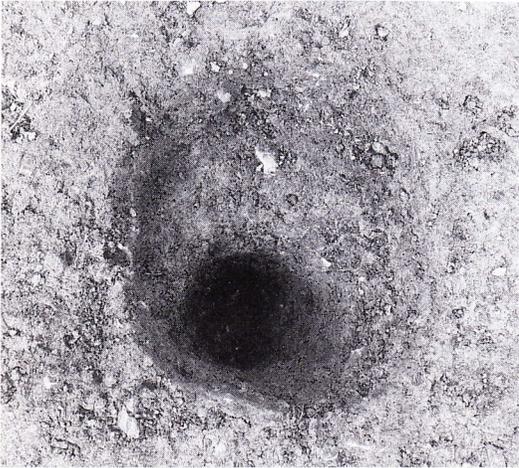
2. P17 柱材遺存状況



1. 拡張区1 P-29



2. 拡張区1 P-29下層



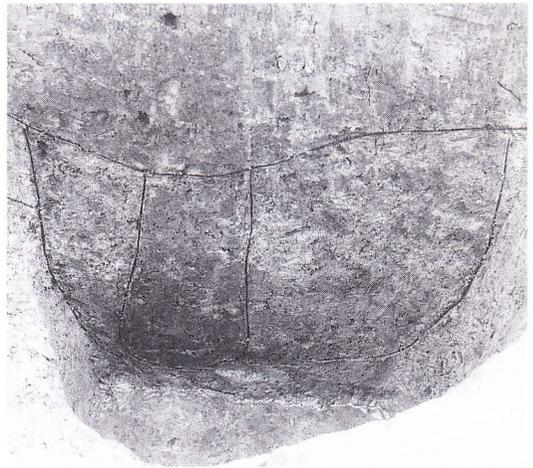
3. 拡張区1 P-31



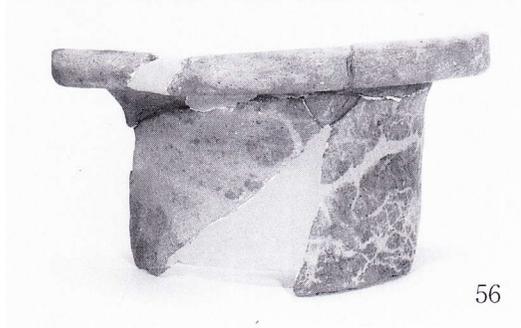
4. 拡張区1 P-30

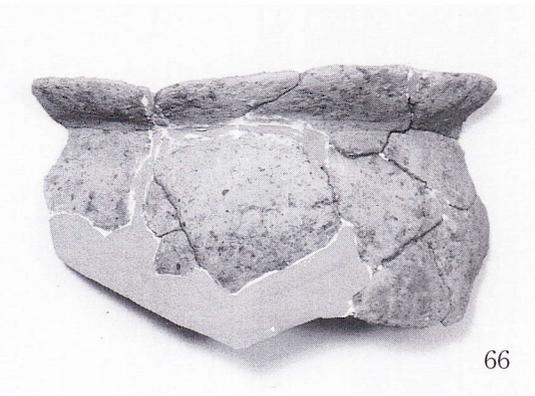
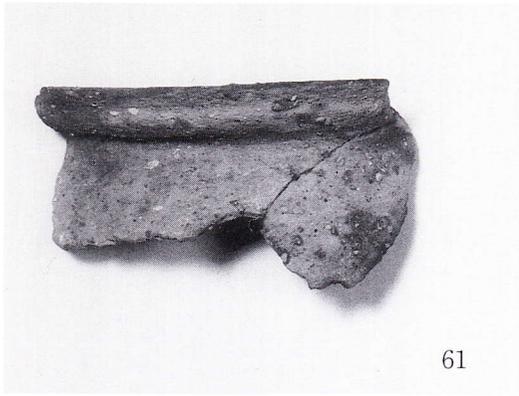


5. 拡張区2 P-7



6. トレンチ部5区 P24







58



58



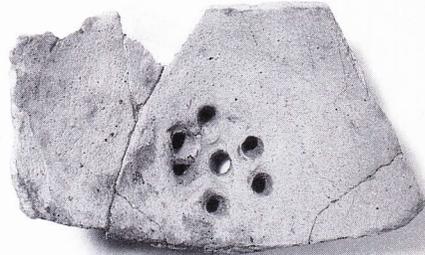
58



3



68



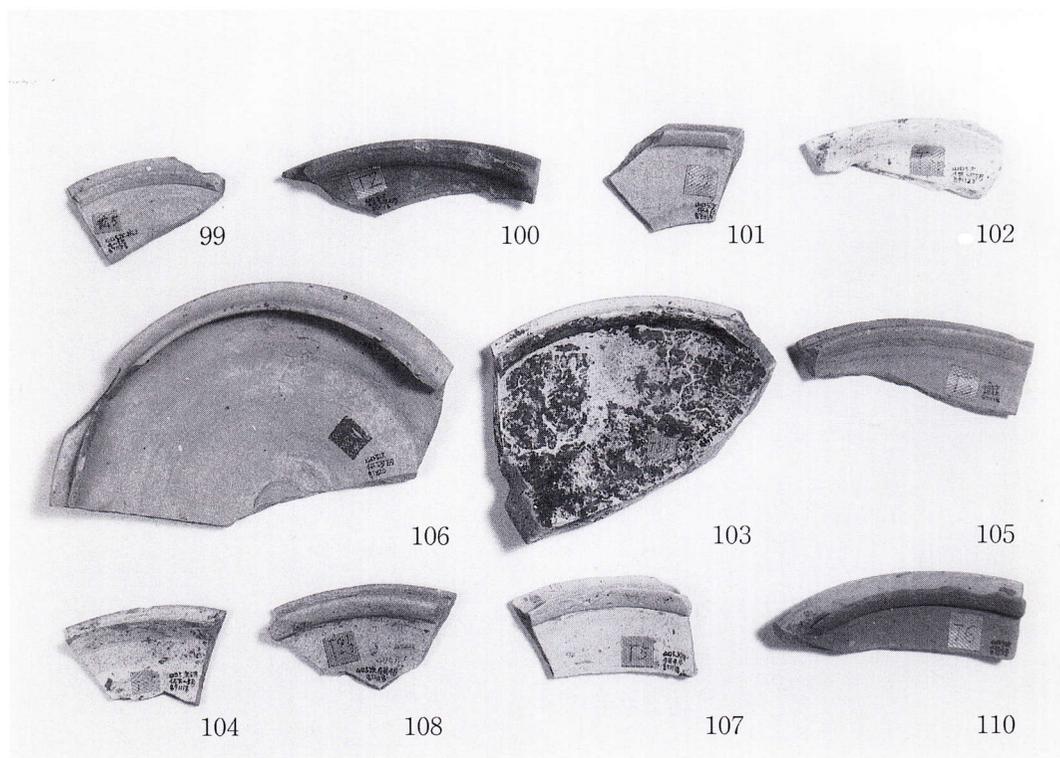
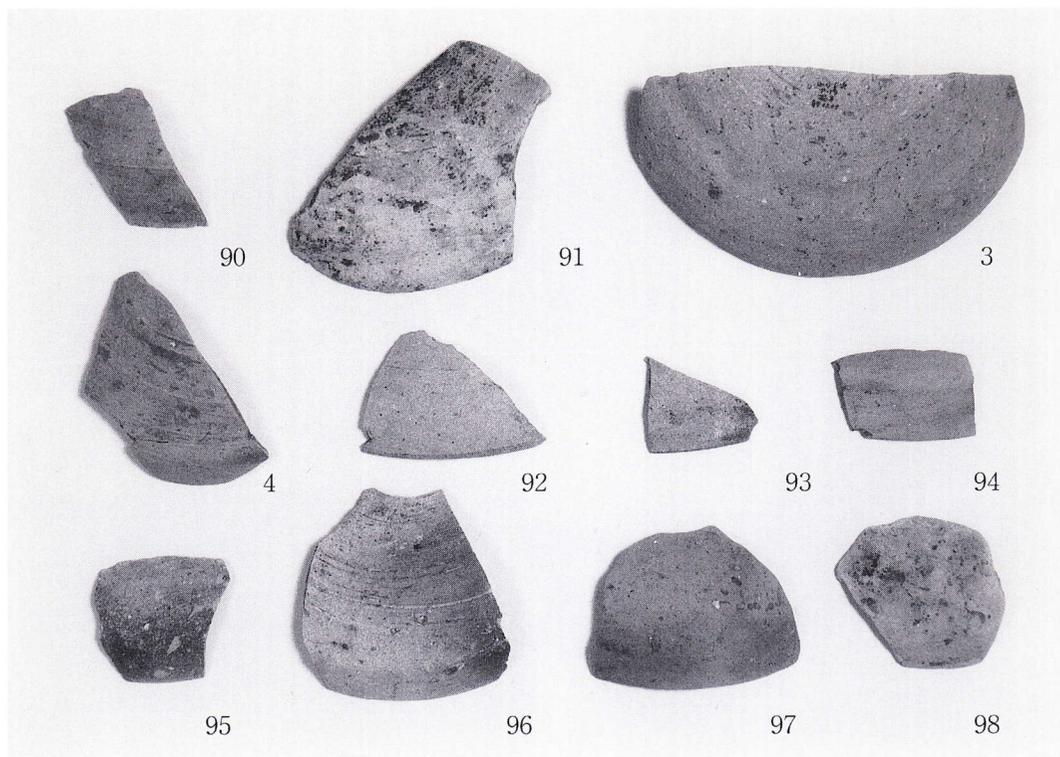
68



148



11





120



119



121



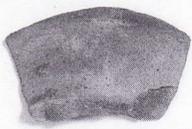
122



123



124



128



129



130



131



133



134



135



136



137



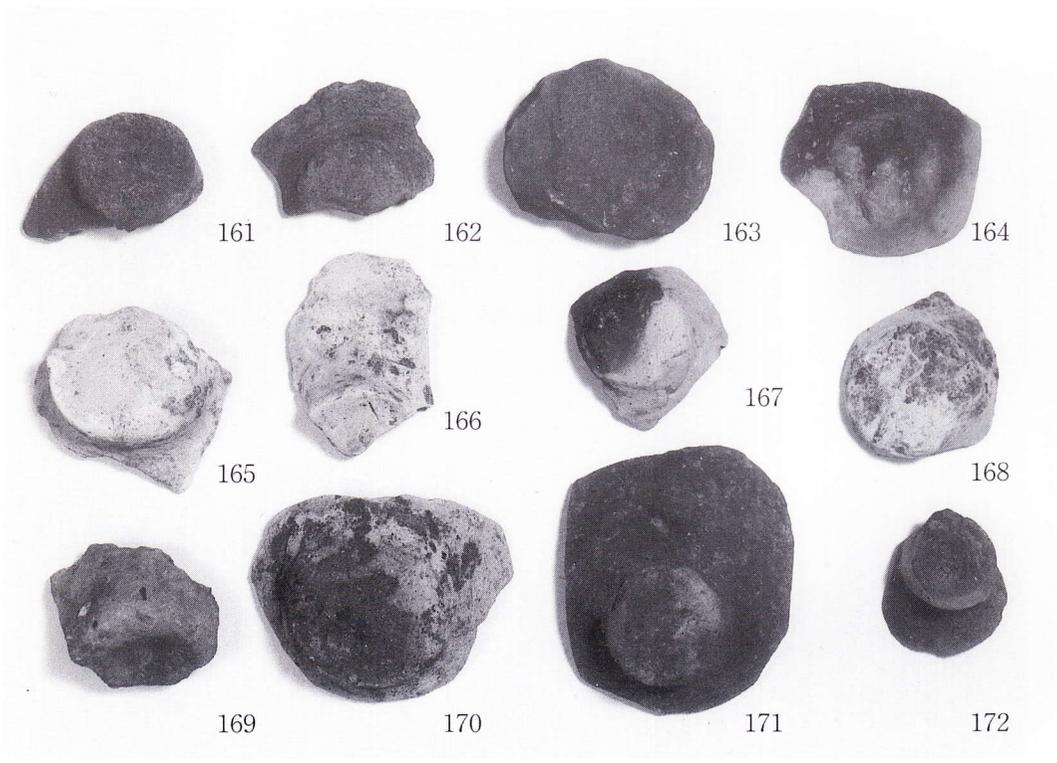
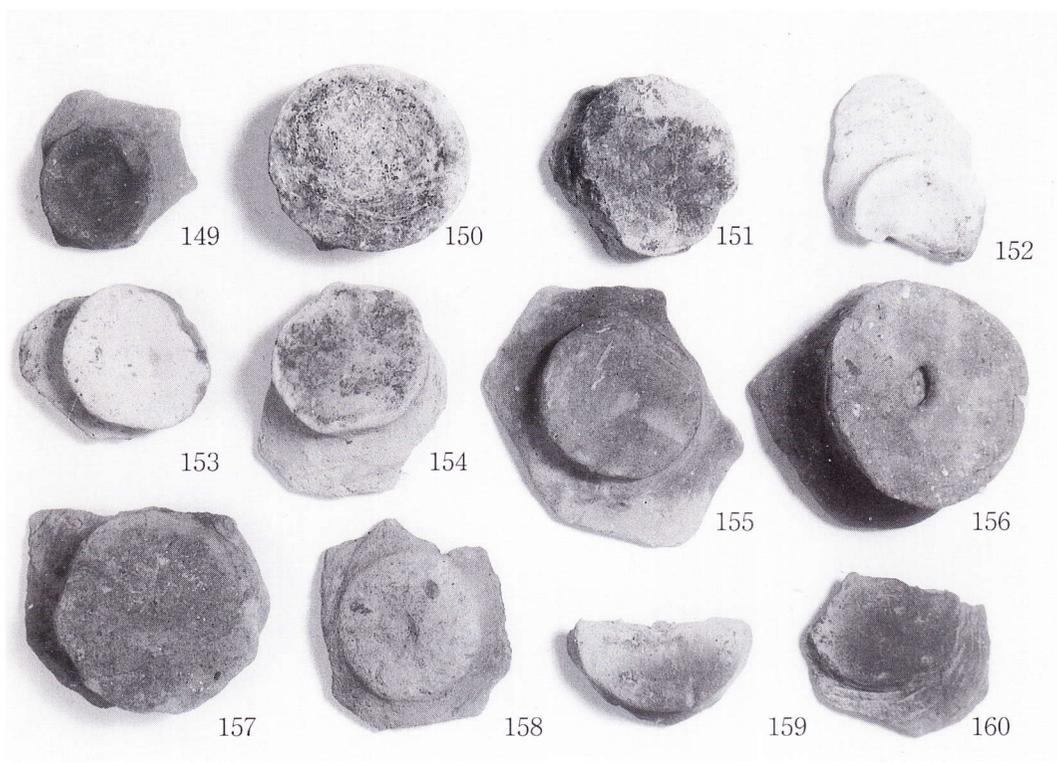
138

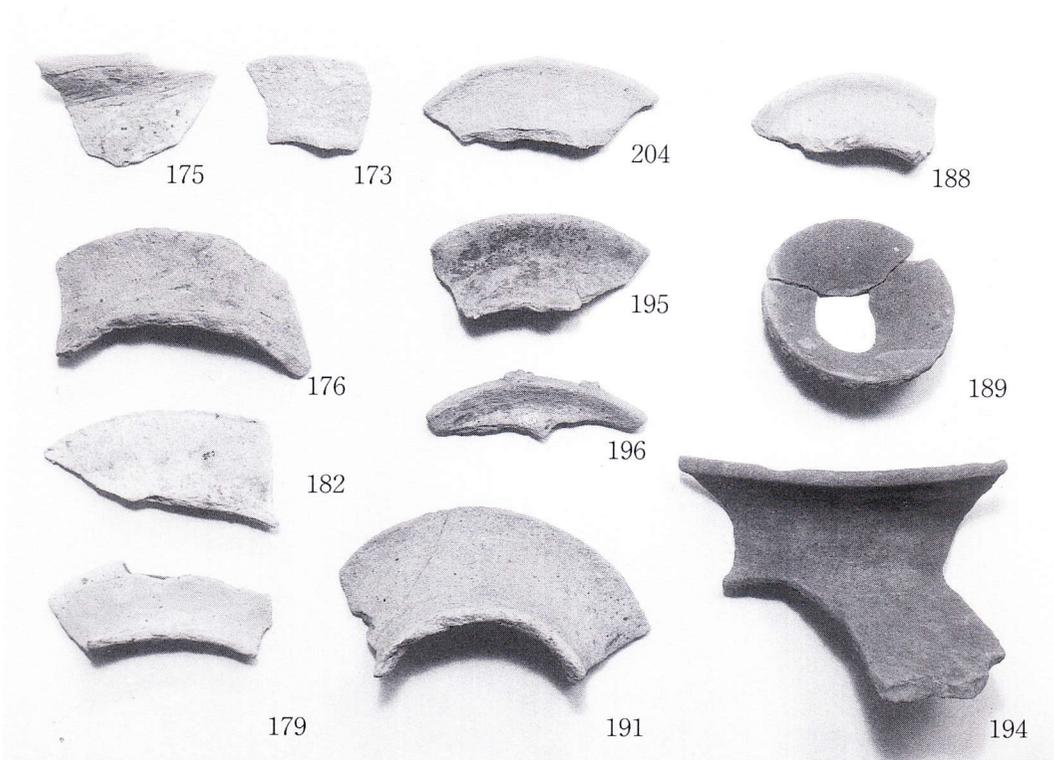
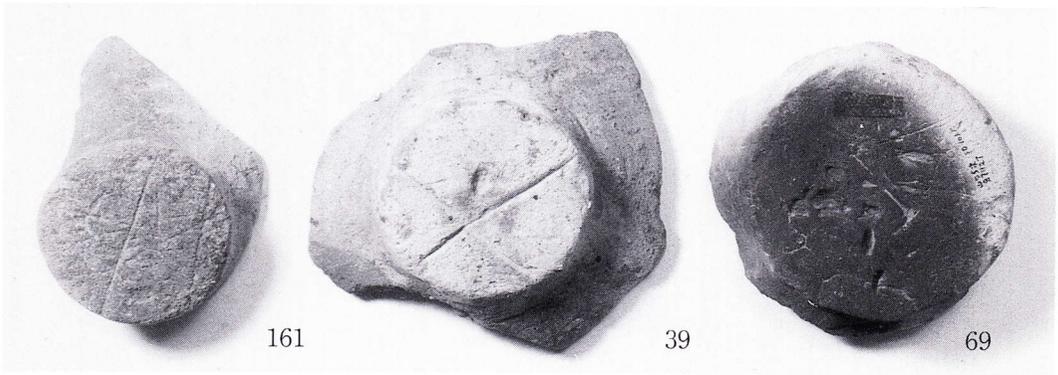


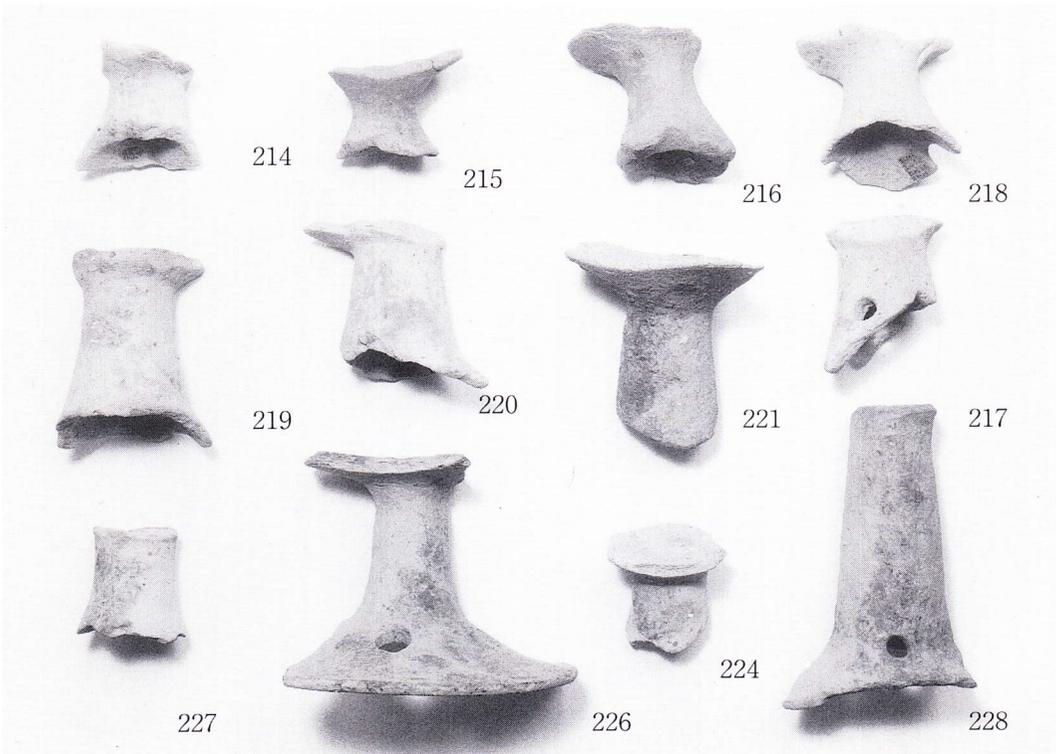
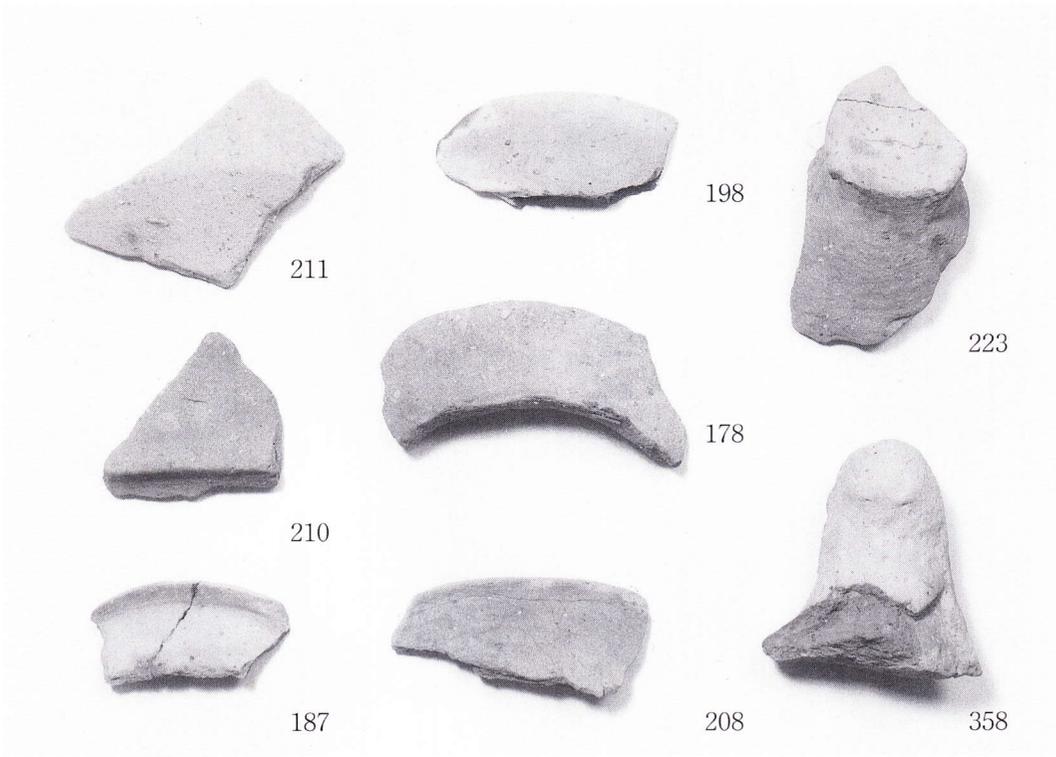
139

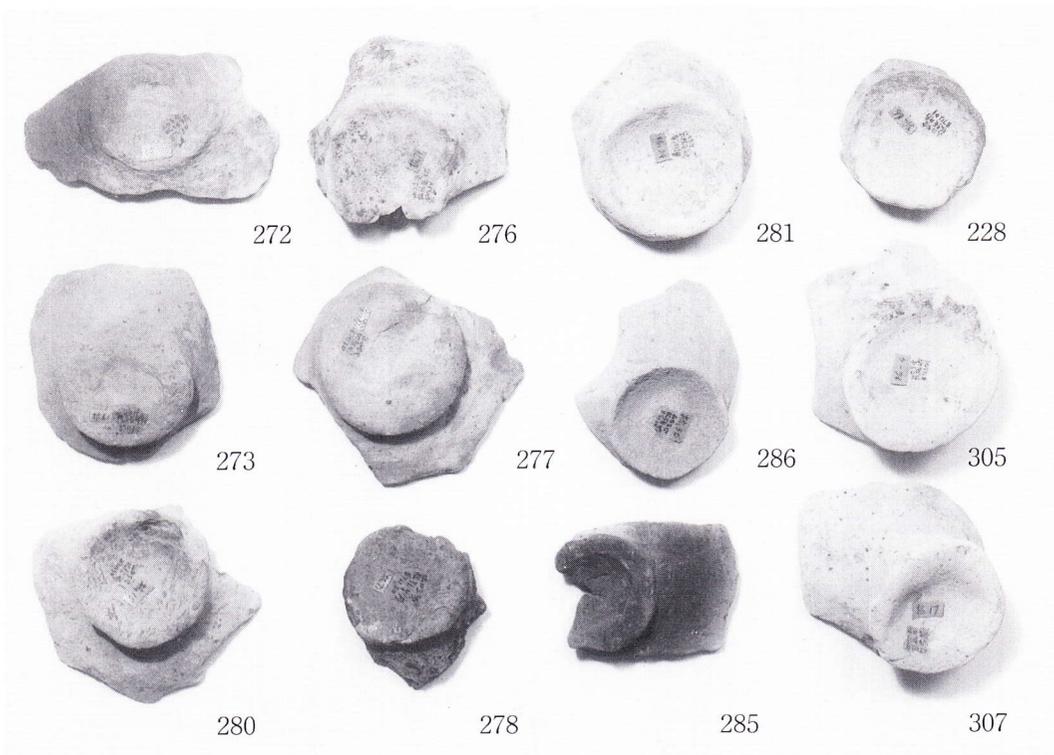


140









平成2年3月31日発行

**山口遺跡第5次発掘調査報告書**

編集・発行 和歌山市教育委員会

和歌山市七番丁23

印刷 西岡総合印刷株式会社

©和歌山市教育委員会 1990